

日本近現代文学におけるタイ表象の研究

タナポーン, トリラッサクルチャイ

<https://doi.org/10.15017/1440992>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：published
権利関係：全文ファイル公表済



日本近現代文学におけるタイ表象の研究

トリラッサクルチャイ タナポーン

2014 年 2 月

比較社会文化学府

目次

序章	-----	1
1	タイの表象研究の前提として	1
2	タイのイメージ／表象に関する研究	3
3	各章の概要	5
第1部 メディアの中のタイ		
第1章 「読売新聞」におけるタイ	-----	10
1	はじめに	10
2	明治大正期	11
3	戦前昭和期	16
4	戦後昭和・平成期	18
5	まとめ	22
第2章 タイ国旅行——日本人旅行者たちは何を見たのか——	-----	24
1	はじめに	24
2	シヤムへの旅	25
3	探検時代から冒険時代へ	28
4	タイに渡航する特派員	31
5	タイ旅行自由化のはじまり	36
6	まとめ	40
第2部 日本近代文学におけるタイ表象		
第3章 山田長政関連のテキストにおけるシヤム	-----	44
1	はじめに	44
2	山田長政テキストについて	45
3	遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』	47
4	角田喜久雄『山田長政』	57
5	遠藤周作『王国への道 山田長政』	63
6	まとめ	70

第4章	南方徴用作家の〈タイ〉——アジア太平洋戦争下の日タイ表象——	75
1	はじめに	75
2	徴用作家が見たバンコク	76
3	タイ人への眼差し	78
4	「チャイヨー」と叫ぶタイ人	80
5	タイ文学における日本軍の表象	82
6	まとめ	88
第5章	1970—1980年代のミステリー小説におけるタイ	91
1	はじめに	91
2	太平洋戦争の記憶	93
3	〈癒しの空間〉から〈危険な空間〉へ	96
4	救われる女性たち	100
5	ミステリー小説におけるタイ	103
第6章	村上春樹「タイランド」から見た「タイ」	106
1	はじめに	106
2	「根というものがない」さつき	108
3	バンコクからリゾートの空間へ	110
4	未開地の老女の予言	112
5	「タイランド」におけるタイ	115
終章		118
1	明治大正期の〈シャム〉	118
2	アジア・太平洋戦争期の〈タイ〉	119
3	アジア・太平洋戦後期の〈タイ〉	120
4	平成期（1990年代）の〈タイランド〉	121
主要参考文献		123

序章

1 タイの表象研究の前提として

本研究の目的は、明治期から1990年代の日本近現代文学におけるタイの語られ方を考察することで、近代以降の日タイ関係におけるタイ表象はどのように語られてきたのかを考察することである。日本とタイが正式に国交を結んだのは明治20年であったが、さらに600年前にさかのぼれば、日本とタイの御朱印船貿易が行われていた。長い交流の歴史の上に、多くの日本の文献でタイは様々に語られてきた。具体的な例を挙げると、例えば、山田長政テクストの舞台としてのタイや時代などのモチーフは共通していても、タイについての語り方はそれぞれ相違している。ここから見ると、山田長政テクストなどの日本の文献はタイの〈本質〉を語れば、タイの語り方は全て統一すべきである。しかし、日本の新聞記事や、旅行記や、小説などの文献におけるタイは語る人の知識や価値観などによって描写されているため、それぞれ異なる〈表象〉となっているのである。

表象（レプレゼンテーション）とは、「眼の前に存在しない実在あるいは自らを表せない実在を表す行為、あるいはその代理となる行為を指す」¹。ということは、表象は他者への眼差しと関わっている。何か「モノ」を「見る」にあたって、その「モノ」は「眼の前に存在しなくても」、根本として位置付けられる概念（あるいは、意味）が見る者によって作成される。「モノ」に意味を付与する際には、「意味作用システム」を使わなければならない。

意味作用システムとは、言語から法・ルール・常識・習慣・儀式・流行などに至るまで、世界を構成する物・出来事・行為・人々などといった「モノ」に意味を付与するためのあらゆる体系を指す。それは、第一義に、人々が物・出来事・（自らを含めた）人間のことを学び話すことを可能にする体系として捉えられる。その体系は特定の時間や空間での社会的構築物であり、時代や地域などの社会状況や人々の生活様式が異なれば内容がそれぞれ異なるものでもある。また、そのようなシステムとシステムの間には強度の差があり、あるシステムは別のシステムに従属してサブ・システム化していたり、あるシステムと別のシステムは互いに対立しあったりもしている。つまり、強度の差こそあれ、システムの数だけ「モノ」にも複数の意味が付与されている。（小暮修三『アメリカ雑誌に映る〈日本人〉 オリエンタリズムへのメディア論的接近』青弓社、2008年12月）

¹ 「REPRESENTATION 表象」（ジョゼフ・チルダーズ、ゲーリー・ヘンツィ編『コロンビア大学 現代文学・文化批評用語辞典』杉野健太郎、中村裕英、丸山修訳、松柏社、2002年4月）

「意味作用システム」において「モノ」そのものに唯一不変の「真」の意味が内在するわけではない。社会や歴史などによって異なる「意味作用システム」に応じて意味が生成されるのである。具体的な例として、「赤い服」という「モノ」は、中国においては赤色が最も縁起が良い色であるため、旧正月に赤い服を着る。これに対して、西洋の国の人にとって赤い服といえば、サンタクロースを連想させる。一方、タイで赤い服は民主党と対立するタクシン元首相派の政治的シンボルである。このように、「赤い服」が持つ意味合いは、それぞれの文化における「意味作用システム」の違いに応じて異なっている。「赤い服」それ自体に固定的な「真」の意味があるわけではない。また、この「意味作用システム」は、「知識」を持つ支配集団が規定する意味や価値など諸制度によって、「知識」を持たない従属集団をコントロールする機能もある。これについて、スチュアート・ホールはイギリスの黒人についての例を挙げている。ホールによれば、イギリスの黒人は周縁的で劣等な存在の表象として支配集団である白人によって構築され、そして、その表象はメディアによってステレオタイプ化された。黒人の否定的な表象は「「黒人」のアイデンティティ構築に構成的役割を果たして（中略）できるだけ真正性をもたらす」²のであり、それによって支配集団の利益が保障されるのである。

支配集団によって構築された表象に抵抗するため、まずその表象を分析する必要がある。これは、エドワード・サイードが「西洋」の植民地主義者に構成された「東洋」の表象、つまり、「オリエンタリズム」について批判している通りである。サイードによれば、「^{オリエンタル}東洋人は非合理的で、下劣で（墮落して）、幼稚で、「異常」である。したがって、ヨーロッパ人は、合理的で、有徳で、成熟しており、かつ「正常」であるということになる」³という西洋人によるステレオタイプ化され表象が固定化された。こうして、「東洋」と「西洋」の関係性は「支配者—被支配者」という二項対立化された表象に基づくのである。

タイと日本の関係を見れば、タイはアジア・太平洋戦争中に日本によって軍事的に侵攻された過去があり、戦後においても日本企業が進出し経済的に支配された一面がある。しかし、そうした「支配—被支配」の構図は、従来のタイ日関係についてのタイ日双方の研究において、日中関係や日韓関係における同種の研究に比して、それほど問題視されてこなかった。ただし、タイ側から見れば、日本の影響力は、おそらく一般に日本人が想像する以上に大きい。その日本が、近代においてタイをどのように把握し、表現してきたのか、その表象のあり方を新聞・紀行・旅行記および文芸作品を中心的な素材として考察することが本論の具体的な内容となる。

文学は帰属する社会や文化を通して成立する一つのメディアであり、読者は文学作品の中から時代性・社会性・文化性の反映を読み取ることができる。また、それぞれの文学作品は個別の要素や想像力の要素によってそれぞれのタイイメージを生成しながら、同時にそれらのイメージの集積から全体的な表象をもたらすため、文学作品を分析することは不

² ジェームス・プロクター『シリーズ 現代思想ガイドブック スチュアート・ホール』（小笠原博毅訳、青土社、2006年2月）

³ エドワード・W・サイード『平凡社ライブラリー11 オリエンタリズム 上』（今沢紀子訳、平凡社、2002年2月）

可避なのである。このように、日本の時代性・社会性・文化性におけるタイの表象を読むため、本論では明治期から1990年代までタイを舞台とした日本近現代文学作品を研究対象として取り上げる。江戸末期から明治期にかけての日本は西洋文化の流入に従って、新しい知識、新しい社会観、文化観などを取り入れ、様々な国と交流することによって「日本」という近代国民国家を形成した。つまり、「近代国民国家」として位置づけるため、「国家ではないもの」（外国）が排除されなければならない。このように、明治期は「外国」の概念が作り出された時期なのである。また、日本とタイの関係は明治20年（1887年）に公式な外交関係を結んだため、タイ表象を考察する際に表象の出発点から検討する必要がある。

明治期からの長い交流の中でタイは日本により様々な表象を押し付けられてきた。1985年のプラザ合意後、海外旅行は一般化され、タイを訪れる日本人旅行者も急増した。しかし、1980年代の日本人旅行者が見たタイは、買春の街や麻薬生産地といったタイにとって好ましくないイメージが強い。これらのイメージを払拭するため、1987年にタイ国政府観光局（現在、タイ国政府観光庁）がタイ文化やビーチなどの観光地を宣伝する「タイ観光年」というキャンペーンを打ち出して成功し、観光客を誘致するためにタイ観光開発を全国的に推進した。このように、1990年代のタイは以前のように外国に「見られるタイ」から「見せるタイ」に変化した時代なのである。以上のように、本論の研究対象の期間はタイ表象が作り出された明治期から1990年代までとする。

2 タイのイメージ／表象に関する研究

タイのイメージ研究については、ファンスワン・ノップマット「“SMILES OF DECEIT” : “FARANGS” AND THE IMAGINING OF THAILAND IN CONTEMPORARY WESTERN NOVELS」（チュラーロンコーン大学文学部比較文学学科、2008年）という博士論文がある。ファンスワンは、1989年から2004年までのタイを舞台とした、タイ人の女主人公と西洋人の男主人公が登場する、ロマンスの要素がある西洋文学⁴（イギリス、アメリカ、カナダ）におけるタイのイメージについて考察している。ファンスワンは、西洋文学でタイ人女性と西洋人男性は「ネオン街（red light zone）」というタイで男女関係を展開する。タイ人女性にとって、西洋人男性にサービスすることは彼女たちの仕事だと見なされている一方、西洋人男性にとって、タイ人女性のサービスは西洋人に対する〈愛情〉があるためだと思われる。ノップマットは、このような関係の中で、現代の西洋社会にない、男性至上主義的なタイ人女性のサービスを受けることは、西洋人男性がタイに求めるものと等価であると指摘している。

⁴ Collin Piprell “Bangkok Knights”（1989、カナダ）、David Young “The Scribe”（2000、イギリス）、Christopher G. Moore “Minor Wife”（2002、カナダ）、David Young “Thailand Joy”（2002、イギリス）、J.F. Gump “Even Thai Girls Cry”（2003、アメリカ）、Phillip J. Cunningham “Peacock Hotel”（2004、アメリカ）、Andrew Hicks “Thai Girl”（2004、イギリス）、Stephen Leather “Private Dancer”（2004、イギリス）が挙げられている。

一方、日本文学ではタイを舞台とした文学作品は、第二次世界大戦前には山田長政を扱った作品以外にあまり例はない。戦後になるとタイを舞台にした作品が書かれていくが、日本文学におけるタイのイメージや表象研究はまだ盛んとは言えないのである。日本文学におけるタイのイメージ研究の先駆者は、江戸期のシャムのイメージを検討したラッダー・ケーウリッデー⁵である。ラッダーは、寺島良安『和漢三才図会』（1712年）、宗心『天竺徳兵衛物語』（制作年不明）、木下八石衛問『暹羅國山田氏興亡記』（制作年不明）、『暹羅國風土軍記』（作者不明、制作年不明）におけるシャムのイメージを考察している。ラッダーによると、江戸時代にはシャムに渡った人たちが自らの経験をもとに書いた書物は存在したが、それらは江戸幕府の政策もあり、ほとんど読まれることはなかった。そのため、当時のシャムのイメージは、シャムの体験談よりも主に中国の書籍によって形成されており、珍妙で、エキゾチックなイメージとなっていると指摘している。ラッダーの結論に合致する原田実「「山田長政」伝説を作った侠」（「新潮45」2004年3月）でも『水滸伝』に注目して「『水滸伝』の中のシャムについて「暹羅は必ずしも山田長政のシャムすなわちこんにちのタイではない」「それは単に“遠い遠い国”であり、あるいはいつそ“どこにもない国”の謂である」（中略）「山田長政のシャム」もまた日本人にとっての「遠い遠い国」「どこにもない国」だったのではないだろうか」と述べられている。このように、江戸期のシャム像は山田長政に関する文献を中心に形成され、「どこにもない国」「遠い遠い国」として捉えられていたのである。

土屋了子⁶は、江戸期から1990年代までの山田長政の文献を調査し、山田長政のイメージと日タイ関係について研究している。土屋によれば、明治期の山田長政像はアジア主義や南進論を実践した模範として位置づけられ、1940年代には戦争遂行という政治目的のために歪められている。しかし、戦後になると、神話化された山田長政像が見られなくなるという。山田長政像については、久保田裕子⁷も日清戦争期に発表された山田長政については「伝説的に人物が召喚されたと考えられるが、「暹羅」の国や人に関する描写は殆ど見られない」と指摘し、また、昭和10年代に書かれた山田長政についても「殆どが現地を訪れずに書いたという制約もあり、対象の思いがけない姿を知り、驚きと共に描くというよりは、見る側（書き手側）の欲望を他者の姿に反映させるものとなっている」とする。その上で、戦前期の山田長政にはタイのイメージよりも「南洋」のイメージが投影されていると指摘している。

久保田裕子には、1960年代に発表された三島由紀夫『暁の寺』を取り上げ、『暁の寺』におけるタイ国表象について分析した論⁸もあり、「タイという場所をエロスのな魅惑に満

⁵ ลัดดา แก้วฤทธิเดช. รายงานการวิจัยเรื่องภาพลักษณ์สยามประเทศที่ปรากฏในวรรณคดีญี่ปุ่นช่วงศตวรรษที่ 17-18. รายงานการวิจัยในโครงการวิจัยทุนพัฒนาอาจารย์ใหม่/นักวิจัยใหม่ กองทุนวิจัยและพัฒนากิจการ มูลนิธิส่งเสริมมหาวิทยาลัย, 2546.

⁶ 土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」（「アジア太平洋討究」2003年3月）

⁷ 久保田裕子「近代日本における〈タイ〉イメージ表象の系譜——昭和10年代の〈南洋〉へのまなざし——」（「立命館言語文化研究」2010年1月）

⁸ 詳しくは、久保田裕子「王妃の肖像——三島由紀夫『暁の寺』におけるタイ国表象——」（「福岡教育大学 国語科研究論集」2011年2月）を参照。

ちた、女性のジェンダーやセクシュアリティと結びつけて表象する」⁹と指摘している。メータセート・ナムティップ¹⁰は、三島由紀夫『暁の寺』から1980-1990年代のタイを舞台とした日本文学作品、宮本輝『愉楽の園』、嵐山光三郎「蘭の皮膜」、山田詠美「天国の右手」、佐藤亜有子『ボディ・レンタル』、辻仁成『サヨナライツカ』を取り上げ、「舞台となったタイの表象には「まなざす側」=旅人の心像、欲求などが投影されており、主人公である日本人のロマンスや空想を盛り上げるための舞台装置として、現実のタイの姿とは似ても似つかないような、よりエキゾチック（時にはグロテスク）で、より官能的な「オリエンタル」としてのイメージが創造され、強調された」¹¹と論じている。

以上のように、江戸期から戦前・戦中にかけての山田長政に関する作品や、1960年代の三島由紀夫『暁の寺』、1970-1980年代のロマンス小説、1990年代に発表された村上春樹「タイランド」¹²などの戦後の文学作品が中心となっている。しかし、ロマンス小説以外の他のジャンルの文学や、戦時中の日本文学などにも、タイのイメージは描写されており、それらを総合的に検討する必要がある。旅行記などのメディアや、戦時中の文学作品や、ロマンス小説以外の他のジャンルの文学作品を取上げ、総合的に検討することで日本近現代文学におけるタイ表象の問題を多角的から全円的に描き出したい。

なお、タイ国はかつて「シャム（暹羅）」と呼ばれていたが、1939年に「シャム」を「タイ」に改称した。本論では、1939年以前のタイは「シャム」とし、1939年以降のタイは「タイ」と記述する。広義のタイは「タイ」と記述する。

3 各章の概要

本論は明治期から1990年代にかけてのタイを舞台とする日本近代文学作品、タイについての報道記事、タイについての紀行・旅行記を対象として、それらのメディアにおけるタイの表象はどのように構築されたのかを分析し、タイ表象の変容を明らかにすることを目的とする。本論は2部6章の構成である。第1部「メディアの中のタイ」では、タイについての一般的な情報を伝える新聞や現地を実際に訪れた記録である旅行記などの資料を中心に検討する。第2部「日本近現代文学におけるタイ」では、小説というフィクションにおいてどのような特色が見られるかを検討する。第一部第二部ともに検討の範囲は、明治期から1990年代にかけてである。

まず第1部「メディアの中のタイ」は、第1章と第2章から成る。第1章では、「読売新聞」に掲載されているタイに関する記事を取り上げる。第2章では、タイについての観

⁹ 久保田裕子「近代日本における〈タイ〉イメージ表象の系譜——昭和10年代の〈南洋〉へのまなざし——」（『立命館言語文化研究』2010年1月）

¹⁰ メータセート・ナムティップ「日本文学にみるタイ表象——オリエンタリズムのまなざしから観光のまなざしへ——」（『立命館言語文化研究』2010年1月）

¹¹ 注10に同じ。

¹² 村上春樹「タイランド」についての先行研究は第2部第6章を参照。

光メディアを取り上げる。ニュースや観光体験記におけるタイの表象はどのように形成されたのかという問題を解明することを目的としている。

第1章では、1874年（明治7年）創刊の「読売新聞」におけるタイ関係の記事を検討する。情報を日々記録する新聞は読者だけではなく、他のメディアにも大きな影響を与えている。そこで、本章では代表的な大衆向けの新聞である「読売新聞」を通して明治期からのタイの社会現象を大まかに紹介しながら、タイに関する記事の中で、特別連載記事、話題になって連続掲載された記事を中心として、これらの記事を検討することで、大きく（1）明治大正期、（2）戦前昭和期、（3）戦後昭和・平成期に区分し、それぞれの時期のタイ表象の特色について分析する。シャムの情報がまだ不十分な明治大正期の「読売新聞」はシャム国情の記事により読者にシャムについての知識を提供する役割を果たしている。明治大正期の特色は、南進論や移民政策に関係し、その文脈においてシャムのイメージは豊饒な資源がある「日本の南進先」となる。戦前昭和期は、日本の重要な貿易相手国で、大東亜共栄圏の関係性の中で「友邦」や「日本の弟」として表現される。戦後昭和・平成期は一概に括るのは難しいが、タイ情報の多様な移入に伴い、多様なイメージ（買春、麻薬、観光、リゾートなど）が投影する。それらの分析を通じ、日本におけるタイ表象が、各時期の日本の政治的経済的戦略と不可分に結びついていることを考察した。

第2章では、タイに関する紀行・旅行記やガイドブックなどに注目し、日本人の渡航目的や現地における眼差しのあり方について検討する。明治大正期の旅行記は、国益に資する報告書的性格や、探検・冒険記でありながら資源の存在を伝えるものも少なくない。昭和10年代の特色は、日本企業の貿易奨励のため、明治大正期のように未開さは強調されず、近代化の要素や観光にふさわしい寺院などのエキゾチックな要素が強調される。観光目的の旅行が自由化された1964年以降の旅行記では、買春、麻薬のイメージが頻繁に取上げられる。タイ国政府観光局による観光宣伝が成功した1987年以降、急増する観光客によって多種多様な旅行スタイルが生まれ、多様なタイのイメージが様々なジャンルの旅行記に反映することになる。

第1章の「読売新聞」と第2章の紀行・旅行記におけるタイ表象は多少相違部分があるが、相互のメディアで投影されたタイの表象は時代を支配する思想とともに変容し、（1）明治期から昭和初期にかけてのシャム（2）アジア・太平洋戦期のタイ（3）アジア・太平洋戦後期のタイ（4）平成期（1990年代）のタイという4つタイの表象に分けられる。このような「読売新聞」や紀行・旅行記におけるタイ表象の変容が、文芸作品にどのように投影されているのか、第1部は第2部での文芸作品の分析を行うための前提として位置づけられる内容になっている。

第2部「日本近現代文学におけるタイ表象」は、第3章から第6章までの4章から成る。まず、第3章で日タイ友好の象徴としての山田長政の文献を中心に、明治、戦前、戦後の山田長政像を分析する。次に、第4章で戦時中の南方徴用作家の作品、第5章で戦後（1970年から1980年代まで）のミステリー小説、第6章で1990年代の村上春樹「タイランド」な

どの各時代を代表する作品を取り上げて、文学におけるタイの表象について考察する。

第3章では、近代の山田長政テキストにおけるシャム表象の変遷を検討する。明治期の山田長政テキストを代表する遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』（1899年）は、江戸以来の長政ものを引き継ぐ一方、明治期のシャムに関する種々の情報や資料を摂取・援用する。同書には、明治期南進論を奨励する意味合いがあり、シャムはその理想的空間となっている。角田喜久雄『山田長政』（1940年）は、長政とルタナ姫のロマンスを通して、当時の大東亜共栄圏のイデオロギーを優位の日本（長政／男）と劣位のシャム（姫＝女／タイ）というパターンを通じて表象し、親日的なシャムを強調している。以上から、この二つの山田長政テキストが、それぞれの時期の政治的言説を背景に生成・受容されたことを指摘する。遠藤周作『王国への道 山田長政』（1979年）は、日本（長政／男）とアユタヤ＝シャム（姫／女）のパターン化は従来通りであるが、アユタヤ＝シャムは「怖ろしい」女性として描写され、戦前までの理想的な長政像や政治的言説との呼応が稀薄になる。近代においても繰り返し文芸化される山田長政テキストの変容から、日本におけるタイの対象化のあり方を考察する。

第4章は、戦時中の南方徴用作家が書いた作品におけるタイの描写を検討する。南方徴用作家の作品に共通するのは、戦中にありながら癒しをもたらす平和な空間としてのタイである。また、その関係が、日本（男）とタイ（女）というロマンスとして反復されることである。南方徴用作家が用いた構造は、戦後におけるタイの作家が書いた人気小説『メナムの残照』（1967年）でも見られる。ただし、それは単純な反復ではなく、『メナムの残照』には親日と反日感情の混在が投影しており、その点に日本におけるタイ表象を内面化しつつ変容するタイの複雑な自画像が窺われることを指摘する。

アジア・太平洋戦争後にタイを舞台とした多くの文芸作品の中で、ミステリー小説はメディアと深い関係性を持つ文芸作品である。特にタイを舞台としたミステリー小説は当時の新聞などのメディアに報道されたタイ、あるいは大衆の関心を引くタイを題材にしている。このような理由から、第5章は、1970-1980年代のミステリーのジャンルでのタイを考察する。ミステリーにおけるタイの特色は、政治的不安定性や麻薬と売春の問題などから成る危険な空間として描かれている点にある。また、日本（男）とタイ（女）というパターン化されたロマンスを頻用しながら、社会問題や貧困の中で苦勞し、民族や家族のために働く女性がしばしば登場する点にある。それらの特色を通じて、日本人男性は可愛そうなタイ人女性を援助する存在として自己を主体化するというパターンが見られる。この現象は、同時代に問題化した日本人による売春行為を、結果的に美化してしまう言説構造を持っている。タイを舞台にした1970-1980年代のミステリー小説は、当時の日本の無意識の欲望を映し出すジャンルになっている。

第6章は、1990年代の小説として、世界中の読者に読まれている村上春樹「タイランド」（1999年）を検討する。「タイランド」は従来のタイ表象で慣用化された危険な空間、ロマンス化される空間、有名な観光地、歴史的・文化的な要素などに言及しない。その一方

で、国際的な都市性、リゾート化された癒し空間、未開地的な要素などが同居する場所としてタイの奥行きを描き、従来のタイ表象では見えなかったタイの奥行きが、登場人物ニミットのタイ語における複数の意味（前兆、記号、原因、夢、男女の生殖器など）に託されていることを指摘する。しかし、一般の日本人読者には、ニミットの名が持つ複数性や象徴性や多様性は読まれない。日本人にとってのタイの画一的な表象とタイの側から見た場合の奥行きとの非対称性を黙示的に示したテキストが「タイランド」であることを論じている。

日本近現代文学におけるタイ表象の変容は、〈シャム〉〈タイ〉〈タイランド〉の三つの語に呼応している。〈シャム〉は、基本的に、江戸期以来の山田長政テキストに見られる遠い南国という漠然としたイメージを負いつつ南進論の対象として政治的言説を背景に生成する場合が多い。20世紀の近代国家として戦時中に誕生した〈タイ〉は、戦時下においては兄妹関係として語られ、戦後においては1970-1980年代のミステリーのジャンルに見られるかたちで表象が形成されていく。その表象の画一化を脱する志向性を持つのが、〈タイランド〉であろう。本論で具体的に分析することはなかったが、1990年代以降の日本の現代文学におけるタイ表象は、〈タイランド〉が持つ複数性や多様性に呼応するものとして表現されていると観察している。

本研究の意義は、日本近現代文学研究では、散発的にしか研究されてこなかったタイ表象について、新聞、旅行記、文学という範囲で、明治期から1990年代までを鳥瞰的に把握し、鳥瞰的に把握することで浮上する問題を焦点化する点にある。

第一部

メディアの中のタイ

第1章

「読売新聞」におけるタイ

1 はじめに

この章では、近代日本の一般的なタイのイメージやタイの表象がどのようなものであったのかを大まかに把握するために、「読売新聞」の記事を中心的な素材としてトピックの変遷を概観する。

新聞は他の書物と違って、毎日発行される情報源である。また、新聞はそれぞれ独自の政治的主張を持つため、国民の政治思想の浸透に大きな役割を果たすだけでなく、様々な言説を固定化し、読者に影響を与えるメディアである。日本の新聞は明治期の文明開化の流れに乗って多数創刊された。その中で、先発の新聞、例えば「東京日日新聞」や「郵便報知新聞」や「朝野新聞」などは記事の文体が漢文調で「知識人層の専有物」¹だと見なされた。これに対して「一般庶民や婦人を対象に娯楽を売物にし、口語体で総ふりがな付きの文章を持つ新聞」²として東京で創刊された「読売新聞」（1874年（明治7年）11月2日創刊）と大阪で創刊した「朝日新聞」（1879年（明治12年）1月25日創刊）がある。「読売新聞」と「朝日新聞」は現在までも広く大衆に読まれているだけではなく、人気が高まるメディアとして社会で共有される知識を生産／再生産する役割を果たしている。

「シャム」あるいは「タイ」について一般的な概念やイメージは大衆のメディアとしての新聞によって明治大正期に定着していった。現在まで発行されている大衆新聞としての「読売新聞」と「朝日新聞」におけるタイの受容と定着の様相を通観するために、両紙を調査する必要がある。ただし、本研究の調査範囲は明治期から1990年代までという広範囲に及ぶため、両紙を同時に調査することは不可能である。そのため、本章では「読売新聞」のみを研究対象として取上げたい。一方「朝日新聞」におけるタイの描かれ方については今後の課題としたい。

本章では、1874年（明治7年）の創刊から今日までの読売新聞記事が検索可能なデータベース『ヨミダス歴史館』で、1874年11月2日から2000年12月31日までの期間、「シャム」「タイ国」³「バンコク」「チェンマイ」「アユタヤ」「山田長政」のタイについてのキーワードを用いて検索を行った。検索結果は、政治・経済・社会・文化・事件・国際・社説の分野により、各時代に注目される特別連載記事、話題になって連続掲載された記事を中心として、各時代の新聞記事における「〇〇の国」というタイについての記述に注目する。これらの記事を検討することで、（1）明治大正期（1874年－1926年）（2）戦前昭

¹ 読売新聞社史編集室『読売新聞発展史』（読売新聞社、1987年11月）

² 藤原肇『朝日と読売の火ダルマ時代—大ジャーナリズムを蝕むデカダンス』（国際評論社出版事業部、1998年5月）

³ 「タイ」を入力すると検索結果の精度は下がる傾向にあるため、「タイ国」とした。

和期（1927年－1945年）（3）戦後昭和・平成期（1946年－2000年）に区分する。（1）明治大正期は日本とシヤムの関係が構築されていくようになる時期である。（2）戦前昭和期には様々な交流によって日本とシヤムの良好な関係が強化され、戦時の同盟国として協力関係が築かれた時期である。そして、（3）戦後昭和・平成期（1946年－2000年）はタイの親日的な態度が一時的に薄らぎ、その後の1960年代からの日系企業のタイへの進出によって、日タイ間に経済的なつながりが再構築された時期である。こうした時代背景による日本とタイの関係の中で、タイに関する記事ではどのようにタイが表現されたのか、その特色に注目して新聞記事によって構築された一般的なタイのイメージや表象について検討する。そして、大衆のメディアとしての「読売新聞」における大まかなタイの変遷や日本とタイの関係史を概観した上で、第2部「日本近現代文学におけるタイ表象」で一般的なメディアにおけるタイの表象と文芸作品におけるタイの表象を比較して考察したい。

2 明治大正期

「読売新聞」に掲載された初めてのシヤムについての記事（1877年（明治10年）9月29日、朝刊）は、シヤムに貢納を拒否された中国が戦争を仕掛けるという騒然とした内容である。シヤムは中国との貿易を維持するため昔から貢納の義務を果たしたが、1850年代に英仏の植民地として分割の危機が迫ったため、中国との貢納制貿易を停止した。また明治10年代に、シヤムの「保守派」が引退して、チュラーロンコーン王を主導者とする「革新派」が成立した。当時シヤムは独立を維持するため、日本のように近代化して、日本との外交関係を築くことになった。

明治20年（1887年）9月26日に、和親通商に関する宣言書に調印したが、日本はシヤムに領事館を設置しなかった。その理由を新聞は、「暹羅は我邦と政治上の交渉は勿論通商上の関係も未だ厚からざるに付目下の所にては別に領事館を置くほどの必要な」⁴いと報じている。領事館設置にからんでシヤムへの関心が高まったことは、「読売新聞」で「暹羅の国情」（明治21年（1888年）1月21日、22日、24日）の記事が連載されたことから推測される。「暹羅の国情」は、百科事典と同様にシヤムの地理から、社会・政治・風俗などのシヤムについての知識を「読者の参考」⁵にするために書かれたものである。「未開」という印象を与える内容⁶を誇張・拡大して、取上げる傾向があるが、「亞細亞の東方に位する一の獨立國」で、「日本人と嗜好」⁷が合う国とも語られている。

明治25年（1892年）前後は、明治期日本のシヤム観を考える上で重要な時期である。そ

⁴ 「暹羅に領事館を置かず」（「読売新聞」1888年3月3日、朝刊）

⁵ 「シヤムの国情」（「読売新聞」1888年1月21日、朝刊）

⁶ 例えば、シヤム人の出産について「シヤムの国情」（「読売新聞」1888年1月21日、朝刊）で「出産の時ハ産と了れば産婦は直に一室に籠り薪と積みて火を燃し裸體になりて背を焙る始めて産を為したる者ハ廿五日二度目ハ廿日三度目ハ十八日四度目ハ十五日間焙る定式にて實に残酷なる話なるが此火焙と為す間に生命を亡ふ者も多しといふ此事たる外國人の眼より見れば最も驚くべき」と書かれている。

⁷ 「シヤムの国情」（「読売新聞」1888年1月24日、朝刊）

れは日本近代における山田長政への関心が高まった時期だからである。山田長政の建碑の募金集めのために「東京大相撲」大会の開催（1982年5月23日、朝刊）が発表されてから、山田長政についての伝記⁸が相次いで刊行され、あらためてシャムと山田長政との関係に関心が集まった。シャムについて言及する時、山田長政は欠かすことのできない存在となり、シャムに関する資料の中で繰り返し言及されることになる⁹。翌年、明治26年（1893年）7月16日に始まる「暹仏事件」¹⁰は世界的に報道され、日本では「強大国フランスに強引に侵略される弱小国タイに同情が集ま」¹¹り、欧米勢力をアジアから追放しようとする考えから、アジア解放のためのアジア主義を宣伝した。その一方で、日本でもシャムの植民地化が計画された。シャムの植民地計画のため、明治27年（1894年）熊本国権党の熊谷直亮がシャムの国情の視察旅行を行った。その後、「シャムの植民地」の話題が注目され、3月11日から14日にかけてシャムの日本植民地化に関する記事が連載された。これらの記事の共通点は、シャムで成功した山田長政の神話を利用しながら、日本人のシャムへの出稼ぎを促進するため「土地何れも豊饒」、「水運の便利」、「生活ハ我國と同じく米食」、「好都会と云ふべし」¹²という宣伝的な要素に満ちていることである。

シャムへの関心の高まりは日本側の植民地への欲望や期待と不可分である。そうした欲望や期待の前提としてあるのは、シャムが植民地化されなければならないような国情や風俗の土地であるといった把握の仕方である。たとえば、人見一太郎は『國民的大問題』（民友社、1893年7月）で「嗚呼彼れ暹羅如何なる国ぞ。彼れは殆んと英佛の餌食也。彼れの領地は年々に縮り、彼れの國狀は歳々に微なり。彼れは殆と亡國、彼れは猶ほ未開之邦土。其民は人情本數冊の外、國語を以て記せる文書を有せず、只賭博、懶惰、放蕩以て蠢々然として一日を送る、彼等は大半奴隷にして、二十金又は五十金を以て、賣買せらる、（中略）我は、七百個の新聞雑誌を有し、年々一億八千萬部を發兌し、我邦の著作者は年々新に政治、社會、實業、文學上の著書一萬八千部を書述す」と述べている。このように、シャムのイメージは一般的な文献において強調された〈野蛮な〉シャムと「読売新聞」に見られるような理想的な植民地としてのシャムという連動する二つのイメージに分けられるのである。

明治28年（1895年）岩本千綱¹³が山口県出身の移民32名を連れてシャムへ渡航した。『日・タイ交流六〇〇年史』¹⁴によれば、「到着後は土地、農具は約束どうり借りることができた

⁸ 明治25年、関口隆正『山田長政伝』（草深十丈書屋、1892年4月）、間宮武『山田長政偉勲録』（間宮武、1892年6月）、岡村信太郎『山田長政一代記』（岡村信太郎、1892年6月）など山田長政についての書籍が数多く刊行された。

⁹ たとえば、「熊谷直亮氏の消息」（『読売新聞』1894年1月25日、朝刊）で「山田長政の故城たる暹羅」と書かれている。

¹⁰ 「フランスはメコン河東岸のラオス全土の割譲を要求し、同年（1893年：タナボーン注）7月16日にはフランスの砲艦2隻がメナム・チャオプラヤーを遡航して、バンコクのフランス公使館の向かい河に停泊し、バンコク市を威嚇しながらタイ側に最後通牒を送った。結局10月3日、タイ国はフランスにメコン河東岸を割譲し賠償金を支払うことになった。」（吉川利治「『アジア主義』者のタイ国進出：明治期の一局面」『東南アジア研究』1978年6月）

¹¹ 吉川利治「『アジア主義』者のタイ国進出：明治期の一局面」（『東南アジア研究』1978年6月）

¹² 「暹羅の日本植民地」（『読売新聞』1894年3月14日、朝刊）

¹³ 岩本千綱については第2章「タイ国旅行の表象」の第2節「シャムへの旅」を参照。

¹⁴ 石井米雄・吉川利治『日・タイ交流六〇〇年史』（講談社、1987年8月）

が、そのほかの必要な設備をまかなう資力がなく移民でやってきた人びとと日暹殖民会社とは契約上のトラブルを起し、農作業に従事する余裕なくした移民たちはたちまち生活に困った。また農作業の代わりに、多くの移民がシャム内地で鉄道建設の工事などの作業をしても、コレラや森林熱などにかかり、結局全員が死亡した。

明治30年(1897年)3月、稲垣満次郎は初代駐暹羅国弁推公使に任命され、シャムに渡り、明治31年(1898年)2月15日に日暹修好通商航海条約に調印した。この時期、日本とシャムの関係は深まっていて、様々な交流が進められた。特に、明治33年(1900年)「佛教國として」¹⁵のシャムが日本に仏骨を寄贈しようとしたことから、18人の仏骨奉迎団がシャムに派遣された。実はこのような日本とシャムの仏教的な交流は明治20年代から始まった。明治21年(1888年)に「真宗の僧侶寺田福壽、島地黙雷、平松理英」が「鹿鳴館に暹羅公使と訪ひ該國佛教上の談話」し、「将来宗教上の通信と開く事と約せられ」¹⁶てから、明治24年(1891年)に「生田得能」が「シャム國へ渡りて佛教の景況と視察し」¹⁷て、そして明治28年(1895年)にシャム国王が「治世二十五年紀の紀念として「パーリー」語の佛典」を「浄土本山宛にて寄贈した」¹⁸。

明治33年(1900年)6月にシャムに派遣された仏骨奉迎団はワット・ポーで行われていた盛大な仏骨奉迎式典に参加してから、シャム国政府に様々な所に案内された¹⁹。この体験をもとに、写真師の気賀秋畝は『暹羅土産 仏骨奉迎』²⁰を著し、シャムの有名な寺院や、バンパイン離宮を写真で紹介している。また、岩本千綱も『仏骨奉迎始末』を著した。このように、「仏教の国」のシャムに関する興味は、明治33年の仏骨奉迎という出来事と深く関係しているのである。

明治35年(1902年)にはシャム皇太子(即位前のラーマ6世)の訪日のため、新聞はシャム皇太子の動静を報道し、シャムについての記事を連載した。来日するシャムの皇太子は、両国の親交の象徴と見なされる²¹一方、「シャムの我に望む所」(1902年12月12日、朝刊)でシャム皇太子の訪日の目的は、「自家の危殆を覚つて、救を善隣に求むる」ので、「彼の我に望む所、實に山田長政の功績を追ひて、再び彼等を今日の窮地より救ふ」と書かれており、日本とシャムの関係は「救う者と救われる者」と見なされている。また、「シャムと日本及び各国」(1903年4月18日、朝刊)で当時のシャム公使稲垣満次郎は「暹羅ハ確かに日本を自分の兄位に思ひ」、「皇帝陛下にハ日本風の御殿と日本風の御庭を」作る程「日本」を「信用」していると指摘している。日本が日本とアジア諸国との関係を兄弟として語る言説は、第二次世界大戦下にも反復される定型的な語り方であり、そうした大

¹⁵ 「佛骨奉迎に就ての希望」(「読売新聞」1900年5月19日、朝刊)

¹⁶ 「真宗の僧侶がシャム公使を訪問、将来宗教上の通信を約束」(「読売新聞」1888年2月14日、朝刊)

¹⁷ 「シャムの仏教を視察した生田得能師、四谷の笹寺で土産法談／東京」(「読売新聞」1891年5月8日、朝刊)

¹⁸ 「シャム国王ケラレコロン1世が編纂出版した佛典を浄土宗本山に寄贈」(「読売新聞」1895年7月12日、朝刊)

¹⁹ 岩本千綱・大三輪延弥著『仏骨奉迎始末』(岩本千綱、1900年)

²⁰ 気賀秋畝『暹羅土産 仏骨奉迎』(仏骨奉迎写真発行所、1901年3月)

²¹ 「太陽」(9巻1号、1903年1月)の論説では「日暹兩國の親交は、輒近に及んで益す濃厚を加へ、其殊に國內諸般の設備を進暢するに於て、遙かに我れと厚誼を敦ふするに鋭意するより、兩國の交情も為に著しく密なると致せし也。(中略)日暹の関係は、此の如く親交を加へり」と述べられている。

東亜共栄圏的な発想の根が明治期の日本とシャムの関係についての眺め方においても萌していることが推測される。こうした兄弟関係の中で、「兄」の日本はシャムの近代化に協力し、「暹羅国華族女学校」²²（現在はラチニー学校）などの近代的な設備を設立した。

もう一つの明治期のシャムのイメージと言えば、「暹羅の象狩」（1902年10月19日、別刷）にあるような「自然齷齪」で、「大きな動物園へ行つたやうな感が起る」というイメージである。特に、「大抵五六百頭」の象の数や、「最大最強」の象を捕らえる描写や、「全身白くな」り「珍重」な「白象」などの象狩の描写は日本人の関心を呼び、サファリ的なシャムのイメージが生成された。このシャムのイメージは当時の日本人の未知なる〈南洋〉への憧憬を誘うものとなり、昭和初期まで様々なメディアの中で言及されている。例えば、第2章の紀行・案内記²³『五大洲探険記 第一巻 亜細亜大陸横行』（中村直吉・押川春浪編『五大洲探険記 第一巻 亜細亜大陸横行』博文館、1908年）ではシャムの風俗や仏教の文化について述べられるとともに、「アユチャ」の象狩が冒険的であることも述べられている。また、『冒険壮遊 五洲怪奇譚』（河岡潮風『冒険壮遊 五洲怪奇譚』博文館、1910年10月）では、様々な国の話が載せられており、その中でシャムに関する唯一の話が「シャム象狩怪談」である。さらに、明治44年5月に発表された『馬來半島の猛獣狩』（松尾茂『馬來半島の猛獣狩』博文館、1911年5月）では、象狩のみではなく、鱷・犀・虎狩などの猛獣狩に興ずるシャムが描写されている。それに紀行・案内記以外、象の描写は第3章の山田長政の文献の中にも頻繁に描かれている。

一方、当時のシャムは日本をどのように見ていたのか。これについては、タネート・アーポーンズワンがシムポシウム「タイ王国における日本のイメージ」において雑誌「テュンウィパークポジャナキット(ตุลวิภาคพจนกิจ)」(1899-1906年)に掲載されているシャムの知識人であるティアンワン(เทียนวรรณ)の記述を取上げている。ティアンワンは「最初は朝鮮支配を巡って清国と戦闘を開始した。また、清国の義和団と戦争した。さらに、虎とネズミの戦いのような日露戦争で大国のロシアに勝利した日本は非常に有能だと意識するようになった。(中略)日本の法制や政府の行政を見ると、全てヨーロッパと同等である(タナポーン訳)」²⁴と日本への驚嘆を記している。

大正2年(1913年)には「シャムも日本人の成功地なり」(1913年9月18日、20日、朝刊)という連載記事が見られる。この記事におけるシャムは「自由な國なれども、其實何の點が自由國なるを知らず、外人又暹羅を呼で白象國と云ひ、黄衣國と云ふ、是れ國旗に象を書き勳章に象を刻し、また佛教の僧侶が黄衣を着する故」と述べられている。「暹羅に於ける自然の生産力は極めて旺盛」だが、シャム人は「世界の國民中暹羅人ほど怠惰にし

²² 明治35年(1902年)に来日したシャム皇太子は、日本の女子教育の諸設備を視察し、シャムでもこのような学校を設立しようと決意した。そこで、教師として安井哲子・河野清子・中島富子²²を雇い入れ、「暹羅国華族女学校」(現在はラチニー学校)を設立した。(吉川利治「アジア主義」者のタイ国進出：明治期の一局面」『東南アジア研究』1978年6月)

²³ 冒険紀行文におけるシャムのイメージについては、第1部第2章を参照。

²⁴ ธเนศ อาภรณ์สุวรรณ. ภาพลักษณ์ผู้ป่วนในสยามประเทศไทย. 120 ปีความสัมพันธ์การทูตไทย-ญี่ปุ่น: เอเชียตะวันออกเฉียงใต้ (2430-2550). สมุทรปราการ : มูลนิธิโตโยต้าประเทศไทยและมูลนิธิโครงการตำราสังคมศาสตร์และมนุษยศาสตร์ 2551. (2008年)

て無氣力なるはなかるべし」、また僧侶が多いため、シャムで「不生産的人間は人口の大部分を占むるに至る」。このような記事には、日本がシャムへ進出することを正当化する、南進論につながるメッセージがうかがえる。

大正7年(1918年)6-7月に南天子の旅行記事²⁵が「読売新聞」で連載された。南天子は香港やシンガポール経由でシャムへ渡り、連載記事「金剛宝都」で旅行中のシャムの風景やシャム人の風俗を詳しく描写している。南天子の旅行記事は第2章で取上げるシャムの案内・紀行記との類似点は「不潔なるシャム人」や「無智文盲にして趣味の低級なるシャム」²⁶などのシャムの非文明的な要素を強調する描写が見られることである。一方、南進政策を奨励する案内・紀行記に反して、南天子は「日本人は多くの場合、一攫千金は愚かのこと、一攫萬金、一攫百萬金を夢み、南洋へ行けば金塊やダイヤモンドが其處等中、轉がつて居るかのやうに思うて出て来る手合が多いさうである。(中略)来て見ると事實は日本で夢想して居た所は大違ひ。自分で之はと思ふほどの仕事はなし、其の中に準備の金は無くなる、病氣になる、慈善病院の厄介になる、やがて死んで日本人共同墓地に送られる」²⁷と、大正期にマレー半島の日本人移民の状況を取り上げて批判している。

大正9年(1920年)12月15日にシャムはアメリカと暹米条約を締結した。この条約は「住居、商業、布教および慈善の目的」だが、「最高裁判所以外の裁判所で、係争中の事件を領事裁判へ移審する権利(Right of evocation)を、新法典実施後も五年間保有すること」²⁸という内容である。一方、第一次世界大戦へ参戦し、シャムとの外交関係を調整する日本は、大正10年(1921年)に暹米条約をもとにする新条約を締結するため、シャム政府と交渉を開始した。しかし、日本政府が「欧米以上の帝国主義的主張」²⁹するような無期限の移審権などを要求をしたため、この「日本国暹羅国間通商航海条約」は大正13年(1924年)に発効された。

以上のように、日本とシャムの関係は仏教的な交流によって築かれた。しかし、日本のシャムへの関心は、仏教国としてのシャムよりも、シャムを日本の植民地にすることに向けられている。つまり、「読売新聞」の記事における象などの異国的な風景や未開な描写などは、シャムの未開さを強調し、優位な日本/劣位なシャムという関係がパターン化されている。特に、シャムに関連する記事でよく言及される山田長政の伝説は成功地としてのシャムの表象を利用して日本の移民や植民を奨励する役割を果たしているだけでなく、シャムの表象構築に影響を及ぼしていると考えられる。なお、山田長政とシャムの表象の関連性については、第2部第3章で考察する。

²⁵ 南天子の連載記事は「香港見聞記」、「シンガポールより」、「金剛宝都」がある。長崎から香港までの旅行の話についての「香港見聞記」(上・下)は1918年3月5-6日に連載された。「シンガポールより」(1-3)は香港からシンガポールまでの話であり、1918年6月25-27日に連載されている。そして、「金剛宝都」(1-9)は6月5・11・16・17・24日、7月1・4・8・15日に連載され、シャムの旅行をを語っている。

²⁶ 「[金剛宝都] = 5/南天子(連載)」「読売新聞」1918年6月24日、朝刊

²⁷ 「[シンガポールより] = 2/南天子(連載)」「読売新聞」1918年6月26日、朝刊

²⁸ 石井米雄・吉川利治『日・タイ交流六〇〇年史』(講談社、1987年8月)

²⁹ 注28に同じ。

3 戦前昭和期

外交関係を強化するため、昭和2年(1927年)にはシヤムが日本に仏像³⁰を贈り、そして、昭和4年(1929年)には日本へ少年団³¹を派遣している。また、昭和5年(1930年)に「国王殿下の御旨意により」シヤムの使いとして「日本少年團二十名を招待し」³²、同年12月日本少年団はシヤムへ出発した。昭和7年(1932年)「シヤムの婦人と家庭」³³では、当時のシヤムの婦人や子どもの生活の様子が伝えられている。それによれば「シヤムには中産階級といふものがない。上層と下層の二つ」しかないため「シヤムの街」には「モダンと原始」が「ハッキリ區別」されると記されている。そして、同年6月に、シヤムは立憲革命により絶対王政から立憲君主制へ移行する。その後クーデターや反乱が頻発し、結局、昭和9年(1934年)からシヤムは日本と再び国交を結ぶ。

昭和10年(1935年)4月に「神秘と情熱の國シヤムの都バンコックからサクラ咲く日本に訪れた藝術使節、シヤム國立音樂舞踊團」³⁴がシヤムの伝統的な踊りを披露し、日本のメディアに非常に注目された。昭和12年(1937年)3月に「おとゝしシヤムしょうねん團から贈られた上野動物園の花子象、大阪大王寺動物園のランブム嬢」の「お禮に少年團日本聯盟」は「シヤムへ出発することになった」³⁵。帰国後、「日暹親善のお役目を果たした」少年團日本聯盟は「象のお国シヤムの面白いお土産話」³⁶の記事で「僕たちは心から日本を愛し、尊敬してゐます！」と園遊会で言った「シヤムの少年團の一人」や、「「チャイヨ、チャイヨ！（萬歳）」と手を叩いて歓迎し」た「日本に好意を持つてゐる」シヤム人の様子が伝えられ、親日のシヤムという表象が強調されている。昭和14年(1939年)6月に「わが友邦、山田長政以來の深い好調に結ばれる暹羅國」が「シヤム」から「自由の國」という意味を持つ「タイ」に国名を変更という記事³⁷がある。さらに、同年6月25日の「読売新聞」(朝刊)の半面サイズの特集記事「歓呼に揺らぐ白象の国」で国名改称によってタイについて紹介されている。内容を見ると、当時のタイ社会や日本との友好関係以外に「ミス・暹羅」についての記事も掲載されている。

ミス・シヤムについては、それ以前に昭和11年(1936年)1月9日「裸足の美人！ミス・シヤム」(朝刊)として紹介され、1936年度のミス・シヤムの写真が掲載されている。また、その翌年、「三井物産招待で」「日暹親善視察團」として来朝した「艷麗振袖姿」のミス・シヤムの写真³⁸がある。これらのミス・シヤムの写真について、久保田裕子は「民族的なステレオタイプを強調する際に、女性表象が引用されている。これも選る側の男性＝日本、

³⁰ 「シヤム仏像奉迎」(「読売新聞」1927年10月17日、朝刊)

³¹ 「シヤム少年團来月未來朝」(「読売新聞」1929年7月1日、朝刊)

³² 「シヤムへ行く「少年使節」」(「読売新聞」1930年11月13日、朝刊)

³³ 「シヤムの婦人と家庭」(「読売新聞」1932年2月21日、朝刊)

³⁴ 「神秘と情熱 シヤムの踊り」(「読売新聞」1935年4月11日、朝刊)

³⁵ 「象のお礼にシヤムへ少年團」(「読売新聞」1937年2月17日、朝刊)

³⁶ 「象のお国シヤムの面白いお土産話」(「読売新聞」1937年5月9日、朝刊)

³⁷ 「タイと国名改称」(「読売新聞」1939年5月26日、夕刊)

³⁸ 「艷麗振袖姿で ミス・シヤム神戸へ」(「読売新聞」1937年4月24日、夕刊)

選ばれる女性＝タイという関係を視覚化し、それを日本国内に目に見える形で紹介するという機能を果たした。いわばジェンダー・ポリティクスと帝国主義的欲望が結びついた一例と言えよう³⁹と指摘している。それに昭和14年（1939年）9月22日「話の港」（朝刊）で「面白いのは昨年度ミス・シャムが日本の化粧品でメイクアップ」という記述や、昭和14年（1939年）11月5日「泰國で“邦品見本市”」（朝刊）で「タイ國の娘達の憧れの的“ミス・タイ”が日本の化粧品などを使うことは、「日本の商品に人氣があつまりさらに欧州動乱の余波で欧米製品の減少」となる。こうして、毎年来朝するミス・シャム／タイは、日暹親善の建前として揚げられたが、実は当時にタイへ進出した日本初の総合商社である三井物産⁴⁰のマーケティング戦略として利用されたのである。

昭和15年（1940年）にタイは割譲したメコン川右岸の失地（現在、ラオスのルアンプラバーン対岸とチャムパーサク）をタイに返還するように、フランスに要求した。しかし、タイはフランスに要求を拒否され、フランスと紛争を起こした。仲介役としての日本は両国の代表を招いて東京で交渉を開始し、「タイ・佛印の國境紛争は日本の申入によつて停戦となり、タイは失地を回復することができた。この事件によって、「タイ國政府」は「東亜の兄貴」として日本の指導的地位を認め⁴¹た。

第二次世界大戦にタイは中立を宣言していたが、1941年12月8日未明にタイの南部が日本軍に侵略されたため、日本軍と交戦した。この戦闘行為によって、「タイ側一八三人、日本側一四一人の戦死者が出ていた」が、新聞ではこの事件についての報道はなされず、「わが〇〇部隊は日泰協定に基き八日夕刻居留民並び泰人に迎へられて歩武堂々バンコクに進駐した⁴²と書かれている。また、タイ軍が日本に抵抗した事件については「八日朝南泰（中略）英軍と交戦」したと書き換えられている。

國の独立を守るため、同年12月21日に日泰攻守同盟条約に調印しても、タイ国内で日本軍に対する抵抗運動が何度か起こった。翌年（1942年）「読売新聞」で報道されたタイに関する記事を見れば、例えば「日泰攻守同盟締結秘話 毅然頑張るピブン首相⁴³」や「血に結んだ日泰 きょう“同盟”から1年のお祝い⁴⁴」などの記事で日本軍を歓迎する「戦友」や「盟邦泰」としてのタイのイメージが大々的に主張されている。しかし、タイの資料を見れば、タイ人の日本軍への不満や抵抗について多く書かれている⁴⁵。例えば、ソッサイ・カンティヴォラポングによれば、親日派と見なされる当時の首相のピブーンは1941年5月21日の内閣府政策会議で次のように発言している。

日本の軍人たちはタイで日本円を使ったり、タバコの吸殻をタイ人女性の胸に入れ

³⁹ 久保田裕子「近代日本における〈タイ〉イメージ表象の系譜 —— 昭和10年代の〈南洋〉へのまなざし——」（「立命館言語文化研究」2010年1月）

⁴⁰ 三井物産について第2章「タイ国旅行」の第4節を参照。

⁴¹ 「アジアに還るアジアの歓び」（「読売新聞」1941年1月26日、夕刊）

⁴² 「堂々・バンコク進駐 皇軍、泰國の歡迎浴びて」（「読売新聞」1941年12月10日、夕刊）

⁴³ 「日泰攻守同盟締結秘話 毅然頑張るピブン首相」（「読売新聞」1942年4月1日、朝刊）

⁴⁴ 「血に結んだ日泰 きょう“同盟”から1年のお祝い」（「読売新聞」1942年12月21日、朝刊）

⁴⁵ これについて第4章「南方徴用作家の〈タイ〉」の第5節を参照。

たりと悪戯をしている。しかも、日本は自己中心的である。かつて、映画「ミカド」がタイで上映される予定があったが、天皇に対する不敬という理由で上映が禁止された。日本の大使も日本人はどこにいても、いつも日本式の生活をする。他の国の文化に従わず、気のままに過ごす。今、日本とタイの葛藤は毎日起こっている。(สตโต ชันติวารพงศ์. ประเทศไทยกับปัญหาอินโดจีนของฝรั่งเศส 1937-1947 (Thailand and The French Indochina Question: 1937-1947). วิทยานิพนธ์ มหาวิทยาลัยศิลปากร ภาควิชาประวัติศาสตร์ บัณฑิตวิทยาลัย จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย. 2540. (1997年、タナポーン訳))

このように、日本に抵抗するタイの姿勢が「毎日起こっている」のだが、なぜ「読売新聞」では一切言及されていないのか。それは、戦時中に報道されたタイは「血に結んだ日泰」という日本の同盟国としてのイメージが一方的に押しつけられていたためである。それと同時に「同盟国」として相応しくない行為は日本国内において報道されることなく、マスコミに削除されたのである。こうしたタイで対日行為を抑えるため、昭和18年(1943年)に中村明人がタイ駐屯軍司令官に就任し、様々な日タイ親善交流、例えば、仏教的な交流⁴⁶や、夫人の交流会⁴⁷や、日タイ文化振興活動⁴⁸などを行っている。特に、戦争で中止になった、日タイ親善の象徴としてのミス・タイの選定⁴⁹は3年振りに復活した。このように、昭和18年以降、昭和10年代前半のような日タイ交流が再開されたのはタイ人の対日感情を取り除き、日タイ親善を奨励するという軍事戦略の目的で利用されたと考えられる。

前期昭和期の「読売新聞」におけるタイは、日タイ交流によって日本との良好な関係がある国として語られた。日タイ交流をみれば、「文化(仏教、伝統文化)」／「女性(婦人交流、ミス・タイ)」／「子供(少年交流、象)」という三つのポイントがよく取り上げられている。「文化／女性／子供」は非政治的な領域に存在し、戦争と無縁であるように見えるが、「文化／女性／子供」の非政治的な交流はタイ人の日本に対する信頼感や安心感につながり、日本の貿易利益や効果的な軍事力の運用をもたらす。また、戦時中の厳しい時代の中で「文化／女性／子供」の交流を強調することは戦争しない＝平和なタイがみられるのである。このようなタイの表象は戦時中の南方徴用作家の小説でよく描かれている。これについては第4章で考察する。

4 戦後昭和・平成期

戦時中のタイは日本と同盟国になっても、その裏では反日組織「自由タイ運動」を結成し、連合国に軍事情報を提供していた。この運動によって、日本の同盟国であったタイは「敗戦国」の地位から脱却できたが、1946年にフランスに失地を返還することになる。戦後のタイはアメリカの支援を受けながら、イギリスに「資産の原状復帰、ビルマとマラヤ

⁴⁶ 「10日に仏舍利恭迎式」(「読売新聞」1943年7月7日、夕刊)

⁴⁷ 「桃の節句に日泰婦人の交驩」(「読売新聞」1943年3月3日、夕刊)

⁴⁸ 「泰国で日本賞 日本文化の論文入選決る」(「読売新聞」1943年2月9日、夕刊)

⁴⁹ 「タイの花 「ミス・タイ」を改称、3年ぶりに栄冠は輝く」(「読売新聞」1944年1月6日、朝刊)

の領土返還、コメの一五〇万トン供与」し、イギリスと平和条約の交渉を行った⁵⁰。こうしてタイは親日的な態度が薄らいだ一方、アメリカとの関係が強化していった。

1948 年後半から日本はタイとの貿易を再開し、戦後の食糧不足のため、タイから米を大量輸入した。しかし、「タイ米」は多くの記事で「カビが発生する」「病変米」⁵¹と書かれるなど、日本での評判は良くなかった。こうした貿易関係の記事以外で注目されるのは、タイで「中国名に変名して」⁵²「終戦後日本軍から逃亡して帰国しなかった残留兵」がタイに移住している記事⁵³である。タイは他の東南アジア諸国がそうであるように、日本にとって戦争の記憶と結びつき、戦前の自国の姿を映し出す場所になっていることが分かる。

戦後、中国では共産党勢力が急速に拡大し、共産主義がインドシナまでに浸透してきた。アメリカと親密な関係にあるタイは、「東南アジア条約機構（SEATO）本部」としてアメリカから援助されながら、反共産主義政策を推進した。1956 年 7 月 24 日「安定した反共国家タイ」（朝刊）で、「アメリカ製品の宣伝する広告やネオンの数」のアメリカ化されたタイや、「アメリカの経済、軍事援助によって」安定しているタイを「東南アジアで古くから独立を維持してきた唯一の国であり、伝統的な巧妙な保身、現実外交をとっている」と伝えている。これに対して、日本との貿易は「東南アジアの新興民族国家は、戦後もなお日本に対して不信の念と敵意を抱く」ため、「アジア全体は、1930 年代半ばには日本の輸出の半分を占めていたが、今では五分の二にすぎ」⁵⁴ない。日本は東南アジアとの貿易を振興するため、アメリカの助力をあおぎ、東南アジア諸国との相互理解と信頼の回復に努めた。また、「アジアの経済を伸ばそうとするいろいろな動きをみんな日本の小さな利己主義の現われだという見方をしているものが多かった」⁵⁵ため、1960 年代の日本は東南アジアに対する態度は経済的な面だけではなく、東南アジアの少数民族への関心も高めた。

その後、1968 年に話題になった「タイ国留学生の麻薬密輸事件」が起こってから、タイは「大麻薬ルート」や「世界一のアヘン密作地帯として有名」⁵⁶になり、その報道の中で取り上げられた麻薬栽培する山岳民族を調査するため、様々な日本の調査団がタイを訪れ、「読売新聞」に調査結果を発表している

上記の麻薬関連の記事以外でも、1960 年代以降になると、タイについての記事が多く見られるようになる⁵⁷。例えば、連載記事「聖火の道 よみうり機で飛ぶ⑩」⁵⁸で「山田長政の墓と日本人街跡」がある「仏教国」タイの表象が復元され、そしてタイ人を「何をきい

⁵⁰ 柿崎一郎『物語 タイの歴史 微笑みの国の真実』（中公新書、2007 年 9 月）

⁵¹ 「[時の言葉] 病変米（黄変米）」（『読売新聞』1953 年 2 月 18 日、夕刊）など。

⁵² 「まだいる日本兵 バンコクに二百 引揚者の話」（『読売新聞』1952 年 10 月 12 日、朝刊）

⁵³ 「タイに残留兵二、三百 現地での結婚組もいる」（『読売新聞』1952 年 3 月 21 日、朝刊）

⁵⁴ 「開国百年の日本」（『読売新聞』1958 年 3 月 17 日、朝刊）

⁵⁵ 「[月例座談会] 日本の問題・世界の問題」（『読売新聞』1962 年 9 月 28 日、朝刊）

⁵⁶ 「タイに大麻薬ルート 黒幕は女貿易商、留学生を利用」（『読売新聞』1968 年 9 月 19 日、朝刊）

⁵⁷ タイの麻薬関連の記事については 1960 年以前にはなかった。初めて「読売新聞」で掲載されたタイの麻薬関連の記事は「首謀 5 人を起訴 バンコク直輸麻薬団」（1961 年 3 月 30 日、朝刊）であった。1960 年代のタイの麻薬関連の記事だけは 13 件であった。1970 年代には 75 件を突破した。

⁵⁸ 「[聖火の道] =16 バンコク市内に 400 寺 外人僧も修行（連載）」（『読売新聞』1964 年 1 月 23 日、夕刊）

でもニコニコ笑うだけ」と表現している。また、連載記事「バンコクだより〈上〉」⁵⁹では「自動車の六割は日本製であり、トラックに至っては八割まで日本から輸入され」る「友邦のタイ」の姿や、連載記事「アジアに生きる タイと日本」⁶⁰では「タイは東南アジアで最も日本人が多いところで」、「戦争にまつわる反日感情もない」、「商売がしやすい」と語られている。さらに、コラム「特派員のえんぴつ」⁶¹では「みやげ物屋はもちろん（中略）タクシーの運転手、トルコぶろのマッサージュ女にいたるまで片言の日本語でごきげんをとる。有名ナイトクラブ（うち一軒は日本人経営）にいけば、あちこちで日本語が聞こえ、ショーの司会者、歌手まで日本語をあやつり、日本語の流行歌をサービスする」という日本化されたタイ社会を伝えている。

1972-1973年にタイで日本製品排斥運動が起こった。その原因の一つは野口ジム襲撃事件である。野口ジム、あるいは野口キックボクシング・ジムは日本のキックボクシング界の草分けの野口修によって開設されたジムである。野口はタイで日本・タイ対抗のキックボクシングの試合を行っていたが、野口のキックボクシングは「タイ国技を汚すものだ」という一部のタイ世論の強い反感を買ったため、キックボクシング・ジムが「1972年10月15日の夜に「ピストル弾三発が打ち込まれ」⁶²た。一方、タイの資料⁶³から見ると、野口キックボクシングがタイのマスコミに「タイ国技を汚すものだ」と非難された理由は、野口は日本とタイのキックボクシング試合を行う時、格下のタイ人選手を格上の相手と戦わせただけでなく、ボクシングの試合の放送中に野口キックボクシングがタイのキックボクシングより優れていると自分のジムを宣伝したのである。このように、1960年代後半から対日貿易赤字や、日本商品の氾濫や、日本人の乱行に対するタイ人の不満は、野口ジム襲撃事件が引き金となって、全国的な日本製品ボイコット運動を引き起こすことになる。反日的なタイの態度について、「微笑みの国」といわれるタイの人は、元来が平和で、妥協的で、解放的なのである。加えて、王家を中心に、こぞって敬けんな仏教徒たちだ（中略）「日本」に、どっかと座り込まれては、ほほえみのタイも“怒りのヒョウ”に変身せざるを得ない⁶⁴と書かれている。反日運動の他に、1970年代にタイでタノム（当時の首相）軍事独裁政権に反対する学生運動やクーデターが多発したため、「バンコクを中心に合弁企業を経営する外国資本は（中略）相当危機感を覚え」⁶⁵た。1960-70年代のタイは反日運動や政治運動や麻薬の問題を抱える危険な都市と見なされている。

1973年にチェンマイに住むカマモト（またはタマモト）・トシオが人身売買、麻薬、覚せい剤密輸組織で逮捕された、という日本人から非常に注目された「チェンマイ事件」⁶⁶が起

⁵⁹ 「バンコクだより〈上〉」（『読売新聞』1964年8月17日、朝刊）

⁶⁰ 「『アジアに生きる』 タイと日本」（『読売新聞』1966年4月18日、朝刊）

⁶¹ 「特派員のえんぴつ」（『読売新聞』1968年12月13日、朝刊）

⁶² 「タイの野口プロに抗議の弾丸 反日感情高まる／キック・ボクシング」（『読売新聞』1972年10月18日、朝刊）

⁶³ เขียน ชีระวิทย์, รายงานวิจัยเรื่องความสัมพันธ์ทางเศรษฐกิจระหว่างไทยกับญี่ปุ่น (สิ้นสุดปี พ.ศ. 2517), กรุงเทพฯ : สถาบันวิจัยสังคม จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย, 2517, (1974)

⁶⁴ 「経済至上・自尊心砕く“ほほえみの国”タイの反日」（『読売新聞』1974年1月11日、朝刊）

⁶⁵ 「安定度増すタニン政権 タイ・クーデターから1年 成果挙げた汚職一掃」（『読売新聞』1977年10月6日、朝刊）

⁶⁶ 「“ひどい日本人” 逮捕 タイで少女を人身売買」（『読売新聞』1973年1月9日、夕刊）

こる。この事件によって、「“ミスター玉本”で有名なチェンマイでの実話」と同様に「夕方になると、バスでレストラン、キャバレーをまわり、最後に女性を従えてホテルにご帰館」⁶⁷という買春目的でタイを訪れる日本人が増加した。また、1976年に13人の日本企業のバンコク駐在員が「秘密カジノ」で逮捕される事件が起こった。「バンコクの日本人 脱線エリートに“高価な夜”」（1976年6月14日、朝刊）で日本人の「評判を落とす」「ドジな“バンコクの日本人”像」が生成された理由は「東南アジアのタイだから、という気軽さから」なのでないかと述べられている。

1960年代から共産化の恐れがあるインドシナは、1990年代入って、ようやく沈静化した。タイは国内政治や、隣国からの難民の大量流入の問題などがまだ解決できていないが、「クーデターがタイ政治文化の一部とされていた時代が去り、政治的安定と民主主義の定着が外資を呼」⁶⁸び、「グローバル化した経済のうねりに翻弄され、(中略)世界の高級車や有名ブランド商品はもちろん、最先端のコンピューター技術も手にできるようになった」⁶⁹。特に、当時のタイ風景は「ずらりと真新しい車の列。ベンツ、BMWなどの高級車も目につく。常時数十人が席に座れず順番待ちをしているほどの大変な盛況ぶりだ。ラフな格好の若者グループからカップル、職場仲間数人でおしゃべりに花を咲かせるOL、携帯電話で何やら打ち合わせに余念のないネクタイ姿のエリートサラリーマン」という「仏教文化の伝統を忘れ、誤った近代化の道を歩む」⁷⁰タイ人の姿が伝えられている。

一方、国際化されたタイの風景以外、1990年代に来日タイ人女性をめぐる問題は日本とタイの大きな問題になった。「「ニッポンに行けば、たくさんお金が稼げる」「楽な仕事だよ」と、あっせんブローカーに誘われ」⁷¹たタイ人女性たちは日本に送られ、暴力団関係者に引き渡され、強制的に売春をさせられた。それに、「茨城県土浦市周辺の県道を車で走ると、新興住宅街に不釣り合いな、きらびやかなネオンが突然目を引く。タイ女性たちが働くスナックやバーなど約二十軒」があり、「リトルバンコクと呼ばれる」⁷²。また、1997年12月5日「タイ人“裏社会”金融の核 新宿に「地下銀行」さらに2店 独自に宝くじ発行」で、「歌舞伎町周辺の繁華街」の一部も「少なくとも五百人以上のタイ人が居住、大半が不法滞在の女性とみられて」⁷³、「リトルバンコク」と呼ばれている。このように、固有名詞としての「リトルバンコク」は普通名詞となり、「中華街」や「リトルソウル」などとは異なる売春街という意味合いで受け取られるようになった。

⁶⁷ 「[世界の裏窓] 日本人観光客 タイ“一夜妻”連れ堂々」(「読売新聞」1976年1月16日、夕刊)

⁶⁸ 「戸惑うタイ軍事政権 クーデターから1か月」(「読売新聞」1991年3月25日、朝刊)

⁶⁹ 「[特派員ノート] バンコク・原野喜一郎 政治改革が導く経済再建」(「読売新聞」1997年9月20日)

⁷⁰ 「[東南アジア新風景] (2) バンコクのタッピー 欧米型生活楽しむ若者 (連載)」(「読売新聞」1991年5月15日、朝刊)

⁷¹ 「[追跡 不法就労] タイ女性引き渡し事件から (1) 崩れたニッポン幻想 (連載)」(「読売新聞」1991年7月29日、朝刊)

⁷² 「[医療ルネサンス] (152) 第二部現代病の周辺 エイズと闘う=2 (連載)」(「読売新聞」1993年2月22日、朝刊)

⁷³ 「タイ人“裏社会”金融の核 新宿に「地下銀行」さらに2店 独自に宝くじ発行」(「読売新聞」1997年12月5日、夕刊)

5 まとめ

「読売新聞」におけるシャム／タイの定義や、意味生成は時代とともに変化しても、明治時代から伝わるイメージや表象がまだ残っている。まず、明治期にシャムの情報はまだ不十分であるため、シャム国情の記事により読者にシャムについての知識を提供する。明治20年代後半から山田長政は日本人の英雄として評価され、シャムは山田長政の伝説により日本人に知られるようになった。また、日本と仏教の交流活動から、シャムは「仏教の国」という表象が投影された。そして、山田長政の伝説や、「仏教の国」や「独立の国」の表象は日本と共通しているため、日本人に友好的であるという表象が構成された。しかし明治期の総合的なシャム像を見れば、所有者がいない（＝植民地になっていない）、豊饒な資源があり、日本と様々なコードを共有しているシャムは、「シャム国」としてより、「日本の南進先」として紹介されていると言える。

戦前昭和期に入ると、「読売新聞」でシャムと日本との良好な関係は、青年交流活動やタイ伝統舞踊の披露などの文化交流の記事を介して語られた。しかし、様々な交流を見ると、例えば来日したミス・タイは、タイの伝統的な衣装を着ずに、着物を着る親日的なタイ人の代表とされるだけでなく、三井物産のマーケティング戦略に利用されている。それに、日本がかつてフランスに奪われたメコン川右岸の失地を「友邦」のタイに返還することは、タイが日本とタイの親密な関係を確認しただけではなく、西洋と対抗できる日本の勢力を認める出来事だったのである。戦時中のタイは無条件で「日本の同盟国」となっても、裏では日本の侵略によって対日感情を持っていることが少なくない。タイ人の反日感情を抑えるため、「文化／女性／子供」の交流が軍事戦略として再び利用された一方で、これらの交流によって、平和なタイの表象が生成された。

戦後になると、タイはアメリカと友好関係を結び、アメリカの支援を受けながら、アメリカの反共戦略に協力した。1950年代から1960年代にかけて、「読売新聞」でタイが言及される際、アメリカ化されたタイの風景を取上げられ、戦前のような「友邦」「弟」「親善関係」などの記述が見られない。1960年代後半からは日タイ関係が復元され、それによって日本企業が急速にタイへ進出した。日本企業や観光客の増加に伴って、日貿易赤字や日本商品の氾濫や、日本人の乱行などの問題が発生した。また、政治的な問題や麻薬の問題などを抱えていたタイは危険な空間と見なされた。しかし、1990年代に入ると、タイは民主主義が定着し、政治的に安定したため、世界中から観光客が訪れただけではなく、タイは産業投資を奨励し、経済発展を経て国際都市となった。

大衆新聞としての「読売新聞」は明治期から現代にかけてタイのイメージや表象を生成し、大衆に提供している。「読売新聞」におけるタイの表象には、描写されるタイと、描写されないタイがある。つまり、新聞は事実を客観的に報道するというイメージが強いが、各時期の日本の政治的経済的戦略と不可分に結びついているため、それらの要素によって報道する内容を編集したり、タイの表象を構築したりするメディアである。例えば、アジ

ア・太平洋戦争期に抗日運動を行ったタイの描写は「読売新聞」の中で描かれていない。つまり、タイは日本の潜在的な欲望の地平において表象されるか、日本や日本人が直接関係するような事件や出来事を通して、日本人の読者に受容されて、ステレオタイプ化された。それでは、そうした新聞が用意した土壌を背景に、新聞以外の他のメディアではどのようにタイを表象しているであろうか。この問題について、第 2 章ではタイについての観光に関するメディアを考察したい。

第2章

タイ国旅行の表象

——日本人旅行者たちは何を見たのか——

1 はじめに

タイはアジア諸国より早くから観光振興を進め、多くの外国人旅行者を受け入れてきた。2012年に22,303,065人の旅行者数の中で、日本人旅行者数は1,371,253人¹であった。また、旅行者数を国別に見ると、1970年代後半からマレーシア人旅行者が一位、日本人旅行者が二位の順位を占め、今日に至っている。毎年タイを訪れる多くの日本人旅行者は、いったいタイで何を見て、また、なぜタイを訪れるのだろうか。

人が見ているものは、ほとんど、その現実自体が直接体験されているものではなく、「表象」なのだ。特に写真という媒介を通しての表象なのだ。人が「眼差しを向けている」のは、自分が絵はがきとかガイドブック（そして、テレビ番組も増えている）から取り入れた、その景色の観念的な表象なのである。そして、その自然の驚異を本当には「見る」ことはできなくても、それでも人はそれを見る（心の中で見る）ことができるのである。そして、その対象がたまたま、その表象に沿ったものでなかったとしても、人の心に、まるで本当に「見た」もののようにして残りつづけるのはやはり表象の方なのだ。（ジョン・アーリ『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦訳、法政大学出版局、1995年2月）

旅をすることは、日常の空間から非日常の空間へ移動することである。ジョン・アーリは旅行によって、異なる風景、町並みなどを「観るという時にはちがった社会的なパターン認識をも」ち、「つまり、風景は町並みの視覚的要素にたいして通常日常生活で見ているより過敏になる」²と指摘している。日本人旅行者に対するタイのまなざしは、日本の「日常生活で習慣的に遭遇しているものとはっきり区別される」ものである。しかし、それだけではない。旅行体験として「見る」ことは、経済、社会構造、時代背景、あるいは、その国についての既知の情報などと不可分な関係にあり、人の心に「残りつづけるのはやはり表象」になる。

¹ 「2012年の訪タイ者数2200万人突破」インターネット・ホームページ <http://www.thailandtravel.or.jp/news/detail/?no=857>。2013年6月18日参照。

² ジョン・アーリ『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』（加太宏邦訳、法政大学出版局、1995年2月）

紀行・案内記は、一般的な情報を伝える新聞と異なり、旅行者が現地を実際に訪れた旅行体験を記録して再生産するメディアであるため、主観性が強く、フィクションのように誇張される部分もある。また、旅行記は種々の違った条件を背負う旅行者が同じ場所を訪れるという性格があるため、その場所にそそがれるまなざしの変遷や旅行者ごとのまなざしの特色について考察するための重要な資料である。そこで本章では、明治期から1990年代の間のタイに関する紀行・案内記を中心に取り扱って、日本人旅行者たちはどのような目的でタイへ渡航したのか、また、日本人旅行者たちはタイに対してどのようなまなざしを向けているのかという問いについて考察したい。

なお、紀行・案内記は文学の一つのカテゴリに分類される場合があるが、本章で取上げる紀行・案内記は文学的な要素がある旅行記（冒険旅行記）やルポルタージュだけでなく、学術的旅行記（調査旅行報告書）やガイドブックなどの情報を提供する文献などもある。そのため本論文で取上げる紀行・案内記は文学のジャンルに該当しないものとし、旅行に関するメディアとして取り扱う。

2 シャムへの旅

シャムと日本との本格的な交流がはじまったのは、明治8年（1875年）2月であった。オーストリア公使セツファーは清国とシャム国との兼任公使だった関係から、シャムが欧米諸国と友好通商条約を結び貿易も盛んであると告げ、日本政府もこれに参加するように勧めた。セツファーの進言を受け、大鳥圭介、川路寛堂、河野通猷が太政大臣の三条実美に建白書を提出し、シャムに渡航することとなった。このとき、大鳥等はシャムの政情、経済、風俗などを視察するため一ヵ月ほど滞在し、帰国後、報告書『暹羅紀行』（大鳥圭介、工部省、1875年6月）を公表した。この報告書は本格的にシャムを取り上げて紹介した最初の書籍だと言われている。

明治25年（1892年）に言論界で関心が高まった山田長政に興味を覚えていた³岩本千綱は、シャムに渡った。岩本千綱は高知県で生まれ、明治12年（1879年）に士官学校を卒業して、少尉に任官したが、明治20年（1887年）12月に新発田に赴任するときに「杯盤の間舊情」を語ることに上官に聞え、「物議騒然終に停職を命ぜられ」⁴た。東洋の諸国を漫遊するため、明治25年8月、岩本はシャムを訪問し、数ヶ月にわたって滞在した。帰国後、シャムについて講演会を開催して、そして『暹羅國探検実記』（岩本千綱、鹿島長次郎、1893年10月）が公演録として刊行された。『暹羅紀行』と同様にシャムの社会構造、経済、宗教、歴史について書かれていたが、『暹羅國探検実記』の特徴はシャムの貴族の風俗と庶民の風俗などが厳しく批判されるだけでなく、明治26年（1893年）の「暹羅危機」というフランスがシャムの領有を迫った事件や、当時のシャムと他国との関係なども書かれてい

³ 金子民雄「解説」（『シャム・ラオス・安南 三國探検実記』中央公論、1989年11月）

⁴ 本文引用は全て『明治シルクロード探検紀行文集成 第13巻 暹羅老撾安南三國探検実記』（ゆまに書房、1988年9月）に拠る。

る。このように、『暹羅國探検実記』におけるシャムは「總べて劣等不紀律を極め、放逸散漫を極め」と描かれている。

シャムの地を踏んだ岩本は、シャムへの移住や日本との通商の計画をシャム農商務大臣 プラヤー・スラサックモントリーに進言し、スラサックモントリーの協力を得て、明治 27 年（1894 年）に日本農民の移住計画を実行したが、後に「タイ国の農繁期に無頓着であったため、渡タイした日本人は全く逃散して農業に従事する者なく、移民計画はさんざんな結果となった」⁵とされている。しかも「タイ側の親日家スラサックモントリーにとって、事態はもっと深刻であ」⁶り、さらに借金の問題もあった。シャムの植民地化に尽力した岩本もシャムから姿を消し、ラオス・ベトナム探検に向かった。

石井米雄・吉川利治 編『日・タイ交流六〇〇年史』（講談社、1987 年 8 月）によれば、「岩本はこの探検に出発するまえに、バンコク船渠会社に工員を世話するといつて手付金 210 ドロを受け取っていた。また日本で装飾を施してやろうといつて、プラヤー・スラサックモントリーから、ラマー5 世より下賜されて家法にしていた刀剣を受け取っていた。（中略）岩本はこのような手付金をすでに使いこんでしまい、刀剣は神戸で他人に売り払って質草になっていた」。このような理由で、バンコクにいづらなくなった岩本は山本銀介とシャムを縦断し、ラオス・安南に向かつて、三国の実情を視察した。この探検旅行は翌明治 30 年（1897 年）4 月に終わり、帰国した岩本は、旅行記『暹羅老撾安南三國探検実記』を刊行した。

『暹羅老撾安南三國探検実記』は明治 30 年に博文館から出版され、昭和 17 年（1942 年）に再版された。『人はなぜ旅をするか』（1942 年、第 8 巻、交通公社）所収本文は、再版本からの抄訳である。また、1988 年にも『明治シルクロード探検紀行文集成 第 1 巻』としてゆまに書房により復刻された。さらに、同書をもとに翌年 1989 年 4 月 23 日と 30 日、TBS テレビで「新世界紀行」が放映された。また、1989 年 6 月から「バンコク週報」で現代語訳され、連載された⁷。

『暹羅老撾安南三國探検実記』の物語の内容は、鉄脚（岩本千綱）と三無（山本銀介）が「此國に重大なる關係ある北方佛欄西新殖民地老撾を跋躑し轉じて東方安南東京に向ひ至る所の人情風俗地理宗教其他萬般の實況を視察し」、「榎本子爵北澤正誠氏等より高岡法親王の御遺跡搜索の依托を受けたる」という目的で、無銭冒険旅行を試みるというものがある。しかし宮崎滔天は「盤谷雑話」⁸で、山本銀介について「盤谷四十人の醜業婦中にて第一の美人」の「お鶴」に失恋して、「狂氣の如くにな」ったので「髪を剃り眉を落して法界に佛心を祈るの人にな」ったと述べている。一方、当時シャム在留の日本人がスラサックモントリーから金員を得て、殖民の事業を設計して失敗した岩本の出家する理由について、宮崎は「暹羅人の日本人に對する感情に於ては寧ろ得る處多くして失ふ所少からんと思はる」ため、「暹羅の恩人に對し日本の知己に對するの申譯なり謝罪」であろうと指摘し

⁵ 吉川利治「「アジア主義」者のタイ国進出：明治期の一局面」（『東南アジア研究』1978 年 6 月）

⁶ 注 5 に同じ。

⁷ 金子民雄「解説」（『シャム・ラオス・安南 三國探検実記』中央公論、1989 年 11 月）

⁸ 宮崎滔天「盤谷雑話」（『宮崎滔天全集 第五巻』平凡社、1976 年 8 月（出典：『國民新聞』1897 年 1 月 30 日～2 月 3 日）

ている。しかし、岩本は『暹羅老撾安南三國探検実記』の冒頭で「暹羅人が僧侶に對する常態と云へ其質朴愛すべきもの」だと知っているため、無銭で食事や宿泊を得て、「盜賊等の危害を避くる」目的で巡礼僧に身をやつしたと述べて、巡礼僧の建前としてバンコクから敬遠したとしている。

『暹羅國探検実記』や『暹羅紀行』などの報告書と同様にシャムの經濟産業や制度について情報収集が目的の調査旅行をしても、『暹羅老撾安南三國探検実記』は「日本人の足跡未だ至らざる」、「蓋し猛獸、毒蛇の害は言を待たず、群盜昼出でて人を殺し、時に森林惡熱、猖獗を極め、命を殞すもの十中八、九なるを常とす」る冒険・探検要素が多分に含まれており、旅行の準備、携帯品、シャムの移動手段なども紹介されている。そして、シャムの旅の終わりに、シャムの氣候、人情風俗、交通、農務業、軍事、宗教、地方制度などの概要をまとめる。しかし、『暹羅老撾安南三國探検実記』で虎や泥棒と出会った出来事や現地の人々との交流などの冒険の要素は読者を楽しませる想像力を喚起するような感覚を与えず、それらの冒険による様々な困難は読者の同情を誘う。様々な困難の描写の要素は、国益のために献身的に旅行をするというようなメッセージなどを見ると、この旅行記は、岩本が体験したことを記すものだけではなく、バンコクでの汚名を返上し、信頼を取り戻す役割を果たしていると考えられる。

明治初期の『暹羅紀行』などの報告書と同様に、「無邪氣無教育の土民」や「野蠻無政府の地」などの〈未開〉という印象を与える内容を誇張・拡大して取上げる傾向がある。そのほかに、シャム以外、ラオスとベトナムも旅行したため、岩本は「暹羅人は先天的懶惰にして各自尊崇する佛者の命と雖も働くと云ふ事は成る丈け廻避せんと欲するの傾きあり之に反して老撾人は凡そ人間は働きて衣食するを常とし遊んで過すべき者にあらずとの觀念を有するが如し」というようにシャムとラオスやベトナムを比較して書いている。また、岩本は当時の話題になったシャムの鉄道設備を取り上げて「請負者たる英國人某が唯自家目前の利を計り一時誤魔化しの築造を為」し、「殆ど工事を中止して英國に歸り今に歸還せず」、「將來の政略商略に影響を及ぼす」と、シャムを搾取したイギリスを批判している。このように、『暹羅老撾安南三國探検実記』の特徴はシャムの内地の風景（東北部）が投影されることだけではない。西洋の勢力に進出されるシャムの内地の状況が強調され、「將來日本が當國に對する商略は今日の如き賣一方の方針を改めて反對に大に買方に進み深く内地に入て歐米人若くは支那人の足跡到らざる處を發見し日本人獨占の好産物地を取得すと、日本のシャム内地への進出が主張されている。

『暹羅老撾安南三國探検実記』のような無銭旅行体験記は政治や軍事の目的で記されても、冒険の要素を持つため、明治20-30年代に流行になって多く刊行され、明治末期に流行した冒険旅行記の先駆けだと考えられる。特に、『暹羅老撾安南三國探検実記』で描いた冒険要素があるシャム内地のイメージは明治40年代のシャムの冒険記でも見られるため、『暹羅老撾安南三國探検実記』は冒険地としてのシャムのイメージを固定化させていると考えられる。

以上のように、明治初期の旅行記を見ると、明治初期の日本人はシャムに関する知識が浅いため、シャムは気候、人情風俗、交通、地理、宗教などの様々な観点から分類され、その分類によって出来上がる集合の性質がシャムの知識が生成されてきた。そして、これらのシャムに関する知識によって明治初期のシャムの表象が喚起されてきた。そのシャムの表象は日本と対立する性質を持ち、オリエンタリズムの要素がはっきりと見られる。このように、明治初期から固定化されたオリエンタリズム的なシャムの表象は明治期以降も引き続き維持されている。

3 探検時代から冒険時代へ

明治 34 年（1901 年）には、冒険家中村直吉⁹は、世界一周旅行に出発して、アジア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなどを周遊し、帰国後、『五大州探検記』（全 5 巻）を出版した。これらは当時、冒険・探検小説で人気を博した押川春浪との共編として刊行され、そこでは物語の内容が誇張・脚色された箇所もある。『亜細亜大陸横行 第一巻 五大州探検記』（博文館、1908 年）には、様々なアジアの国々の話の中で、「暹羅探検」の話が収められている。「暹羅探検」で、中村直吉は「盤谷府の市街」、「王城」、「ワットプラケオ寺院」、「ローヤル公園、動物園、博物館」、「バンパインの離宮」、「山田長政の舊跡」などの観光地を訪ねた。また、写真師の気賀秋畝は、明治 33 年（1900 年）にシャムに派遣された十八人の仏骨奉迎団とともに、『亜細亜大陸横行・五大州探検記』と同様なシャムの名所に訪れて、『暹羅土産 仏骨奉迎』（仏骨奉迎写真発行所、1901 年 3 月）に収録した。『暹羅土産 仏骨奉迎』の特徴は、それまでのシャムに関する書物にありがちな未開の蛮地を探検するといった要素がみられず、その代わり、名所の写真や文字情報、感想などが載せられ、今日の旅行ガイドブックのようなものとなっている点である。紹介された名所は、今ではタイの有名な観光地になっている。以上、二つの旅行記を見ると、明治 30 年代にシャムを訪問する外国人旅行者は決まったコース、つまり王宮や寺院、博物館などのシャムの文明を象徴する場所に案内されているのである。

一方、シャムの名所以外、中村直吉『亜細亜大陸横行・五大州探検記』（博文館、1908 年 8 月）で言及されるもう一つのシャムの名物は「毎年一度アユチャ近郊の原野」の「象狩」である。また、押川春浪の弟子である河岡潮風の「讀んで字の如く五洲の怪奇譚を集めた」¹⁰『冒険壯遊 五洲怪奇譚』（博文館、1910 年 10 月）でも様々な国の話の中で、「シャム象狩快談」はシャムの唯一の「怪奇譚」として選ばれ、「象狩りは暹羅の名物、西班牙の闘牛、朝鮮の虎狩りとならぶ冒険的遊戯の三福對で」、「命懸けの仕事で、暹羅最大の冒険なのである」という記述がある。このように、明治 30 年代の旅行実記は象や象狩を繰り返し言及

⁹ 中村直吉（1865－1932）明治－昭和時代前期の冒険家。慶応元年 6 月 25 日生まれ。愛知県豊橋の帽子商。明治 20 年アメリカに、27 年カナダに行く。34 年商業視察を名目に無線世界一周の旅にでて、六年間に六十カ国をめぐった。日本人としてはじめてアフリカ、アマゾンを探検したとされる。（『講談社 日本人名大辞典』講談社、2003 年 5 月）

¹⁰ 河岡潮風「序文」（『冒険壯遊 五洲怪奇譚』博文館、1910 年 10 月）

され、〈象の國〉のシャムのイメージを生成している。特に、第3章の『少年読本第七編山田長政』などの明治期の山田長政テキストを見れば、象の描写は欠かせない描写である。これについて第3章で考察する。

その後、時代が下って、明治末期から大正の初期にかけては、報告書や旅行実記以外、冒険的紀行文などが多く残されている。これらの紀行文は冒険者の実際の経験に基づいて、読者を楽しませるため、内容に脚色されているものが少なくない。特に、日露戦争後には、帝国主義的価値観によって領土拡張が正当化され、その背景の中で冒険雑誌三誌である『探検世界』（1906年5月創刊）、『冒険世界』（1908年1月創刊）、『武俠世界』（1912年1月創刊）が創刊され、冒険・探検小説ブームの時代が到来する¹¹。このような冒険物ブームの流れの中で、明治30年代から受け継がれた〈象の國〉のイメージも含め、シャムは冒険紀行で未開で野蛮な風景だけが強調され、日本人冒険家の冒険地として舞台化されている。具体的な例をあげれば、松尾茂『馬來半島の猛獣狩』（博文館、1911年5月）などである。

松尾茂についての伝記情報は未詳であるが、報知新聞通信員として活躍した以外、宗教研究者として仏教和歌集の『道歌大観』（光融館、1912年）を編集している。『馬來半島の猛獣狩』の内容は、「西曆千九百九年五月六日」に「報知新聞通信員の名によつて破天荒の冒険紀行の途に上つた」「僕」がシンガポールを出発し、シャムの各地域を回り、その地域の風俗習慣について解説しながら、原住民とともに水牛・虎・鱷・象などの猛獣狩に行くというものである。多くあらわれる狩猟の場面では危険な野生動物の描写や、油断できない狩猟行為などを誇張して描写している。物語の舞台や背景であるエキゾチックな「密林」は、生き生きとした描写で読者である少年たちの想像力に働きかけながら、「無事に狩を終えた喜びと働きに應じて、幾チカルかの名誉の賃金を貰へる」という書き方で、シャムを侵略することが有益であると示唆している。このような物語は当時の読者の異文化への関心、理想的な主人公と同じ道を辿る冒険心をかきたて、海外に進出し冒険するという植民地主義のイデオロギーが介在しているのである。例えば、「裸で産れて裸で死ぬ未開の民、衛生とか養生とか云ふ思想は全く缺けて居るから、自分達が生命をつなぐ飲料水一即ちこの濁浪滾々たるメナム大河へ、犬猫の死骸を放り込むのは未だしも、大小便を流し込む。その水を勝手に汲上げて平気で飲用水とする」不浄、不潔な未開なシャムの風景が描かれたり、「豊かな胸乳が揺れ」、「男根の形をした木造の」「戀の神」を崇拝する、性的な放縦さと野生的なエネルギーといった幻想を抱かせるシャムの〈土人の女〉が描かれたりする。これらのシャムの描写は、当時の日本社会と比較すると、高度な文明社会を持つ日本と未開・野蛮なシャムという対比構造がはっきりと浮び、日本の優越性が強調されているように描かれている。

『馬來半島の猛獣狩』の舞台は殆どシャムとなり、原住民の風俗や、言語や、貨幣の単位「チカル」はすべてシャムのものである。しかし、この猛獣狩りの物語はなぜ『シャムの猛獣狩』というタイトルがつけられずに、『馬來半島の猛獣狩』というタイトルにされた

¹¹ 藤田みどり『アフリカ「発見」——日本におけるアフリカ像の変遷』（岩波書店、2005年5月）

のか。

日本のマレー半島への関心は明治 20 年代から始まっていた。明治 21 年（1888 年）に日本領事館が創設されてから、明治 25 年（1892 年）に三井物産の支店が先駆けになり、マレー半島への日本人の移住が開始された。しかし、明治 29 年と 30 年（1896-7 年）にはマレー半島で大洪水が起き、日本人の移民は様々な困難に直面し、四散したり、帰国したりした。明治 39 年（1906 年）10 月に、三菱の資本により設立された商会の三五会社が、ジョホールにゴム園を購入した。三五会社のマレー半島への進出は「日本本土の財閥系資本がゴムの投機に資本を投じはじめた最初のできごとであり、「大資本と並んで現地邦人の零細な資本によるゴム園所有もブーム的に進行」¹²するようになる。ゴム・ブームをきっかけに、日本人におけるマレー半島への関心は高まり、マレー半島や南洋の国々に関する文献や、旅行記や、マレー半島を舞台にする冒険紀行などが多く刊行された。これらのメディアを通して、マレー半島に関する多くの情報は大衆化され、当時の〈売れる〉話題となったのである。このように、当時の読者の関心に応じるため、物語はシヤムを舞台にしながらも、『馬來半島の猛獣狩』と名付けられたのではなかろうか。これによって、「シヤム」を「マレー半島」と呼ぶことに違和感がない当時の日本人にとって、シヤムは独立国家としてのシヤムとして知られず¹³、英国の保護地であるマレー半島の一部として知られたと考えられる。それに、ゴム園を解説する際に荒地や森林を開拓することが必要なため、当時のマレー半島のイメージはジャングルのイメージが植え付けられたのではないだろうか。このような「蛮カラ冒険地」としてのマレー半島は昭和初期の冒険小説にも（例えば、南洋一郎「吼える密林」〈「少年倶楽部」1932 年 4 月～12 月号〉など）受け継がれている。

昭和 10 年（1935 年）6 月、「シヤムの少年たちが擧國一致で四千圓の小遣ひを集めてチエンマイの密林からはるばる二匹の象を贈り物を」¹⁴したため、昭和 12 年（1937 年）3 月に「はな子」のお礼に、シヤムへ十七名の「日本聯合少年團聯盟の答禮使」が派遣された。「日本聯合少年團聯盟の答禮使」は「シヤムの動物園へ行つたら見事な虎が居り、上野動物園の虎が昨年死んで今は虎居ないから譲つてほしいと申し出したら同動物園でも喜んで承諾」¹⁵し、日本の少年団にお土産として「熊の仔と虎」¹⁶を日本に贈った。これを見ると、日本少年にとってのシヤムは、少年冒険小説で描いたように野生の動物が数多く生息している場所である。シヤム側も、そのイメージを利用しながら日本青年との交流を行って、両国交友を深めるとともに、新しい時代の青少年の国際性の涵養に資することを目的としている。

以上のように、明治末期から昭和初期にかけての旅行記におけるシヤムは明治初期のようなあらゆる分野の知識を集めたものより、当時の日本人の関心が投影されたものとなっている。つまり、明治末期の旅行記で描写されているシヤムのイメージを見れば、シヤム

¹² 矢野暢『「南進」の系譜』（中公新書、1975 年 10 月）

¹³ 矢津昌永『新撰外国地理』（丸善、1901 年 11 月）

¹⁴ 「“花子さん”のお礼に少年団から答禮使」（『朝日新聞』1936 年 12 月 15 日、朝刊）

¹⁵ 「“虎を送る”の快報 シヤム答禮使」（『朝日新聞』1937 年 4 月 21 日、夕刊）

¹⁶ 「シヤムから熊の仔と虎」（『朝日新聞』1937 年 4 月 25 日、夕刊）

の文化的な部分、例えば、寺院や、王宮や、博物館などが提示されているが、よく取り上げられるシャムのイメージは象などの野生動物がいる冒険地としてのシャムである。こうしたシャムの表象は文明の日本と対立する非文化的である一方で、ジャングルや野生動物などの描写はシャムの資源の豊かさが暗示され、日本の移民や植民の対象地として描かれているのではないか。

また、明治期から昭和初期までのシャム紀行に共通しているのは、山田長政、あるいはアユタヤの日本人町についての記述があることである。例えば明治期の報告書『暹羅紀行』に「山田長政の話」という節があり、『暹羅老撾安南三國探検実記』でも山田長政が活躍したアユタヤの日本人町を訪問する箇所がある。また、川上滝弥『椰子の葉陰』（六盟館、1915年5月）の「第三章 暹羅の日記」で「山田長政の名に依り知りし暹羅の國」と述べられている。これらの例から見ると、当時の日本人にとって山田長政はすでに一般化されており、シャムのトレードマークとして紹介されていたと考えられる。しかし、何もない当時のアユタヤの日本人町を訪問し言及する日本人たちは、シャムの名所を観光し紹介するというより、海外進出が困難だった時代に海外（シャム）で活躍した日本人の物語を実在の場所（アユタヤ）を通して語ることで、それよりはるかに海外進出が容易になった近代の日本人に向けて「日本人町」の再現・再興を呼びかけているように思われる。特に、海外で様々な困難を乗り越えて成功するという物語がある冒険旅行記は、海外雄飛としての山田長政の物語と共通しているため、明治期から昭和初期にかけての冒険旅行記では山田長政における社会言説¹⁷が共有されていると考えられる。

4 タイに渡航する特派員

前述のように、ゴムの資源のため、明治末期からマレー半島の重要性が高まった。ゴム・ブーム以前にシャムから日本へ多く輸出されていたものはチーク材と米であった。シャムの商品に関する取引を行っていたのは三井物産である。三井物産は日本初の総合商社であり、明治時代から海外進出して、多くの海外支店を設置した。三井物産が初めて東南アジア地域の市場を開拓したのは明治25年（1892年）のシンガポール出張所を開設した時であった。そして、明治39年（1906年）8月にチーク材の輸入を目的として、バンコク出張所¹⁸が設置された。初期のバンコク出張員の業績は良くなかったが、第一次世界大戦期に欧州製品の供給が途絶し、バンコク出張員の業績は上昇していった。昭和2年（1927年）1月にバンコク出張員はシンガポール管下にバンコク出張所へと昇格して、昭和10年（1935年）9月にバンコク出張所はシンガポール支店から独立し、バンコク支店に昇格した¹⁹。

戦前の三井物産は日暹貿易を拡大しただけではない。シャム国事情の調査研究や紹介の

¹⁷ 山田長政とタイ表象については、第2部第3章を参照。

¹⁸ 鈴木邦夫・花井俊介「三井系企業の進出」（『南方共栄圏——戦時日本の東南アジア経済支配』多賀出版、1995年6月）

¹⁹ 川辺純子「戦前タイにおける日本商社の活動——三井物産バンコク支店の事例——」（『城西大学経営紀要』2008年3月）

ため、昭和10年(1935年)11月に三井合名会社内に「暹羅室」を設置した²⁰。暹羅室は様々なシヤムについての調査を行い、『新興暹羅の経済現勢』(1937年)、『暹羅入国関係法規』(1937年)、『盤谷築港計画委員会調査報告書』(1937年)、『最近暹羅に於ける政治経済情勢』(1938年)、『北部暹羅の経済事情：ピサヌロツク地方を中心として』(1939年)、『北暹羅チェンマイの経済事情』(1939年)などの参考資料を刊行した。多くのシヤムに関する文献の中で『暹羅案内』(暹羅室、1938年11月)は他のシヤム国の参考資料と異なり、「シヤム旅行者の便宜に止らず、我國に於けるシヤム事情認識促進の一助とな」という目的で「渡暹者旅行の便に供するため極めて平易なる文章によつて同國の事情を紹介してゐる」²¹旅行案内書²²である。

『暹羅案内』は「序に代へて」「起ち上るシヤム」「南洋の寶庫シヤム」「氣候・人情・風俗」「暹羅に旅せんとする人々へ」「渡船経路に就て」「メナム河口を溯江して」「上陸第一歩」「足の便」「盤谷見物」「寺院をさぐる」「地方行脚」「地方行脚(北方線)」「地方行脚(東方線)」「地方行脚(南方線)」「暹羅旅行の手引き」「趣味の暹羅旅行」「結論」で構成され、付録として「暹羅鐵道時間及運賃一覧表」と「暹羅國地圖」が添付されている。ここから見ると、『暹羅案内』の前半は報告書と同様にシヤムの国情を提示し、「多種多量の工業原料の供給者」や「日本商品に對して更に重要な市場」などのシヤムに進出する必要性が主張されている。後半はシヤムに行く際に役に立つ情報、例えば、移動手段や、宿泊の情報、両替手続き、シヤムの観光名所などが旅行ガイドブックと同様に詳しく書かれている。また、シヤムの地方(北部、東部、南部)を紹介する箇所は、これまでのシヤムの旅行記にない要素である。シヤムの地方の紹介では各地方の観光名所が書かれるとともに、主な内容としてはそれぞれの地方にある工業原料が詳しく書かれている。このように、『暹羅案内』のシヤムは日本の原料地や市場であり、日本に搾取される立場にあるように見えるが、『暹羅案内』の「結論」では次のように述べられている。

日本が暹羅から物的利益を得ることは、その半面に於て暹羅にとつても精神的及び物質的利益であり、互ひに共存共榮といふ楯の両面をなすもので日暹親善はこの相互的利益の上に増進せらるべきである。斯くて日暹親善の為政者が互讓的に利害の衝突を調節しつつ國交の楫を巧にとるならば、兩國間に理想的な親善關係が樹立され、維持される日が來るであらうと吾人は確信するのである。(暹羅室『暹羅案内』暹羅室、1938年11月)

第1章で述べたように、昭和戦前期の「読売新聞」の語られ方によれば、日本とシヤム

²⁰ 「日本タイ協会について」『日本タイ協会』インターネット・ホームページ http://nihon-thaikyokai.go-web.jp/_tabid/91/_language/ja-JP/Default.aspx。2013年6月11日参照。

²¹ 暹羅室「序に代へて」(『アジア学叢書 231 暹羅案内』大空社、2010年9月)

²² 実は『暹羅案内』のような旅行案内書は明治期から存在していた。具体的な例を挙げると、圖南商會編『暹羅王國』(經濟雜誌社、1897年9月)の巻末にある「付録暹羅渡航者案内」で旅行手段や携帯すべき必要品を簡単に紹介している。

の交流活動に関する記事が多く掲載され、両国の良好な関係を強調する意図が見られる。その「日暹親善」の意図は、以上の引用のように、文化交流活動の面だけではなく、「互ひに共存共榮」という意味も含まれている。つまり、こうした「日暹親善」によって、日本は「暹羅から物的利益を得る」とともに、シヤムは「富強となる」。そして、富強化されたシヤムは「白人強國の植民地をなす東南アジアに精神的にも物質的にも重大な影響を興へ」、「東洋平和に貢献する」と、『暹羅案内』で主張されている。このように、『暹羅案内』はただのガイドブックではなく、アジア主義の言説を取り上げながら日本とシヤムが「互ひに共存共榮」するという建前のもと、シヤムへの搾取を正当化する文献であると考えられる。

暹羅室の文献以外、タイに関する同時代の文献には、日本タイ²³協會²⁴による『タイ國概観』（日本タイ協會、1940年12月）がある。『タイ國概観』はタイの情報、第二次世界大戦前のタイ社会、それまでの日タイ友好関係などを『暹羅案内』より詳しく述べている。例えば、「昭和十四年十一月二十七日（中略）日泰兩國間定期航空業務の實施に關する協定が調印せられ」、「翌十五年六月から開始せられ、東京から福岡、臺北、廣東經由で一週間一往復の定期」²⁵便についての最新の日本とタイの航空情報まで書かれている。その他、注目すべき文献に、永田直三『廣東・ハノイ・盤谷』（河出書房、1942年7月）がある。「商工省並びに神奈川県當局及び神奈川県南洋貿易協會の援助」で「南方に於ける雜貨及び布帛加工品の販路擴張に關する調査」するため、永田は「佛印と泰國とに向つて出發し」、報告書を兼ねた三国の旅行記として『廣東・ハノイ・盤谷』を執筆した。『廣東・ハノイ・盤谷』は、戦前のタイの雜貨及び布工業や、「モダンでお洒落で」、「案外見榮坊で新しがりやである」市街を描写するだけではなく、『タイ國概観』と同様に戦前の「タイの國家主義」の情勢も書いている。

以上のように、昭和10年代のタイ紀行・案内記には、明治大正期の紀行のような冒険的要素は見られない。その代わりに、タイとの貿易を目的とし、できるだけ詳しくタイの情報（移動手段、宿泊、地図など）を提供している。また、海外進出企業に役に立つ設備の情報（飛行場、電話、郵便局、銀行など）、タイの各地域の資源、タイ市場の情報も収集されている。このような案内記が昭和10年代に刊行された理由は、当時タイで起こった日貨排斥運動のためだと考えられる。昭和12年（1937年）12月13日に日本軍が南京を占領し、南京大虐殺を行ってから、日系商社と取引している在タイ華僑は日貨排斥運動を展開した。三井物産バンコク支店は「輸入日貨ノ排斥ノミナラズ本邦向暹羅米ノ買付ヲモ妨害」²⁶されるなど、様々な影響を受けた。タイの「商業經濟の樞軸を握つてゐる華僑の勢力」を弱め

²³ 昭和14年（1939年）6月24日に当時の首相ピブーンが国名の「シヤム」を「タイ」に変更した。

²⁴ 昭和10年（1935年）5月に財団法人に改組して財団法人暹羅協會となり、昭和14年（1939年）6月国名がシヤムからタイに変更されたのに伴い、財団法人日本タイ協會に改称した。

²⁵ 「朝日新聞」（「泰へ定期1番機」「松風」号）「朝日新聞」1940年6月8日、夕刊）によると、当時の空路として、一日目は東京発福岡經由で台北へ行く。二日目は台北から広東まで行き、広東で一泊する。そして、三日目は広東からバンコクのドンムアン飛行場へ行く。下り便は毎週月曜日に東京に出て水曜日にバンコクに着く。上り便は金曜日にバンコクから出發して日曜日に羽田空港に着く。東京ーバンコク片道の運賃は七百四十円であった。

²⁶ 石井米雄・吉川 利治『日・タイ交流六〇〇年史』（講談社、1987年8月）

るため、日本企業がさらにタイへ進出する必要がある。このように、昭和10年代のタイ紀行・案内記は在タイ華僑に対する日本の反撃という文脈を背景にして、日貨排斥運動の再発を防止するための日本の経済的対策の一環という要素がある。

1941年日本がタイと「日タイ同盟条約」を締結してから、日本軍はタイに進駐した。三井物産タイ支店は駐屯軍へ物資を納入するようになった。しかし、1945年8月に敗戦のため、三井物産バンコク支店はすべての資産を没収されて活動を中止させられる²⁷。戦時中に東南アジアを中心とした各地の戦場に報道や宣伝活動などの義務を果たす南方徴用作家たちが派遣された。これらの南方徴用作家は東南アジアに関する報告文や、小説や、日記などを書いた²⁸。日本の同盟国のタイは徴用先ではなかったが、南方徴用作家たちが派遣される前にしばらく滞在したり、休暇を過ごしたりした日本軍の基地であった。そこで、南方徴用作家たちの日記（例えば、高見順の日記など）や旅行記などを見れば、タイについての記述が見られる。それらの記述におけるタイはビルマなどの前線とは対照的であり、癒しの空間として描写されている。また、日本軍に服従するタイの姿は日本にとって女性的なものともみなされている。こうしたタイの表象は戦後の「女性天国」のタイ表象と関連があると考えられる。

戦後（1950年代）になると、学術研究を目的とし、タイを訪れる若者が少数ながら存在した²⁹。例えば、1957年11月から1958年4月にかけて大阪市立大学が「タイ、カンボジャ、ベトナム、ラオス」の東南アジアに学術調査隊を送ったが、「タイには一ばん長くいた」という。この調査隊は「みんな生態学者で、そのうち二人は植物を、他の二人は動物を、他の二人は人類を担当した。日本から国産ジープを三台もって行って、それに研究資材、宿営設備のいっさいを積んだ。さいわい事故もなく、約一万二千キロを走って、かなりの標本、資料、映画、録音などをもって帰ることができ」³⁰、後に「帰国報告会」で調査内容を報告し、そして、タイ旅行体験を基にした『岩波写真文庫 275 タイ——学術調査の旅——』を発表した。学術調査の旅によって、タイは日本の調査の対象になり、それまでまだ発見されていなかったものや日本にはないもの、例えば、チェンマイ山岳民族たちなどの調査を行った。

当時は、海外旅行がまだ自由化されていないため、海外に行く日本人は政府や大学や新聞社などによる組織的支援を受け、探検隊や、調査隊などを編成して団体で海外へ渡航するのである。これについて、前川健一『旅行記でめぐる世界』（文芸春秋、2003年2月）によれば「当時、外国に行くには、外貨の割り当てを受けなければいけなかった。日本にある貴重な外貨を持ち出し外国で使うのだから、それ相応の理由、つまり日本にとって有益であるという理由がなければ海外渡航は許可されなかった」ため、海外旅行への渡航許可

²⁷ 川辺純子「戦前タイにおける日本商社の活動——三井物産バンコク支店の事例——」（『城西大学経営紀要』2008年3月）

²⁸ 第二次世界大戦中のタイ表象については、第2部第4章を参照。

²⁹ これについて、山口誠『ニッポンの海外旅行——若者と観光メディアの50年史』（ちくま新書、2010年7月）では京都大学探検部『知られざるヒマラヤ 奥ヒンズー探検記』などが取り上げられている。

³⁰ 学術調査隊『岩波写真文庫 275 タイ——学術調査の旅——』（岩波書店、1958年9月）

を得るために、「視察旅行であるかのように」「書類を偽造」し、「いろいろ知恵を絞った」のである。例えば 1960 年代の旅行記、野末陳平『プレイボーイ東南アジアに行く』（サラリーマン・ブックス、1963 年 11 月）の「有名な冗句「日本人調査団」という節で、チェンマイ駐在日本人によれば、日本の学術調査はチェンマイに「けっこう来る」。それら学術調査団は「日本で寄付を集め、（中略）行く先々で大学の肩書きを利用して」「ただで飲み食いし、かつ泊まり、他人の迷惑」になり、「現地のタイ人にまで評判悪い」と、1950 年代の研究調査団の実態を暴露している。

『プレイボーイ東南アジアに行く』で野末は「プレイボーイ」としてマニラ、香港、マカオ、タイ、シンガポール、マラヤ、サイゴンへ旅に出る。タイのバンコクとチェンマイを訪問した野末が、バンコクの節で悪質なタクシー運転手や、「旅行者の顔がゼニに見える」タイ人の悪いイメージをしばしば書いている。しかし、チェンマイの節で著者からプレゼントを「一つ一つ合掌して受け取り、くちづけした」「チェンマイ美人」の様子に対して「タイ・ダンスや水上マーケットよりも、はるかに仏教国タイのイメージに似つかわしく」、「チェンマイだけは、もう一度行ってみたい」と述べている。一方で『プレイボーイ東南アジアに行く』には、1950 年代後半からチェンマイが売春街として見られていたとも書かれている。つまり、チェンマイは「美人の町」で有名になっただけではなく、チェンマイの「商売女」のサービスは「献身的、また自分でも楽しむ」。そこで、「日本の議員」や、学術調査団などは『『美人を世話しろ』』という態度でチェンマイへ旅に出るのである。また、同年発表された千葉一男『東南アジア漫遊』（高陽書院、1963 年 8 月）でも描写されている。同書で千葉は、普通の旅行記と同様に東南アジア（台湾、フィリピン、シンガポール、インドネシア、タイ、香港）の観光地を紹介しているが、現地の女性（あるいは、現地で出会った日本人女性も）との交渉も多く書かれており、同書は千葉の「東南アジアの女性遍歴告白書」とも言える。

両方の旅行記は、観光と売春を目的とし、香港や台湾を含めて東南アジアを回る。安価で様々な国の女を買える東南アジア地域は、日本人の観光者に対して男の性的な欲望を充たす空間だと見なされている。興味深いのは、昔から「仏教の国」としてのタイと「売春先のタイ」は矛盾しているように見えるが、従順な「チェンマイ美人」は「仏教国タイ」に似つかわしいものである。「仏教」を連想させる「安らぎ」や「優しさ」などのイメージはタイの売春婦と結びつけられ、「女性天国」というタイの表象になったのである。これは 1970 年代から 1980 年代の日本人旅行者のタイ売春ツアーのブームの始まりであった。

このように、昭和 10 年代のタイの案内記が刊行されてから、多くの日本人がタイを訪れた。当時の案内記はタイ進出支援情報を提供する目的で刊行されたため、案内記には近代化されたタイのイメージが多く投影されている。こうした昭和 10 年代の近代都市の背景で、戦時中に後衛地になったタイは軍事的に侵略されても、日本の軍人に便利さや快適さを提供する、癒しの空間として描写されている。このような戦前・戦中昭和期の日タイ関係をみれば、タイは明らかに劣勢に立たされたが、第 1 章で述べたように「日暹親善」や「同

盟国」という日タイ平等の言説に影響され抑圧された。こうした流れの中で戦後の旅行記を見ると、癒しの空間としてのタイは「女性天国」などの性的な意味で描写されている。戦後のタイ旅行は戦前のように国益追求の目的を、性的に満足させることによって心を癒したり、優位性を獲得したりする目的に変更したと考えられる。こうした現象の背景として、海外旅行の自由化後にタイで日本人向けの歓楽街「タニヤ」が誕生したのである。

5 タイ旅行自由化のはじまり

1964年、海外旅行が自由化されると、「旅券の取得には、社会的に承認してもらえるような目的や理由は要らなくなった。(中略)ただ海外が見たい、異国の文化に身を浸してみたい、日本から出たいという情熱だけで」³¹海外旅行に行くことができるようになる。しかし、当時の航空機の料金はまだ高額で、外貨の管理もまだ日本政府により統括されていたため、外貨割り当てが認められないと、海外旅行はできない。1960年代に海外旅行が出来る者は「カネやコネがある者」³²である。

1965年10月、1967年10月に『暁の寺』の取材のため、三島由紀夫はタイに渡航した、タイを舞台とした『暁の寺』を執筆し、『暁の寺』は1968年9月から1970年4月にかけて「新潮」で連載され、1970年7月に新潮社刊より単行本が刊行された。『暁の寺』の中で「バンコク観光案内の様相を呈する記述」があり、これについて、久保田裕子は「あたかも観光する本多のまなざしと同一化したかのような語り手の視線」³³であると指摘している。『暁の寺』は小説として読まれるだけではなく、観光地としての「暁の寺」を日本人に広めるガイドブックとしても機能し、その後出版されたガイドブック³⁴でも三島の『暁の寺』について言及されている。言い換えれば、『暁の寺』は著名な作家である三島によるタイ観光案内書のような役割も果たして、日本人読者にタイのエキゾチックな風景を印象づけたのである。

1970年にバンコクで「タニヤビル」が完成し、東京銀行（現・三菱東京UFJ銀行）などの日系企業が次々と支店を移転させた。また、新たに進出する日系企業もタニヤビルに支店を設けたため、タニヤビルはバンコクの「日系企業のシンボリックなオフィスビルとなった」³⁵。1970年の在タイの日本企業数は1960年代より100社以上増加し、日本人駐在員や出張者も増加していった。1970年後半、タニヤ通りに日本人向けの飲食店が次々と開店し、また、日本人向けのナイトクラブもタニヤ通りに移転してきたため、「タニヤ」は日本人向けの歓楽街となった。タニヤのナイトクラブはタイ駐在日本人を歓迎するだけでは

³¹ 山口誠『ニッポンの海外旅行——若者と観光メディアの50年史』（ちくま新書、2010年7月）

³² 前川健一『旅行記でめぐる世界』（文芸春秋、2003年2月）

³³ 久保田裕子「王妃の肖像——三島由紀夫『暁のタイ寺』における国表象——」『福岡教育大学 国語科研究論集』2011年2月

³⁴ 『世界文化シリーズ13：すてきな旅 東南アジア』（世界文化社、1981年）や、大脇誉次『エリアガイド107 東南アジアの旅』（昭文社、1989年7月）などで書かれている。

³⁵ 日下洋子『タニヤの社会学 接待から売春まで……バンコク駐在員たちの聖地』（めこん、2000年9月）

ない。1970年代に日本人観光客にとっても「海外旅行のハイライト」³⁶はタニヤで「日本人経営のナイトクラブ」に行くことである。

東南アジアを訪問する日本人の増加とともに東南アジアのガイドブックも1970年代に増加していく。代表的なものをあげれば、『世界の旅 11 香港／台湾／東南アジア／韓国』（中央公論社、1970年10月）や、脇田恵暢『東南アジアの旅』（ブルーガイド海外版、1971年7月）や、小林進『東南アジアの旅 徹底ガイド』（三修社、1977年4月）などである。これらのガイドブック、例えば「一〇〇万部も売れる」³⁷小林進『東南アジアの旅 徹底ガイド』は「微笑みを絶やささない、仏教に生きる国」としてのタイの観光地を紹介する以外、「ナイトライブ・イン・バンコク」や「代表的なナイトライフ」のコラムも欠かさずに読者に案内する。一方、北部の「美人の町」のチェンマイは、1970年代に入ると麻薬の生産地である「黄金の三角地帯」として知られ、世界に注目される都市になった。このように、ルポ・ライターたちはチェンマイを訪れて、黄金の三角地帯で麻薬の問題についてのルポルタージュ³⁸を書いた。この時代の旅行記を見ると、タイは売春の問題や、ドラックの問題などのイメージがよく投影されており、このようなタイの社会問題やイメージを題材にして、日本人作家たちはタイを舞台とし、ミステリー小説³⁹を多く書いたのである。

一方、同年代に仕事でタイに駐在するようになった日本人たちは家族と同伴する者が少なくない。旅行者とは異なり、夫の仕事というやむを得ない事情で外国に滞在することになった駐在員の妻たちは、現地の駐在生活、異文化の問題や、現地での出来事などを基にして滞在記を書いている。代表的なものに、例えば鶴文乃『暁の寺のある町——タイ国で過ごした三年間——』（勁草書房、1983年10月）がある。1974年に夫のバンコク転勤によりタイ在住となった鶴文乃は「六歳の男の子と一歳十ヶ月の女の子」、そして「八ヶ月の重み」を抱え、「見知らぬ国へ行く」。帰国後、「必要とする人に伝えたい」目的で、駐在の生活（アパート探し、美容院など）からやタイの文化（タイ語の勉強、タイ料理、タイ人の性格など）までを詳しく書いている。『暁の寺のある町』の特徴は、「〈創作〉わたしはアーヤさん 在泰日本人裏話」の鶴が製作したフィクションが最後に付録されていることである。「〈創作〉わたしはアーヤさん 在泰日本人裏話」は、タイ駐在日本人と働くタイ人が起こすトラブルの話、例えば、ルービーリングを「そっと持ち出し」たアーヤさんのポーンの話や、「自動車のガソリンをぬいて売ったり」する運転手のサワットの話などがある。鶴の鋭さは、語り手のタイ人の口を借りて、タイ人の悪い面や、タイ人を批判することである。

1980年代、タイ観光案内の記事は当時の海外旅行誌、例えば、「旅」や「旅行読売」などでも見られるようになった。紹介された主な観光地は、様々な寺院があるバンコク、山田

³⁶ 楠本憲吉「東南アジア紀行」など（『中国／東南アジア 新編 世界の旅 1』小学館、1971年10月）

³⁷ 小林進『東南アジアの旅 徹底ガイド』（三修社、1977年4月）

³⁸ 例えば、鄭仁和『幻のアヘン軍団 黄金の三角地帯にその影を追う』（朝日ソノラマ、1977年3月）、竹田遼『黄金の三角地帯 ゴールデン・トライアング』（めこん、1977年9月）、角川春樹『黄金の軍隊 ゴールデン・トライアングのサムライたち』（プレジデント社、1978年9月）などがある。

³⁹ 1970年代から1980年代までのタイを舞台としたミステリー小説については第2部第5章を参照。

長政の碑が残るアユタヤ、アメリカ軍兵士の保養地のパタヤ、「美人の町」のチェンマイであり、1970年代から人気がある観光地である。これらの観光地以外でも、「名画「戦場の架ける橋」の舞台」で「世界からの観光客で大賑わい」する「タイ泰麺鉄道」⁴⁰などが紹介されている。1986年にノンフィクションライターの沢木耕太郎は『深夜特急 第一便』（新潮社、1986年5月）を発表した。『深夜特急』は1974年から1975年にかけて、日本から香港や東南アジアに寄り、そしてインド経由でロンドンを目指す旅の話である。タイのバンコクの街（チュラロンコーン大学、寺院、マーケット、タイ式ボクシング）や、タイ南部に旅行した沢木は、タイ人に何度も騙されたり、女を売り込まれたりしたため、「バンコクは、とにかくやかましい街」だとタイに対する不愉快な思いを語っている。これと関連して、第3章の遠藤周作『王国への道 山田長政』や第5章の1970-1980年代のタイを舞台としたミステリー小説においても〈恐ろしい〉〈危険な空間〉としてのタイが描かれている。

この時代のような旅行記を見ると、一つの共通点として挙げられる点は、タイにとって好ましくないイメージを投影していることである。駐在記ではタイ人の使用人の詐欺行為を、一般の旅行案内記や紀行ではセックスとドラッグについて書かれている。当時の東南アジアを旅行する多くの日本人は海外派遣者や売春ツアーであった。つまり東南アジアは大人の男の空間で、若者にとって興味がない地域であった。しかし1980年代後半、沢木の東南アジア旅行体験記『深夜特急』が発表された頃から、東南アジアは若い読者の注目を集め、1980年代後半から1990年代の若者の東南アジア旅行ブームの背景になったと考えられる。また、1980年代後半、タイでエイズの流行が急速に広がった。セックス、「麻薬生産地」によるドラッグ、エイズの問題などのイメージを払拭するため、1987年にタイ国政府観光局（現在、タイ国政府観光庁）は「タイ観光年」というキャンペーンを開始し、自然や文化を観光の対象として積極的に宣伝する政策を執った。その結果、1990年代のタイは以前より大きく変化し、様々なイメージが投影されているのである⁴¹。この現象のきっかけで、1990年代にタイ旅行のブームが起こり、タイに関する書物が日本で多く出版されるようになった。

前川健一によれば、「九〇年代なかばあたりからタイ関係書が急激に増え、神田にあるアジア書籍専門店の「アジア文庫」では、毎月の売り上げベスト10のほとんどはいつもタイの本が占めるようになった」⁴²。この現象については、日本の旅行ガイドブックの定番として知られる『地球の歩き方』を見れば分かる。『地球の歩き方』はダイヤモンド・ビッグ社より1979年に創刊されたが、タイを初めて取り上げるのは1987年⁴³である。その後、1990年代だけで、『地球の歩き方』のトレードマークとして刊行されたタイに関するガイドブックは大量出版された。『地球の歩き方』の特徴は、大手旅行社のパック・ツアーと異なり、

⁴⁰ 「タイ泰麺鉄道とパタヤの旅」（「旅行読売」1984年11月）

⁴¹ 安福恵美子「タイにおける国際観光の諸相——ホスト・ゲスト関係を中心に——」（「国際関係学部紀要」1996年3月）

⁴² 前川健一『旅行記でめぐる世界』（文芸春秋、2003年2月）

⁴³ ダイヤモンド・スチューデント友の会『地球の歩き方 タイ——やすらかなる国く'87'88版』（ダイヤモンド社、1987年2月）

若者の憧れる『深夜特急』の沢木耕太郎と同様に独力で安価な旅行ができるように、読者に宿泊や移動方法などを提供している点にある。また、『地球の歩き方』は若者だけではなく、若い女性（OL）や、「比較的休みが長くとれる」「デザイナー、イラストレーター、コピーライターなどの「カタカナ業の人たち」⁴⁴からも人気を得ている。

1990年代に刊行された『地球の歩き方』⁴⁵をみると、例えば、『地球の歩き方 タイ〈'91~'92版〉』（1991年7月）で「やすらかなる国」という表現がタイのキャッチ・フレーズとして使われて、また表紙には二人の僧侶が川の向こうにあるパゴダを眺めている仏教の国のタイをイメージさせるイラストレーションが使用されている。内容を見ると、タイの各地域を詳しく解説している。例えば、「徹底ガイド編」で「バンコク」は「騒音公害、空気汚染、売春観光、これらがバンコクのすべてだろうか。答えはノーだ」、「バンコクの市内、いたるところにあるワット（仏教寺院）。このワット抜きにはバンコクを語られない（中略）人けのない中庭は不思議な静寂に満ちている。外の喧噪とは隔絶した空間」というように聖と俗が織り成された場所としてのバンコクを反映した描き方になっている。「チェンマイ」は「この地方の町が持つしっとりとした落ち着き」、「山々に囲まれ、こぢんまりとした田園風景は、日本に似ていて親しみを覚え」、「町の人々の笑顔とやさしさに何度も触れることができる」と描かれている。このように、『地球の歩き方』におけるタイは、「仏教の国」としてのタイのイメージを重視し、仏教の心による「やすらかな」タイのイメージを復元しているのである。

ガイドブックの他に、1990年代に様々なジャンルの旅行記が多く刊行された。例えば、大量のバックパッカーの紀行の他にタイ料理案内記（清水ケンゾー『タイは辛いよ、美味しいよ』（集英社、1994年2月）、酒井美代子、高野たけし『おいしいタイランド』（東京書籍、1998年8月）、タイ鉄道旅行案内記（岡本和之『タイ鉄道旅行』（めこん、1993年12月）、杉本聖一『魅惑のタイ鉄道』（多摩川新聞社、2000年9月）、駐在記（久保木裕一郎、高橋行雄『タイ 長期滞在者のための最新情報 55』（ホリデイワールド、1995年8月）、タイの夜遊び案内記（家田荘子『ラブ・ジャンキー——日本発タイ行“性”の直行便』（集英社文庫、1992年11月）、アジア性風俗研究会 編『タイ売春読本』（データハウス、1994

⁴⁴ 山口誠『ニッポンの海外旅行——若者と観光メディアの50年史』（ちくま新書、2010年7月）

⁴⁵ 1990年代ダイヤモンド・ビッグ社より刊行されたタイに関する『地球の歩き方』は次のようである。地球の歩き方編集室『地球の歩き方 タイ——やすらかなる国〈'90~'91版〉』（1989年12月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 フロンティア タイ北部—山岳民族を訪ねて』（1990年10月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 タイ〈'91~'92版〉』（1991年7月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 バンコク〈'92~'93版〉』（1991年12月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 バンコク〈'93~'94版〉』（1993年3月）、戸田杏子、佐藤彰『地球の歩き方—旅のグルメ タイ——タイ料理の楽しみ』（1993年2月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 タイ〈'94~'95版〉』（1993年10月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 バンコク〈'94~'95年版〉』（1994年7月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 旅の会話集〈13〉タイ語・英語』（1994年8月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 RESORT308 プーケット』（1994年11月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 タイ〈'95~'96版〉—やすらかなる国』（1995年2月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 バンコク〈'96~'97版〉』（1995年7月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 RESORT プーケット』（1995年11月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 やすらかなる国タイ〈'96~'97版〉』（1996年2月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 バンコク〈'97~'98版〉』（1996年7月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 タイ—やすらかなる国〈'97~'98版〉』（1997年3月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 RESORT プーケット・サムイ島・ピピ島・クラビ』（1997年8月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 タイ〈'98~'99版〉——やすらかなる国』（1998年3月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方旅マニュアル タイ個人旅行マニュアル〈'98~'99年版〉』（1998年4月）、地球の歩き方編集室『地球の歩き方 タイ〈1999~2000版〉』（1999年3月）

年 7 月))、そして、タイの農村の訪問記 (山下惣一『タマネギ畑で涙して——タイ農村ふれあい紀行』(農山漁村文化協会、1990 年 11 月)、山下惣一『タイの田舎から日本が見える』農山漁村文化協会、1996 年 12 月)、水野潮『マンゴーが空から降ってくる——タイの田舎に暮らすということ』めこん、1998 年 10 月)) などがある。特に、観光地ではないタイの農村の訪問記は、タイの街の風景を投影する他の旅行記と異なり、まだ近代化されていない、「子供のころの日本の農村に似ている」⁴⁶タイの田舎の風景を描き、日本人が「昭和三十年代の初めまで私の村」と感じるようなノスタルジアを生じさせる場所としてタイを描く点に特色がある。このように、1990 年代のガイドでは、タイが日本人の観光客にエキゾチックの風景だけではなく、ノスタルジックな風景や、幸福な田舎暮らしを提供する場所として描かれる。それは、そこを訪れる観光客として老年世代を呼び込もうとしていることと無関係ではないだろう。つまり、日本における海外旅行に行く人々の多様化や高齢化応じて、タイが売り込む自国イメージも変容している可能性がある。

6 まとめ

本格的にシャムを取り上げて紹介した最初の書籍である、大鳥圭介『暹羅紀行』は、視察旅行から得られたシャムに関する情報を百科事典的に収めた、明治期におけるシャムの参考書といえる。明治 30 年代に入ると、明治期南進論によって、豊かなシャムは日本人に開拓されるべき、資源の豊かな未開地と見なされている。しかし、昭和 10 年代のシャムの案内記を見ると、アジア主義の言説を背景として日本企業の貿易を奨励するため、未開のシャムのイメージは近代化されたシャムのイメージに置き換えられる。このように第二次世界大戦前、日本の旅行記におけるシャムは王宮や寺院などの風景より「仏教の国」として知られ、他の東南アジア国と同様に日本の経済的植民地として見なされている。

日本人のタイに対するまなざしの変化していくのは、1964 年に観光目的の旅行が自由化されてからである。1960 年代からタイは、香港、台湾、フィリピンなどの「売春街」と見なされている国のひとつとして捉えられ、売春目的で多くの日本人がタイを訪れた。旅行者は「仏教の国」の表象から連想される、優しさや従順さをタイ人女性に押し付け、優しい女性がいる「売春街」としてタイの表象が形成されていったのである。サービスがいいタイ人女性のイメージは 1970 年代から 1980 年代前半までタイへのセックスツアーのブームを巻き起こした一方、エイズの問題ももたらした。これらのイメージを払拭するため、1987 年にタイ国政府観光庁はタイ文化やタイの自然 (ビーチ・リゾートなど) を取り上げて、世界中で観光宣伝を行った。その後、1990 年代から多くの日本紀行・案内記は、タイ国政府観光庁が「日本人に見て欲しいタイ」(タイ料理やタイリゾート地など) のように書かれたが、「日本人が見たタイ」という旅行記もまだ残っている。特に、タイの農村の探検記でノスタルジックで、未だ近代化されていないタイの田舎は、都会の生活に疲れた日本

⁴⁶ 山下惣一『タイの田舎から日本が見える』農山漁村文化協会、1996 年 12 月)

人旅行者たちが憧れる風景になった。

寺院や世界遺産観光、雑貨ショッピング、スパ（エステ）、グルメなどタイ旅行には楽しみがいっぱい。文化も多様性に富みビーチリゾートも数あるタイは魅力満載。（「タイ 関連エリア情報」『JTB』インターネット・ホームページ <http://www.jtb.co.jp/kaigai/asia/thailand/>。2013年9月9日参照。）

以上の引用のように、1990年代から2000年代にかけて、観光によるタイのイメージは非常に多様化している。外国人観光客にとってタイは多様な魅力を持つだけでなく、多様な体験が可能な空間であるため、観光旅行者の多様な需要に応える観光地として見なされている。このように、2012年にタイは22,303,065人の外国人観光客を迎え入れ、2011年比15.98%の大幅な増加となった。特に、訪タイ日本人数は21.58%増加した⁴⁷。タイ国政府観光庁の調査「Thailand Destination Image」⁴⁸によれば、日本人旅行者が見たタイのイメージについて1位は「果物／タイの屋台料理」、2位は「タイ人の微笑み／タイ人のホスピタリティ」、3位は「暖かい気候／ビーチ」、4位は「物価が安い／買い物」、5位は「スパ／マッサージ」である。調査結果のように、多様なタイのイメージの中で日本人旅行者が見たタイは「寺院や世界遺産観光」などのエキゾチックなイメージではなく、しかし、タイの「料理」「気候」「タイ人のホスピタリティ」「安価な物価」というイメージである。この変化を説明すると、1995年代後半のインターネットの普及により、社会全体の情報化が進んでいるため、人々が移動することなくとも異文化接触することができる。つまり、タイに行ったことない人でもタイの「寺院や世界遺産観光」などの歴史的文化的なタイについての知識をすでに持っている。しかし、「料理」「気候」「タイ人のホスピタリティ」「安価な物価」などの日常生活に関するイメージはタイで体験しないと接触することができないことである。このように、2000年代のタイのイメージは以前のような全体的なイメージではなく、個人の旅行でタイに触れることによって生成されると考えられる。また、以上の日常的なタイのイメージは「住みやすい」タイのイメージをもたらすため、タイは日本人の「観光地」だけではなく、「長期滞在地」としても人気が高まっている。高齢者はもちろん、若者も「日本の難から逃げられてき」⁴⁹て、バンコクで外こもりという形で長期滞在をしている日本人が少なくない。このように、現在のタイは日本人にとって「観光地」だけではなく、「避難地」という存在としても活躍している。

以上のように、明治期から1990年代にかけての紀行・旅行記にはそれぞれの時代のタイ表象がなされている。これらのタイ表象は第2部「日本近現代文学におけるタイ表象」を

⁴⁷ 「2012年の訪タイ者数2200万人突破」インターネット・ホームページ <http://www.thailandtravel.or.jp/news/detail/?no=857>。2013年6月18日参照。

⁴⁸ รายงานขั้นสุดท้าย โครงการศึกษาภาพลักษณ์ด้านการท่องเที่ยวของประเทศไทยในสายตาของนักท่องเที่ยวชาวต่างชาติ Thailand Destination Image. เข้าถึงได้จาก: http://tourismlibrary.tat.or.th/link/book/T23536_11.pdf (วันที่ค้นข้อมูล: 28 สิงหาคม 2556) (2013年8月28日参照)

⁴⁹ 下川裕治『日本を降りる若者たち』（講談社、2007年11月）

見れば、多少共通している部分が存在する。つまり、紀行・旅行記と文芸作品は影響関係があると考えられる。そのため、第 2 部ではタイを舞台とした日本近現代文学作品を対象として、紀行・旅行記で描写されていない、文芸作品におけるタイ表象を検討する。

第二部

日本近代文学におけるタイ表象

第3章

山田長政関連のテキストにおけるシャム

1 はじめに

明治期に入ってから、人々に海外に関する知識を広めることを目的として、世界の地理・風俗に関する書籍や旅行記・案内書などが多く刊行された。新聞雑誌や教科書に、各国の代表的な風景や人物の版画などを添えて紹介した例も多い。その中に「シャム」を紹介した書籍もある。その特徴は地理的な情報を提供するのみではなく、江戸期の文献の中にも登場する「山田長政」の伝説を収めている点にある。例えば、まとまったかたちでシャムを紹介したものとしては最初の刊本といえる『暹羅紀行』（大鳥圭介、工部省、1875年6月）では、地理、気候などが詳細に記されるとともに、シャムの歴史の観点から山田長政が取り上げられたことが確認される「山田長政の設」の記述がある。また、明治期のシャム旅行記などを見ると、必ず日本人町跡や長政の遺跡を訪ねたことが書かれている。さらに明治初期には、歴史教科書の中にも山田長政が登場する。また、シャムを舞台とする長政についてのテキストは現代まで引き続き書かれ、日本人にシャムのイメージを提供し続けてきた。日本のシャムについての関心は、山田長政という人物を介して得られたものであると言える。そのため、近代から現代まで日本におけるタイの表象を検討する際に、山田長政に関する文献は不可欠のものである。

土屋了子²は山田長政に関する文献から山田長政像を分析し、1「長政の死から開国まで」、2「開国から第一次世界大戦勃発まで」、3「第一次世界大戦勃発から一九三二年まで」、4「一九三二年から第二次世界大戦終結まで」、5「第二次世界大戦終結から現代まで」という5つの時期に区分している。土屋によれば、1「長政の死から開国まで」の山田長政は後世の書物の材料・原型を提供し、それを基に形成された。2「開国から第一次世界大戦勃発まで」の山田長政のイメージは神話化され、「アジア主義や南進論を实践した模範として位置づけられた」。そして、3「第一次世界大戦勃発から一九三二年まで」は明治末期ほどの注目は得られなかったが、4「一九三二年から第二次世界大戦終結まで」は再び山田長政ブームが起り、「大東亜共栄圏」や「戦争遂行という政治的のため」に再び神話化された。5「第二次世界大戦終結から現代まで」の山田長政像は戦時中のように神話化されることはないが、「新たな長政像が描かれることになる」と論じられている。

土屋の分析からも分かるように、2「開国から第一次世界大戦勃発まで」と、4「一九三二年から第二次世界大戦終結まで」の山田長政のイメージは当時の政治的な影響を受けな

¹ 岩本千綱の『暹羅老樞安南三国探検実記』（博文館、1897年9月）や、中村直吉『亜細亞大陸横行・五大州探検記』（博文館、1908年8月）などである。

² 土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」（『アジア太平洋討究』2003年3月）

から作られている。それでは、神話化された時代の山田長政テキストの中で、物語の舞台としてのシャム（タイ）については、どのように描かれ、どのように意味付けられたのか。この問題を解明するために、本章では、2「開国から第一次世界大戦勃発まで」では遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』（1898年）、4「一九三二年から第二次世界大戦終結まで」では角田喜久雄『山田長政』（1940年）を各時代の代表的文献として取り上げ、山田長政を描いた作品の中で、物語の舞台であるシャムにはどのようなイメージが投影されているのか。また、5「第二次世界大戦終結から現代まで」の山田長政の「新たな」イメージは神話化された山田長政像とどのように異なるのか、そして山田長政の「新たな」イメージはシャムのイメージとどのように関連付けられているのか、戦後の代表的な文献として遠藤周作『王国への道 山田長政』（1984年）を考察する。

2 山田長政テキストについて

明治25年（1892年）には山田長政ブームがあり、山田長政についての書籍が多く刊行された。明治期の山田長政ブームのきっかけについて、矢野暢は次のように述べている。

清水次郎長こと山本長五郎が、静岡県と多少とも縁故のあるらしい人物として山田長政のことを知り、それを郷土の英雄に仕立てようとして、建碑の計画を発想したのが、その明治二五年であった。次郎長は、資金集めのために東京大相撲を同年七月に呼んでいる。その計画には、自由民権論、地方分権論を主唱し、支えていた「函谷日報」「静岡大務新聞」などの地元紙が積極的に協力することとなり、そして、競争関係にあるそういう複数のメディアによって動員された郷土史家たちが、同年七月までに刊行という条件で、文筆の力で清水次郎長の計画を応援する作品を書いたのである。（「山田長政 神話と虚妄」『講座東南アジア学 10 東南アジアと日本』弘文堂、1991年2月）

山田長政の建碑の募金集めのために行われた「東京大相撲」は多くのメディアで取り上げられ、注目された。明治25年（1892年）に関口隆正『山田長政伝』（草深十丈書屋、1892年4月）、間宮武『山田長政偉勳録』（間宮武、1892年6月）、岡村信太郎『山田長政一代記』（岡村信太郎、1892年6月）などの山田長政についての文献が多く刊行された。それを契機として、山田長政の知名度も一層上がる。また明治27年（1894年）の『征清軍歌 忠君義勇』（石原貞堅、明玉堂、1894年9月）の中には「山田長政六昆国兵防戦の歌」があり、明治32年（1899年）には明治座で狂言「山田長政譽軍扇」³が公演された。このように、明治25年（1892年）の山田長政ブームをきっかけに、山田長政は広く日本人の間で知られるようになった。

³ 「明治座」（「朝日新聞」1898年12月18日、朝刊）

明治期の山田長政の情報源になった重要な作品⁴は『暹羅国山田氏興亡記』である。『暹羅国山田氏興亡記』は元禄年間（1688～1704年）に著述されたと推測される。その内容は次の通りである。尾張出身の山田仁左衛門（のちの山田長政）が商人として、シャムに滞在する。山田仁左衛門は才知に溢れ、シャムの官人に東洋の物語を語る。東洋の文武学を学ぶため、国王は仁左衛門を採用し、国守に任ずる。仁左衛門は国王に拝謝し、日本町にいる勇士を集め、将軍として活躍する。その後、シャムの国王は重病で亡くなり、13歳の太子が即位する。しかし、太后はカウハムと不義し、太子を毒殺し、自ら女王として即位する。仁左衛門は先王のため、復讐を決意し、戦争の準備を行う。仁左衛門を排除するため、女王は公使のチャントポラに仁左衛門を毒殺させる。仁左衛門の息子、オインは女王に復讐するため、義兵を集める。しかしオインは復讐できずに、戦場でなくなる。シャムの日本町も焼かれる。

山田長政についての物語は江戸時代から変化し続けてきた。『天竺徳兵衛物語』（1707年）では、長政はシャム王になると書かれ、『駿河国志』（1783年）では、長政は駿河の出身だと述べられている。『山田仁左衛門渡唐録』（1794年）では、長政は駿府の商人、滝左右衛門と太田治右衛門の船に乗り、シャムまで渡航する。そしてシャム王の王女と結婚し、王になった後で、二人の商人と再会し、恩返しのため、浅間神社を敬拝し、駿府の旧友に土産を送るエピソードなどが書き加えられたが、オインの復讐のエピソードは削除されている。このことから、山田長政の伝説は少しずつ脚色・削除されたことが分かる。明治時代に入ると、少年向けの読み物や教科書の中で山田長政伝説は頻繁に登場する。子どもに分かりやすく伝えるために、会話や日本的な滑稽味やエピソードを加えて、物語に仕立て上げている。様々な資料を見ることで明らかとなった明治期の長政の特長を以下にまとめる。

まず長政の出身については、前掲の江戸期の資料を見ると、尾張出身か、駿河出身かはっきりしていなかったが、明治期の資料ではほとんど駿河出身である。これは明治25年（1892年）の山田長政ブームに関連していると考えられる。

また、明治期の長政についての資料、特に少年向け読み物では、子ども時代の生活が述べられている。『習文必用』（高島正清編、梅巖堂等、1876年3月）では、「少メ大志アリ好テ書ヲヨミ武技ヲ演ス」と述べられ、『静岡県郷土史談』（法月鋭児、修誠堂書店、1894年12月）では、「幼より兵書を繙き、武藝を講ず、常に海外に航して、名を顯さむと欲せり」と書かれている。江戸時代の資料と比べると、長政の幼少期の性格などが加えられている。その理由は、子どもである読者に、物語に親しみやすくさせるためであったろう。「大志」や、海外進出を欲することなどが創作された長政のイメージは子どもに明治期の英雄精神を認識させると考えられる。

また、明治初期の資料を見ると、長政は織田信長の孫で、商人の家に生まれたと述べられている。明治34年（1901年）8月に発行された教科書『小学修身訓 高等科教員用 卷三』（学海指針社編、集英堂）では、織田信長の孫ではなく、「元は一貧乏人の子が、この

⁴ 矢野暢「近代日本の南方関与」（『東南アジアと日本』弘文堂、1991年2月）

功名を立てたのは、是も日本の譽れとして、今に我々が愉快を感じずる所であり」と書かれている。『古英雄之傳』（町田源太郎編、晴光館、1910年3月）では「日本に居ては飯が喰へない」長政の財政状況を述べている。こうした山田長政の描かれ方、貧乏な家の子どもが海外雄飛をすることで立身出世を果たすという、明治初期の理想的な価値観を反映したものと考えられる。

江戸期の山田長政に関するテキストを見れば、シャムは、〈南天竺〉の中にある国とされている。天竺とはインドだけではなく、「海の向うの国」⁵も意味している。シャムは当時の人々にとって遠くて、あまり知られていない所である。〈南天竺〉にあるシャムのイメージは明治初期まで見られる。明治20年代に入ると、『軍人精神叢談』（岡田宗吉・楠美六五郎、九皋堂、1890年8月）でシャムに行く決意をする前に「臺灣ニ航セント欲」すと書かれており、その後、台湾経由でシャムへ渡航する長政が頻繁に描かれていく。『日本之光輝』（関徳（遂軒）編、青木嵩山堂、1895年2月）では、「臺灣に止まることとなりしかば夫より各所を巡廻し其地勢を通覧なしつゝ思ふやう斯る蕞爾たる一小島にも己に主ありて吾自由になすべからず」という長政が台湾に滞在しない理由までも述べられている。また「少年亀鑑」（三育舎編輯所編、三育舎、1897年2月）で、「國內にては功を立つるに足らず。（中略）臺灣は、未開の一孤島にして。未だ事を爲すに足らざりしかば、又進みて暹羅に渡りき」と書かれている。遠く、想像のできない〈南天竺〉にあるシャム像は、台湾の南にある国だと描写されたことで、〈南天竺〉にある国より、より一層現実的な存在になったと考えられる。明治7年の台湾出兵や、日清戦争後の台湾占領のため、日本人は台湾を身近に感じるようになった。日本にとって台湾は〈南〉への玄関口であり、「南洋」開発の基礎になるのである。台湾に留まらず、より一層南に渡ると付け加える文章は、当時の南方への関心の証だと思われる。また、前掲のような江戸期の資料では、長政は元々商人としてシャムに渡航し、官人に任命された後で、軍人として活躍する。しかし、明治期の多くの資料では長政は最初から軍人として活躍し、国王の娘を妻にし、国王になり、シャムと日本の貿易を奨励する。貿易が行えるきっかけとしては、山田長政が恩人・滝左右衛門や太田治右衛門と再会することによる。滝左右衛門・太田治右衛門との再会のエピソードは、江戸から明治にかけて、書き換えられてきた山田長政に関するテキストにおいて、不可欠なエピソードとして描き続けられている。このように、山田長政伝はその時代の要請に応じて少しずつ改変されたり、加筆されてきた経緯がある。

3 遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』

遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』と明治期の移民政策

⁵ 1876年、幕府は「日本・ハワイ臨時親善協定」を結んだ。出稼ぎ人に〈ハワイ〉のことを説明するため、幕府は日本人になじみのである「天竺」という言葉を使用した。（藤崎康夫編『日本人移民—写真絵画集成—（1）ハワイ・北米大陸』日本図書センター、1997年11月）ように、「天竺」とは当時の日本人が知らない・遠いところにある国のことを説明する言葉なのである。

前述したように、明治期に数多く刊行された山田長政テキストの一つに、遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』（博文館、1899年4月）がある。「少年読本」は「一八九八年（明治三十一年）一〇月、博文館は好評だった叢書「少年文学」とは趣向を変えた、新たな少年向け叢書の刊行を開始した。「少年読本」全五〇編、わが国最初の、複数の著者による伝記児童書の、シリーズ出版で」⁶、「少年読者に雄大な気性を育て、大事業を目指す志を抱かせる」⁷という趣旨で刊行された。このシリーズは「各編刊行のつど、多くの新聞雑誌が批評を揚げるなど、好評を得て重版も相ついだ」⁸と言われており、当時の少年読者に人気があったことが分かる。一方、著者の遅塚麗水は、「生まれ育った沼津と山田長政が少年期を送ったとされる府中とは五〇キロメートルの距離しかなく、長政が奉額した浅間神社には麗水もしばしば参詣していた。旅が好きで、すでに紀行文作家として世に知られていた麗水が長政を担当するのは、「少年文学」ですでに一編書いた経験もあり、ごく当然のことであった」⁹。遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』は、口承的なかたちでも伝わる江戸以来の山田長政像を内面化した作者がどのような長政像を用意したかという点で注目される。

明治25年（1892年）の長政のテキストでは、明治期の地理的な資料を参照し、読者にシャムを紹介している。例えば『山田長政一代記』（岡村信太郎、岡村信太郎、1892年6月）は、二人の商人がシャムに再来するエピソードであり、「繁華なる一都府に着き、府衙と思しき家に連れられ行きぬ。此の都は抑も何處で、暹羅王城の在る處、全國一の大都、バンコック府にして、兩個の誘はれたる家は、府廳にてありけるなり」と書かれている。興味深いのは、この描写が長政が生きたアユタヤ時代のシャムではなく、この本が書かれ読まれた明治時代と同じラーマ五世時代の「バンコック」の風景であるという点である。つまり、著者は長政の時代の物語であるにもかかわらず、明治期のシャムの地理書を参照し、そのままシャムの情報として読者に提供したのである。

一方、麗水は『少年読本第七編山田長政』を執筆するために同時代の様々な資料を参照し、アユタヤ時代のシャムについても詳細に調べた。アユタヤをバンコクと誤解している他の伝記と異なり、麗水は関口隆正『山田長政傳 附牛山復讐録』を一つの典拠に山田長政の伝記を描いたと考えられる。関口隆正『山田長政傳 附牛山復讐録』について、矢野暢は「長政の武勇伝に満ちた生涯の事蹟も、文中に巧妙にちりばめられた江戸時代の書物からの引用のおかげで、あたかも歴史的事実であったかのように信憑性をも」¹⁰つと言われる。『少年読本第七編山田長政』と『山田長政傳 附牛山復讐録』を比較すると、次の通りである。

⁶ 勝尾金弥「本格的シリーズはじまる——博文館「少年読本」」（『伝記児童文学のあゆみ——1891から1945年——』ミネルヴァ書房、1999年11月）

⁷ 鳥越信『はじめて学ぶ日本児童文学史』（ミネルヴァ書房、2001年7月）

⁸ 注6に同じ。

⁹ 注6に同じ。

¹⁰ 「山田長政」神話と虚妄『第十卷 東南アジアと日本』（弘文堂、1991年2月）

仁左衛門は山田長政の通稱なり、駿河國安倍郡藁科村の人、母は寺尾氏といひ、母の父を惣太夫といふ、初め府中（今の静岡）の馬場町に紺屋の山田九平次といふ者あり、年老ひて家を嗣ぐべき子なかりしが、偶々伊勢國山田の御師なる九左衛門友昭といへるもの零落て府中に流寓したりし（『少年読本第七編山田長政』）

長政以二仁左衛門一行。駿河國。安倍郡。藁科郷人。不レ知二何姓一。生母寺尾氏。寺尾氏父為二惣太夫一。近代心説碎玉詒、暹羅王歌並序、山田氏過去帳、駿河志料、駿河府志、初府中馬場街染戸。駿河志、松井筆記、山田事跡、駿河志料、日二山田友山一。以二九平次一行。養二伊勢人友昭一為レ嗣。友昭曰二九左衛門一。」（関口隆正『山田長政傳 附牛山復讐録』草深十丈書屋、1892年4月）

以上のように、双方のテキストは同じ順番で同じことを記述しており、偶然とは言い難いほど一致している。山田長政に関する他の箇所を見ると、書き加えられたものもあるが、内容的には『山田長政傳 附牛山復讐録』に沿って語られる。しかし、『山田長政傳 附牛山復讐録』は長政が毒殺される場面で終わっている。その後のオインの話しや、毒殺された後のストーリーを描くため、麗水は『山田長政事蹟合考』（サトー著、寺崎遜訳、宮内省、1896年5月）を参照したと考えられる。『山田長政事蹟合考』の特徴は、ヴハン、ウヰリエト氏¹¹の暹羅誌や、シャム語の歴史的な資料「フホングサ、ヴハン」からの引用があり、他の資料には見られないシャムの歴史上の人物が登場することにある。麗水は『山田長政事蹟合考』に記された歴史的な事実を自分の長政伝に採用する。例えば、長政伝の中で暹羅新王の名前は言及されてなかったが、『少年読本第七編山田長政』は、『山田長政事蹟合考』により「プラオー、アヂ井トソグラス、ヴォー」と記している。あるいは、『山田長政事蹟合考』に記されたアユタヤ時代のシャムと日本との経済的な関係は、次のようにパラフレーズされる。

使節ハ十月十一日（元和7年：タナポーン注）江戸ニ到着シ神田須田町ノ誓願寺ヲ旅館ト為シタリ其一行ハ總數六七十人トス其中チ使節二人ノ外十八名ハ自國ニ在リテ親シク君主ニ拜謁スルヲ得ルノ地位ニ在ルモノナリ此一行ハ境ノ商人ニシテ數回暹羅へ渡航シタル木屋彌左衛門ナル者ヲ伴ヒ來リ（サトー著、寺崎遜訳『山田長政事蹟合考』宮内省、1896年5月）

元和七年、使者復た來聘し、十月十一日江戸に到着して、神田須田町の誓願寺を旅館とせり、一行都て六十餘人、正使一人副使一人は言ふまでもなく、其の他十八人も

¹¹ ヴハン、ウヰリエト氏（Jeremias Van Vliet）は1633-1642年にシャムに渡航したオランダ人の商人である。シャムに滞在していた間に、彼はシャムのことを記録した。その記録は今までタイの重要な歴史的な資料となっている。

親しく國王に謁見すること得る榮爵盛位を有てる人なりき、泉州境の商人にて度々暹羅に渡航したる伊藤九太夫、木屋彌左衛門使者に伴ひ來たり（『少年読本第七編山田長政』）

以上からも、『少年読本第七編山田長政』の本文が『山田長政事蹟合考』を典拠にしていることは分かるが、『山田長政事蹟合考』の長政に関する書簡も両者の典拠関係を証明している。『少年読本第七編山田長政』の「山田長政ヨリ土井大炊頭へ贈リシ書翰」や「暹羅在留ノ山田長政ヨリ酒井忠世家臣へノ書翰」は、『山田長政事蹟合考』から引用されたと思われる。『山田長政事蹟合考』は、オインの話や、当時のシャムと日本との経済的な関係や、長政に関する書簡の典拠と認められよう。

また、山田長政の物語の導入部で当時の日本人にあまり知られていないシャムについて紹介している。その典拠になっているのが、『暹羅王國』（圖南商會編、經濟雜誌社、1897年9月）である。『暹羅王國』はシャムの歴史資料の「パレゴイ僧正¹²の「暹羅史」とプレバド、ソムデツチ、プラ、プラメンドル、マハ、モンクト王（今王（ラーマ五世：タナポン注）の父）の著書」¹³を参照しているため、信憑性が高いと思われる。例を挙げると、次の通りである。

昔時釋迦如來の在世の頃、サトザナライとシチモンコンといへる二人の婆羅門僧あり、この國北方の山林に世を避け、草を結びて家となし、麋鹿をともとして閑生涯を送り、各々百数十歳の齡に躋りしが、暹羅の人は其の徳風を慕ひて四方より子のごとく集まり來たり、頓て賑はしき七箇の村落を成したり（『少年読本第七編山田長政』）

昔時釋迦如來と同時代に、暹羅の北方の山林に、二人の婆羅門僧の隱遁したる者あり、一人をサトザナライと云ひ、他をシチモンコンと云ふ、共に百五十才の高齡を保ち、曾て世に在りし頃は、其の多くの子孫を集めて、七箇の城壁ある小市街をも作りし（圖南商會編『暹羅王國』經濟雜誌社、1897年9月）

以上から、『少年読本第七編山田長政』は主に三つの種本、『山田長政傳 附牛山復讐録』（1892年）、『山田長政事蹟合考』（1896年）、『暹羅王國』（1897年）を参考にして、執筆されたことが確認できる。関口隆正『山田長政傳 附牛山復讐録』は様々な江戸時代の歴史的な資料を引用し、歴史的な事実が溢れ、信頼できる資料である。『山田長政事蹟合考』は、シャムに滞在していたオランダ人の視点で語られたシャムの歴史資料を引用したため、他の資料にはない明治期のシャムに関する歴史的な事実が述べられている。そして、『暹羅王國』はシャム語で書かれたラーマ四世の著書などを引用している。『少年読本第七編山田長政』は典拠の性格から見るなら、日本の資料、シャムの資料、オランダの資料から構成されて

¹² 本名は Jean-Baptiste Pallegoix で、30 年間以上シャムに滞在していたフランス人の宣教師である。“Description du Royaume Thai ou Siam”（1854 年）というシャムの事情について本などを執筆した。

¹³ 圖南商會編『暹羅王國』（經濟雜誌社、1897 年 9 月）

いる。事実関係において信憑性の高い資料を利用する麗水は、史実的な次元での山田長政の物語や、アユタヤ時代の時代背景を正確に描くことにこだわっていたことが分かる。さらに言えば、『少年読本第七編山田長政』は〈叢書〉として刊行されるため、麗水は数多く刊行された山田長政テキストの中で、内容的に正しいテキストを求めて、完璧な山田長政テキストである『少年読本第七編山田長政』を作成しようとしたのではないかと思われる。こうした内容的に正しい『少年読本第七編山田長政』は歴史上に実在する山田長政神話を強化し、山田長政のように海外で立身出世をするという青年読者の興味を喚起する。その一方で、『少年読本第七編山田長政』は山田長政像の背景にある明治期の道徳教育を青年読者に推進する役割を果たしている。

ところで、麗水は紀行文作家であっても、『少年読本第七編山田長政』を書いた時点ではシャムに行っていなかった。様々な種本を使うもう一つの理由は、作品執筆当時の麗水のシャムに対するイメージが漠然としたものであり、また、一般の人にもあまり知られていないという点にも起因しよう。シャムをより正確に描くためには、多くの文献を参照しながらテキストを書く必要があった。ただし、参照したと思われる文献と本文を詳しく比較すると、麗水が書き加えた箇所もある。例えば、設定描写などである。麗水の想像によって書き加えられた箇所は、どのようにシャムを描写しているのか。これについて、次に検討したい。

『少年読本第七編山田長政』におけるシャム

江戸時代の『暹羅国山田氏興亡記』では、シャムは天竺の中の「大国」で、「繁盛の地」とされている。このようなイメージは明治期まで引き続き描かれる。明治期の教科書や、少年向けの読み物を見ると、「土地豊饒物産甚だ富」¹⁴、「暹羅國王は常に國の開けるを喜び且つまた日本人を取り扱ふに最も親切」¹⁵というシャムの描写が描かれている。また、シャムにいる日本人たちについては「日本人の威勢には日頃恐怖して」、シャム人が「日本人の名を聞けば自ら屏息」¹⁶するというイメージは頻繁に反復されている。国王が日本人に親切であり、何も怖がらず安全に住めるシャムは、日本人にとって理想的な空間として描かれている。『少年読本第七編山田長政』も、他の山田長政伝と同様にシャムの「繁昌」を描いている。

日本人にとっての理想的な土地としてのシャム以外に、様々なかたちで描写されたシャム像についても見ておこう。『少年読本第七編山田長政』で菱田春草が描いた挿絵（図1、図2）を見てみよう。

¹⁴ 『古今名譽実録 第二卷』（春陽堂、1893年9月）

¹⁵ 間宮武『山田長政偉勲録』（間宮武、1892年6月）

¹⁶ 関徳（遂軒）編『日本之光輝』（青木嵩山堂、1895年2月）

図 1



図 2



図 3



図 1 は 13 歳の童王の挿絵で、図 2 は山田長政の挿絵である。双方の挿絵は冠や装飾やコートなどが、アユタヤ時代のシャムの衣装として描かれている。しかし、アユタヤ時代のタイの歴史書でよく使われる「日本人義勇軍図」¹⁷ (図 3) を見ると、衣装は『少年読本第七編山田長政』と同様に冠はあるが、コートのような衣装は見られない。このコートに関しては、明治 26 年の資料、岩本千綱『暹羅国探検実記』¹⁸に記述がある。それによると、当時（ラーマ五世時代）のシャムの衣装について「男子は平常風呂敷の如き布匹を腰部に纏ひ、其肌には肉襦袢を着け、其上に「コート」即ち吾人か着用する所の「モーニング、コート」に稍や類似せるものを被って居るを常とす」と述べられている。ここから見ると、『少年読本第七編山田長政』の挿絵を描いた菱田春草は、ラーマ五世時代のシャムの衣装を取り入れて、挿絵を描いたのではなかろうか。挿絵 (図 1、2) を見ると、山田長政と童王はローブを着ている姿で描かれている。しかし実際には、シャムの衣装にローブはない。

¹⁷ アユタヤのワットヨムの壁に描かれていた「日本人義勇軍図」(出典：ชาตวิทย์ เกษตรศิริ, กาญจนี ละอองศรี บรรณาธิการ. เอกสารสรุป การสัมมนาวิชาการ 120 ปี ความสัมพันธ์การทูตไทย-ญี่ปุ่น: เอเชียตะวันออกเฉียงกับอุษาคเนย์ (2430 - 2550). สมุทรปราการ : มูลนิธิไทยต่างประเทศไทย : มูลนิธิ โครงการตำราสังคมศาสตร์และมนุษยศาสตร์, 2551. (2008 年))

¹⁸ 岩本千綱『暹羅国探検実記』(鹿島長次郎, 1893 年 10 月)

ローブの描写は現実とはまったくかけはなれており、菱田春草は岩本の本などから想像し、描いたのではないか。

山田長政テキストで不可欠な場面は、長政の象による戦いの場面である。昭和時代の長政のテキストを見れば、象に乗り、戦う場面がよく描かれる。実は、象のエピソードは江戸期の『山田仁左衛門渡唐録』から記されている。その場面では象に乗る長政は描写されず、戦略として山田長政が普通の象を日本の白象に偽装し、六昆国の軍使を騙す様子が描かれている。明治初期の資料を見ると、象の場面は言及されていないが、明治25年(1892年)に『山田仁左衛門渡唐録』と同様に象を偽装する場面がある。ただし、偽装された象は、軍使に見せず、戦場に出ると描写されている¹⁹。また明治32年(1899年)の遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』でも、象に乗る長政の描写はないが、一頭の象しか描いていない明治25年(1892年)の諸本に対して、「この戦象數十頭を陣前に驅り進め」て、戦争をすると過剰に描写された。しかし、実際には、当時のシャムにおける象の風景は図3のようなものであったと思われる。

象は、第1章や第2章で述べたように、江戸時代から日本人のエキゾチックで珍しいという南洋のイメージを象徴するものであった。明治に入ると象は南洋の動物として知られていたが、他の南洋の国と比べると、当時の書物や雑誌などには、赤地に白象のシャム国旗の挿絵や、シャムの風景としての〈象〉の写真などが頻りに載せられている。また当時の日本人は、メディアを通じてシャムの象を知っただけではなく、本物のシャムから来た象²⁰を見たのである。好評を得た象によって、シャムの〈象の国〉というイメージは強化され、〈象の国〉という表象が作り上げられたと思われる。また、当時のほかの資料を見れば、シャムは「白象の國」²¹や「象の國」と頻りに形容されている。「シャムのいろいろ(1)象の乞食ほか」(『読売新聞』1902年12月13日、朝刊)では「象は暹羅の名物であることハ事新しく言ふまでも無い、象狩の景況ハ嘗て本紙の日曜附録に載せたことがある、暹羅と象とハ其國旗にも象の姿を現はしてあるが如く甚だ深い中である」と書かれている。明治期に広く流通した〈象の国のシャム〉のイメージを利用し、シャムらしい風景を描くため、象の場面を復活させ、象を描写していると思われる。だが、戦象について具体的に記述した文献が見られない以上、象の戦争の場面は日清戦争後の少年向けのテキストという性格から、派生した可能性もある。

¹⁹ その場面は次のようである。「額に二本の角あり、背上に兩枚の翼を生じ、身体恰かも鐵の如く、其の咆ゆる聲は雷に似て、異様の武具に身を固めし、日本の兵士と覺しき(中略)此の象は、此等邊の國に棲む、普通の物にはあらず、只日本の國のみに、稀に出ると聞えにし、神象と呼ぶ靈獸にて、之れを戰鬪に用ふる時は、克く鼻尖を以て、敵の兵士の閃めかす」(岡村信太郎『山田長政一代記』岡村信太郎、1892年6月)

²⁰ 明治9年(1876年)には、シャム(現在のタイ国)からきた3歳8か月のゾウが浅草奥山の見世物に出ている。明治19年の例のチャリネ大曲馬団にも、ゾウがついてきている。そして、明治21年(1888年)5月23日、シャム(タイ)の皇帝から15歳になるオスとメス二頭のゾウが、我が帝室に贈られてきて、動物園に下げ渡しの形で收容された。そのうちメスは明治26年(1893年)3月5日に死亡したが、オスの方は長く生き、次第に凶暴になり、しばしば飼育係を負傷させるなどの事故をおこし、明治36年(1903年)には、見物にきた水兵にも傷を負わせている。(東京都恩賜上野動物園編『上野動物園百年史』東京都恩賜上野動物園、1982年3月)

²¹ 明治期のシャムに関する資料を調べると、白象のことが頻りに見られる。明治45年(1912年)5月に、山口武がシャムの情報に関する本を発表し、『白象の国』(内山正如、1912年5月)と名付けられた。ここから、当時シャムは「白象の国」として知られたと思われる。

このようにシャム王の衣装や象などの描写は、明治時代のシャムに関する資料から引用された。『少年読本第七編山田長政』で描かれたシャムは、アユタヤ時代のシャムではなく、書き手の空想によるものであっても、シャムをあまり知らない当時の読者に違和感なく受け入れられたと思われる。このことから、『少年読本第七編山田長政』におけるシャムの描写は、「椰樹」や「珍禽」などの南洋的風物が多く描かれ、熱帯の風景²²に映る以外、事実と空想の挟間で作り上げたと思われる。書き手の幻想で書き加えた描写はこれだけに留まらず、山田長政の殿閣の描写も一つの例である。それは次のようである。

唵普羅臨御すと、二賈浦伏して再拝し、僅かに頭を上げて唵普羅を見る、唵普羅、峨冠綾衣し虎皮胡床に據り殿上に座す、金紫燦然して目を射り正視すべからず、其の左右劔戟森然、儀衛甚だ盛なり、二賈惶恐して屏息し、敢て仰ぎ視ず、膝行頓首して恩を謝して退く、麗服したる官人は、更に二人を別館に誘へり、窓には雲紋紗の帳幃を懸け、床には花様氈を市き、中に几卓を安排し、上に百味の盛饌を列ね置けり、夜光の盃、琥珀の皿、器具は皆西洋南蠻の物なり、二人大に驚き、唯だ官人の誘ふまゝに任す、既にして美人數人、躑々として出で來りて酒を行る、其の酒芳烈、鼻より腦に入る、肴は山海の美を盡せり、美味人間のものにあらず、酒半酣なるころほひ、劉亮たる音樂帳外より起る、二人陶然として神悦び、身の化境に遊ぶかと疑ふ、終に酩酊して伏す、美人左右より扶け起して別室に入らしむ（『少年読本第七編山田長政』）

同じエピソードを他のテキストは「夢路に夢を見し心地」²³と表現している。麗水はその「夢」の世界を一層詳細に描いている。「劉亮たる音樂」、「美人數人」、「百味の盛饌」、「酒」の描写は、共通して用いられる享樂的な要素であり、シャムの描写とは言い難く、この描写は想像の世界だと思われる。また、「雲紋紗の帳幃」の「雲」については、『日本の文様天象』²⁴によると、「雲にとどくほど高い棟やのきを意味する場合もあるが、それよりも具体的に雲気を描いて飾った建築と考えた方が当たっている場合が多い。それというのは雲気は総じて天上の神々や仙人たちと深い関係があるからで、いわば吉祥的な意味から装飾に用いられたからである」と指摘される。享樂的な雰囲気、美しい夢見心地の空間の描写から、「雲紋紗の帳幃」は読者に天国を連想させるのではないだろうか。この夢のようなシャムの描写は、「日本に居ては飯が喰へない」明治社会の現実的な空間と対比される。日本人を歓迎し、豊饒であり、日本人の共同体の日本町もあるシャムの空間は、まるでユートピアのようである。しかし「雲紋紗の帳幃」や「虎皮胡床」などは、シャムの風俗とは言いにくい。雲の文様は中国から伝わる文様であり、虎皮も古くから知られた朝鮮の舶来品である。つまりこの場面には、シャムを表すものが一つもなく、その代わりに日本の伝

²² それは「椰樹の葉は晴れたる空に風を扇ぎて、枝に珍禽の好音を弄するあり、池中には於物魚躍りて、白鶴汀に立ち馴れて人に親しめり、四海の木石を集め天下の花弁を簞からしたる苑の眺めも、心に平かならぬことあれば、王は少しも楽しからず」という宮殿の後園の描写がある。

²³ 『古今名譽実録 第二巻』（春陽堂、1893年9月）

²⁴ 吉田光邦他『日本の文様 天象』（光琳社出版、1974年5月）

統の中で定型化されている東洋的な享楽世界を表すものが反映されている。

幻想のシャムと南進論

明治 20 年頃南洋を舞台として、社会改良小説が多く書かれた。これらの小説の特徴は「現実離れした観念小説」²⁵である。その内容は当時の社会や政治などについて不満を抱き、南洋に渡り、ユートピア的な空間で英雄のような活動をするというものである。「いいかえれば、「南洋」に渡って、そこで「王」になる夢が書きこまれた小説」²⁶だといわれる。その点からは、ユートピアとしての南洋空間を象徴するシャムに渡り、シャム王の娘を妻にし、王になる山田長政はそうした南進論的な政治小説の元型を反復していると言える。

しかしながら、一方で当時のシャムに関する記事は、第一章で取上げられた「読売新聞」の記事のように「暹羅全國の形勢は、亡國」²⁷で、「暹羅國王は國債を有するにあらざれども欲する儘に税を課し」²⁸、シャムの女性は「色も黒く唇も厚く」²⁹と野蛮な国としても紹介している。つまり、シャムのユートピア的な享楽空間の記述は、南進政策の主張を分かりやすく民衆に伝えるため、理想的な面だけを強調している。遅塚麗水『少年読本第七編 山田長政』もその中の一つである。しかし、なぜ山田長政テキストにおけるシャムの描写はユートピアのような南洋空間として描写されなければならないのか。

伝説は「空間と時間という二つの契機が、人々の記憶と忘却の多様な出会い方の中で、常に再構築され意味あるかたちを装うとする」³⁰指摘もある。伝説がどのように受容され、語り継がれ、どのように排除されるのかということは、その時代のコンテキストと関わり、時代のコンテキストを離れて語ることはできない。山田長政についての記述の変遷を見ると、明治 20 年代から長政の出生・子ども時代の生活・台湾の記述・恩人との再会の場面など、新たに書き加えられた記述が多いことが分かる。山田長政についての記述の変遷を読むためには、明治時代の社会的コンテキストを重ねて読む必要がある。

明治時代の社会的コンテキストで特に注目しておきたいのは移民に関する言説である。富国強兵の政策を強硬に推し進めた明治政府は、不況の問題³¹に直面していただけではなく、余剰人口の問題も抱えていた。例えば、教科書の中の「日本に居ては飯が喰へない」「一貧乏人の子」という長政の設定は、当時の庶民の状況と重なるような記述だと考えられる。当時、これらの社会問題を解決するため、政府は農村の若者に海外移民を奨励することで、

²⁵ 矢野暢『日本の南洋史観』（中央公論社、1979 年 8 月）

²⁶ 小松和彦「南洋に渡った壮士・森小弁―南洋群島以前の日・マイクロネシア交流史の一断面」（『近代日本の他者象と自画像』柏書房、2001 年 5 月）

²⁷ 中村弥六「暹羅の視察」（『太陽』第 3 巻第 5 号、1879 年 3 月 5 日）

²⁸ 「暹羅」（『太陽』第 1 巻第 10 号、1895 年 10 月 5 日）

²⁹ 松尾茂『馬來半島の猛獣狩』（博文館、1911 年 5 日）

³⁰ 波平恵美子編『伝説が生まれるとき』（福武書店、1991 年 11 月）

³¹ 日清戦争後の日本は、さまざまな社会問題を抱えていた。凶作から貧民の暴動があいつぎ、足尾銅山の鉱毒で、付近の山林と渡良瀬川流域が侵された事件でも、近隣の県議員が立ち上がり、東京で大きなデモが行われた。日清、日露戦争による重税は、国民のほぼ半数を小作農とした、資本主義経済が浸透するにつれて、農村でも現金が必要になり、男女とも肉體労働の出稼ぎに出、やがては都市の工場地帯に労働者となって流れ出てゆく。そのように、つくられたスラム街は社会不安のもとになった。こんな矛盾のただなかに立たされた知的青年たちは、いかに生きるべきか、と悩みはじめる。（鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』平凡社新書、2005 年 12 月）

移民政策³²を推進し、移民の送金による外貨獲得を目指していた。数多くの日本人の移民は、経済的困窮の苦難のために、海外でのよりよい生活を夢見て、故郷を離れることになった。そのような歴史的コンテクストにおいては、長政のテキストは南進論のメッセージを内包する海外への経済進出の物語として読まれることになる。具体的には、当時の読者はどのように経済進出と関連させ読んだのだろうか。これについて、山口県大島郡の移民の実例を参照しよう。

移民の為め其地方に及ぼせる影響中特に著しきは教育の發達なり、郡内小松志保村は凡そ一千戸を有する村落にして、以前は高等小學校に通學する者四五十人に過ぎざりしが、漸く増加して今は百四十人の多きに達す、他村概ね此類なり、蓋し生計上児童を通學せしむる餘裕を生じたと、一は移民が外國に到り深く自ら無教育の不便なると知覺したるとによる。(大河平隆光『日本移民論』文武堂、1905年12月)

明治期の教科書は基本的に政府の意向に従って作られ、読まれた。高等小學校に通学した子どもたちは、山田長政を教科書で読んだ。海外雄飛の山田長政は、政府のひとつのモデルになる。長政は成功した移民の先駆けとして捉えられ、それにより、少年たちに理想的な海外進出のイメージを与える。山田長政テキストは移民を理想化する言説として利用されたのである。

鍋島知事の訓示は二つの部分からなる。一つは訓示の本文である。出稼ぎ人が健康を維持し、秩序に従うという訓戒である。それは六つの条項からなっている。第一条では出稼ぎ人は「大日本帝国の臣下であることを忘れるな。恥ずべき印象を海外に残すな」というものである。他の条項は典型的なもので、労働契約に従って働くこと、道徳的に振る舞うこと、賭け事や飲酒を慎むこと、稼いだお金を慎重に取り扱い、本国に送ることなどである。第三条を除き、「出稼ぎ人は互いを家族だと思い、助け合っていくこと」と述べられている(「一八八五～九四年の移住者への訓示」『ジャパニーズ・ディアスポラ』新泉社、2008年4月)

出稼ぎの条項にある日本を忘れないことや国にお金を送ることは、山田長政テキストの中で描かれていることと重なっている。また、「出稼ぎ人は互いを家族だと思い、助け合っていく」ことも、長政が滝や太田と再会するエピソードを通して描かれ、そこでは日本人同士の助け合いという意味での道徳が印象づけられる。山田長政の物語は明治期の社会的

³² 南方への関心を鼓吹した当時の先覚者はまた、日本人のその他への移住、通商拡大、開発等、全体を通じて経済的進出を強調している。志賀重昂も日本人の海外への雄飛や、商業活動の活発化を主張しているし、田口卯吉が明治23年に発表した「南洋経略論」では、南洋開発や日本人の移住を積極的に唱えている。ただ、そのようにして明治20年代頃から唱えられた「南進論」は、いずれも民間人の主張であり、その内容も通商や移民の促進、あるいはそれを通じての国利増進の主張であり、一般に非政治的性格が著しかった。(大畑篤四郎「南進論の系譜」『第十巻 東南アジアと日本』弘文堂、1991年2月)

現実の件では国家的な要請でもある。海外進出・移民政策のメッセージと呼応するような要素に満ちている。国家の収入を増やすため、海外進出に成功した山田長政のイメージを利用し、読者の少年たちに道徳的、理想的な〈移民〉の概念を内面化させ、海外に〈雄飛〉する欲望をはぐくむ。山田長政テキストの記述の改変は、結果として、このような社会的コンテキストを反映している。

明治27年(1894年)3月(3日、11日～14日)から4月(10日)にかけて、「読売新聞」に掲載されたシャム植民についての記事は移民を奨励しながら、シャムの実情を提供している。その中で山田長政の名前³³も言及されている。

暹羅から歸つた吾々の同胞は非常なる失望の表情をして、アユチャ附近に日本人町の形跡のないことを話す。何故ぼんやりして、爾んな事を云つてゐるのだ？吾々は祖先の事業の跡を残さぬことを歎いてゐる間に、彼等が何故その跡を残さなかつたかを考へて、その原因を芟除することに努力せねばならぬではないか。(西村真次『新国史観努力の跡』富山房、1916年6月)

前述のように、テキストを読む読者は長政の海外雄飛のイメージを抱き、シャムには〈日本町〉がまだ存在していることを信じ、英雄山田長政の足跡を訪ねることを期待した。しかし、現実のシャムに渡ると、その期待はずれ、「日本人町の形跡のないこと」が分かり、「失望」する。その「失望」は、移住先駆者としての山田長政についての認識を揺さぶるだけではなく、長政をアイドルとして扱う移民たちのアイデンティティも脅かされると思われる。ただし、そこに留まるのではなく、「彼等が何故その跡を残さなかつたかを考へて、その原因を芟除することに努力せねばならぬではないか。」と述べ、第2の「日本人町」を作るためには、山田長政が代表する「祖先」の教訓に学び、自らが第2の「山田長政」として「祖先」たちが「日本人町」を維持できなかった「原因を芟除すること」が期待されているのである。このように、明治期の山田長政テキストにおけるシャムは、当時の南進政策に都合のよい側面だけが、理想化され、描かれているのである。

4 角田喜久雄『山田長政』

角田喜久雄『山田長政』における第二次世界大戦前の日本国民の姿

大正期から昭和初期にかけて、山田長政が教科書に登場することはなくなり、山田長政についての文献も少なくなった³⁴。しかし1940年6月13日に「日タイ間の傳統的友好関係を確認しこれを益々強固」³⁵にするため「日タイ友好和親條約」を締結してから、山田長政ブームが再び起こった。土屋了子によれば「昭和16、17年の教科書及び一般書における

³³ 「植民協會の演說會(承前)」(「読売新聞」1894年4月10日、朝刊)

³⁴ 土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」(「アジア太平洋討究」2003年3月)

³⁵ 「日泰和親友好條約、きょう調印“戦争の場合・敵国不援助”」(「朝日新聞」1940年6月13日、夕刊)

長政ブームの先駆けとなったもの³⁶は角田喜久雄『山田長政』（大日本雄辯會講談社、1941年2月）である。角田喜久雄『山田長政』は、1940年7月25日から12月20日まで「読売新聞」夕刊に連載された。新聞は、雑誌や書物よりもはるかに大きな市場を形成しており、新聞小説への関心も高かったので、角田喜久雄『山田長政』も多くの人に読まれ、非常に人気が高く、様々なメディアで繰り返し取り上げられた。

このルタナ姫と長政のロマンスは、当時人口に膾炙したものと思われる。というのも、翌1941年に当時の流行歌手、東海林太郎がテイチクレコードから、角田喜久雄作詞「山田長政の唄」というレコードを出しているが、その中にも山田長政とルタナ姫との恋のエピソードが出てくる。また、同年、田澤丈夫が書いた『白象』という本の中にも「長政とルタナ姫」という項がある。（土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」『アジア太平洋討究』2003年3月）

角田喜久雄『山田長政』は歌化されただけではなく、「日泰親善」「海外発展」³⁷の目的で「東寶」で映画化された。土屋によれば、角田喜久雄『山田長政』の人気の理由は「ルタナ姫と長政のロマンス」の要素である。明治期の『少年読本第七編山田長政』は一方で歴史的正確性にこだわりながら、一方で享樂的世界や戦象による冒険的ムードを演出したが、角田は、後者の戦略すなわち当時の人々の欲望に沿うように、山田長政テキストをメロドラマ化して、シャムの「ルタナ姫と長政のロマンス」の要素を書き加えた。そのため、角田喜久雄『山田長政』は「当時人口に膾炙し」、戦前の他の山田長政テキストにかなり影響を与えた。

探偵小説作家として知られていた角田喜久雄は、戸川貞雄などと1940年7月10日に「文化の為の文化」（國家から遊離した）を排撃し文藝活動によって國防國家に對する新しい理念を鼓吹する³⁸ため、「国防文藝連盟」を結成した。角田喜久雄『山田長政』はルタナ姫と長政の愛をモチーフとする感傷的なメロドラマの要素が含まれても、「国防文藝」としてのイデオロギーも読者に提示している。これについて、『山田長政』が新聞に連載される前、1940年7月19日の「読売新聞」夕刊の一面には連載小説「山田長政」の広告が表示され、その中で角田喜久雄の記述がある。

作者は、偉大なる暹羅人たらんと願つた偉大なる日本人長政の波瀾多い生涯を辿りながら、當時の日本國民の鬱勃なる精神力の盛なる姿を描いてみたいと願つてゐる。
（次に夕刊連載小説「山田長政」『読売新聞』1940年7月9日、夕刊）

角田によれば、連載小説「山田長政」を書く理由は「當時の日本國民の鬱勃なる精神力

³⁶ 土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」（『アジア太平洋討究』2003年3月）

³⁷ 「タイ國で現地ロケ 本紙小説で東寶が國策映画」（『読売新聞』1940年7月27日、朝刊）

³⁸ 「新體制への文化團體（2）国防文藝連盟」（『読売新聞』1940年9月14日、夕刊）

の盛なる姿」を読者に提示するためであるという。『山田長政』を見ると、日本人は「武勇には勝れて」、「しみ入るやうに情の細やかな人達」というイメージを持っている。特に暹羅のソントム王も日本人の「凄まじい勢ひ」について、次のように発言している。

『わしは、不思議でならぬが、日本人といふものは、何故、それ程までに、命を惜しまぬのであらう。日本人にとって、死は恐ろしいのか？』

餘り、くどく願ひ出る久右衛門に、ソントム王はさう云つて質問した。

『いゝえ。陛下。日本人だとて、命は惜しうござります。死ぬことは恐しうござります。しかし、命よりも尚、名が惜しうござります』(『山田長政』³⁹)

以上の引用は、「王城をお騒がせ申した罪に服」するため、日本人頭領久右衛門が腹切った場面である。ソントム王は久右衛門の行為に対して、日本人が「義理といふものに飽くまでこだはつて、その為には平然と命をさへすてる」という「異様な、特異性」を持つと見なしている。久右衛門以外、長政と十左衛門の友情や、長政のソントム王に対する義理などの日本人の美しい武士道精神が繰り返し取り上げられている。

また、テキストの中で日本人の男性の姿だけではなく、日本人女性の「鬱勃なる精神力」は登場人物の「おりん」を通じて提示されている。それは、長政と十左衛門はおりんに「心を惹かれ」たが、「男の友情」のため、長政は「おりん殿を娶ることは出来ぬ」。「お二人様のお美しい御友情」のため、おりんは「この地を旅去つて行く外はござりませぬ」。このように、おりんの行為は「奪ふことでなくて與へる事であり、勝つことでなくて犠牲となること」という「最も大いなる愛」であり、「男の友情にも勝つた女の純情」である。

『それから、おりんも、お陰で元氣にやつて居りますよ』

と、誰にともなく、何氣なくさうつけ足した。

『最近では、まるで男のやうに身なりもかまはず、荒くれ男共にまじつて健氣に働いてゐます。却つてわしなどより、男を使ふ呼吸がうまくなつてな。(中略)』

長政と十左衛門は、顔を見合せて、何か涙ぐましいやうな感慨にうたれてゐた。(『山田長政』)

日本に戻っても、「まるで男のやうに」活動しているおりんの姿も「日本國民の鬱勃なる精神力の盛なる姿」として投影される。小説の連載当時は「労働力不足」のため、1939年に精動委員会が「女性をも勤労働員せよといふ方策」⁴⁰を策定し、「一九四〇年代は、『女子勤労働員』として何十万人もの若い女性が軍需工場におくりこまれた」⁴¹のである。「身なりもかまはず荒くれ男共にまじつて健氣に働いてゐるおりんの姿は国が望む日本人女性

³⁹ 本文引用は全て角田喜久雄『山田長政』(大日本雄弁会講談社、1941年2月)に拠る。

⁴⁰ 「嫁入り前の娘さんも勤労に参加せよ 精動総会で意見続出」(「朝日新聞」1939年7月12日、朝刊)

⁴¹ 斉藤美奈子「ああ、すばらしき軍国婦人」(『モダンガール論』文春文庫、2007年2月)

の姿であると考えられる。このように、1939 年から政府が戦争への努力を支持するように「精神的動員」のキャンペーン⁴²を背景に全体の利益を私的な利益よりも優先させるという日本人の登場人物の道徳を描いた『山田長政』は、読者に受容されやすいメロドラマという形式の中で「精神的動員と国民協力」のメッセージを提供していると考えられる。

美化される日本の侵略

長政とルタナ姫のロマンスの要素以外にも、角田喜久雄『山田長政』には、他の山田長政テキストの異なる特徴がある。それは「タイをめぐってヨーロッパ諸国と日本とが対立するという構図をとっている」⁴³ことである。明治時代から大正時代にかけての山田長政テキストの中では、ヨーロッパの勢力については全く言及されていない。しかし、角田の『山田長政』では、シャムの隣国の敵、例えば、「ルアンプラバン」などの国名を取り上げて、「佛領印度支那の北部高原地帯にある」という戦前の出来事の記述などが付け加えられている。そのため、『山田長政』においては長政が活躍した過去の時代の出来事が、それ以降の近代的事象（ヨーロッパの勢力など）と混在するような書き方になっている。なぜ角田は意図的にヨーロッパの勢力などをテキストで書き加えたのだろうか。

日頃、長政が痛切に感じてゐる事が一つあつた。

それは、日本人より、遥におそく東洋の海に姿を現はした欧羅巴人が、長政の眼前に於て、何時の間にか着々と侵略の地歩を擴げ、日本人活動の舞臺をせばめて行くことである。（中略）

資本を持ち、武勇を持ち、誠實を持ち、早くからこの地方に往来してゐる日本人にとって、不拔の勢力を植ゑつけた土地が、果して何處にどれだけあるだろうか。（その原因は、一つには、日本人の愛郷心が餘りにも強く、その土地への執着は無さすぎる事にあるが、もう一つには、日本人に、國家としての目的と團結がないからだ）（中略）

和蘭人は和蘭人として、英吉利人は英吉利人として、國家の背景を持ち、他國に一歩も譲らぬ團結力と、一貫した目的があるのに、日本人は、往々にして同胞相討つの悲劇をくりかへしてゐるのである。（『山田長政』）

ヨーロッパの諸国と比べると、日本は「國家としての目的と團結がない」ため、他の「地歩を擴げ」ず、「同胞相討つの悲劇をくりかへしてゐる」。そこで、「資本を持ち、武勇を持ち、誠實を持ち、早くからこの地方に往来してゐる日本人」はヨーロッパと対抗するため、團結する必要がある。このような、国民の「團結」の観念は、小説発表当時の時代性を考えるなら、ナチス・ドイツ的な「民族全体主義」の影響を受けた「日本的全体主義」である。「日本的全体主義」は「基本的には西洋文明の利己主義・個人主義の終わるところに出

⁴² リチャード・H. ミッチェル「国民総動員体制」（『戦前日本の思想統制』奥平康弘、江橋崇訳、日本評論社、1980年8月）

⁴³ 土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」（『アジア太平洋討究』2003年3月）

発する、個人主義を止揚するものとして登場してきたが、しかし全体主義といっても、独伊と比較して、日本の場合は特殊が多く、「大和族（日本族）は、皇室を中心とせる族であって、一大血族関係によって成立する、いはば本家（皇室）と分家（臣民）との関係」という「日本的な天皇中心の『家族的全体主義』⁴⁴と結びつく。しかし、『山田長政』における「團結」の観念は、国内にいる日本国民だけではない。「南洋諸國」の「各地に散在する日本人達」も團結しなければならないと述べる。欧米植民地体制を打破して東南アジアを守るために團結を促す言葉は、しかし実際には日本の東南アジアへの侵略を正当化するためのタテマエに過ぎなかったのである。

（（前略）徳川家こそ、我々に何の援助を下されなかつたが、我々には結局、祖國日本といふ、絶大な後盾があつたのだ。日本といふ祖國がなくして、何で、我々にこれだけの仕事を貫徹させる強い團結力と勇氣が生れるだらうか）（中略）

『祖國のありがたさを思ふにつけ、わしは、この國（シャム：タナポーン注）の土となるこそ、祖國に報いるの道だと考へてゐる。総てはこれからだ。わしの仕事はこれからなのだ』（『山田長政』）

『山田長政』は「團結」や「祖國」という日本の「家族的全体主義」のイデオロギーを取り上げながら、徳川家の鎖国政策を批判している。当時、政治評論家の馬場恒吾など⁴⁵も「この時代（徳川幕府の時代：タナポーン注）に日本も亦、世界に横行濶歩してゐたならば、今の東洋、南洋は勿論、アメリカ西岸ぐらゐは日本の領土になつてゐたかもしれない」と、徳川幕府の政策を批判しながら、アジア侵略行為を奨励している。また、日本によるシャムなどのアジアへの侵略は、「莫大中間利潤」を得る「英吉利と和蘭の商館」と異なり、シャム「の土とな」り、「ソントム王に對する義理を貫かんとする一徹の心以外に、領土も富も名誉さへもなかつた」。こうして、西洋の侵略は悪の行為とされる一方、日本の侵略は有徳者の行為として読者に提示されている。角田の『山田長政』がそれ以前になかつたヨーロッパへの言及を含むのは、戦時下において、国家連合を体現したテキストとして山田長政を歴史の彼方から召喚しているためである。

日本に従順なシャム

角田喜久雄『山田長政』は当時の様々なイデオロギーに縛られている。これらのイデオロギーは、「日本」自体を美德化し、東南アジアへの侵略を正当化するものとして機能した。その正当性は、読者に日本国民としての自信を与え、戦争への努力を一層払うように促した。こうした政治的な目的のため、山田長政テキストは日本の都合がいいように加工されて、特に 1940 年から 1943 年にかけて多く出版された。客観的に見れば長政像を歪曲して

⁴⁴ 河原宏 他「全体主義——日本ファシズムのイデオロギー——」（『日本のファシズム』有斐閣選書、1979年7月）

⁴⁵ 「正しき自己認識」（『読売新聞』1940年8月4日、朝刊）

いる『山田長政』は、どのようにシャムのイメージを描いているのか、次に見てみよう。

「鬱勃なる精神力」を持つ日本人のイメージに反して、シャム人は「残忍な緬甸軍に對する恐怖と憎悪は」「殆ど本能的なものであり、臆病な性質だと描写されている。また、軍事力だけではなく、シャムは「英吉利と和蘭の商館」に「巧妙な商業政策」で「莫大中間利潤」を奪われ、経済的に搾取される。このように、シャムは軍事的な面も経済的な面も日本の従属的な位置に置かれる。このような日本とシャムの関係の描写は長政と「日本鼻眞である」ルタナ姫の關係を通して反復されている。

ルタナ姫はソントム王の妹で、「日本人に御好意」を持ち、「お美しい、おやさしく完璧なシャム人女性である。日本人は「柬埔寨人と結託して、暹羅を攻め滅さうと」いう噂でソントム王に誤解されて、「ペプリーの方角へ逃走」したときに、「ルタナ姫の懸命のお執りなしで」ソントム王は「余程、おゆるぎになりました」。テキストの中でルタナ姫は長政を先に好きになり、ソントム王は後に敵を撃破した「賞賜としてルタナ姫を」長政に与える。

『わしは、暹羅人になり切り、暹羅の土になる決意である。そなたは、日本人の魂を理解し、日本人の精神に生き抜いて貰ひたいと思ふ。二人の結びつきが、唯二人だけのものであつては何にもならぬ。そなたとわしの、心の結びつきがこの地へ根をおろして、やがて見事な花の開くことを望みたい』

『はい……お言葉よく分りました。私は、日本が好きでございます。心から好きでございます。それ故、お側へ……参りたいと望んで居りました』(『山田長政』)

以上の引用は披露宴の場面の長政とルタナ姫の台詞である。長政の「暹羅人になり切り、暹羅の土になる」という発言は日本の侵略を美化するものに他ならない。特に、「日本が好きでございます。心から好きでございます。それ故、お側へ……参りたいと望んで居りました」とシャム人のルタナ姫の口を借りて発言させることは、シャムなどの東南アジア諸国の日本に従順で服従的な姿という日本側の願望を反映している。また、長政とルタナ姫の結婚は、「将来、暹羅の柱石となつて貰はうとの意味」がある。それは非常に親日的なシャムのイメージを描写しているだけではなく、日本の侵略を勧んで受け入れるという意味もある。特に、「日本の方々が、大きな手柄を立てゝ下さつたことを」「アユチャの人達が、どれほど安堵し喜ぶ」という日本人の侵略に対する感謝の言葉などは、日本に支配されることを望むという幻想がはっきりと見られる。また、このロマンスが提示する、侵略する日本が男性（山田長政）で、侵略されるシャムは女性（ルタナ姫）であるという図式は第1部でも指摘したように日本と東南アジアの諸国を兄弟の比喩で語るステレオタイプ化された言説の新しいヴァージョンであり、後のテキストで繰り返し反復されることになる。

明治期の『少年読本第七編山田長政』と比べると、『山田長政』は内容的に長いが、シャムについての描写は少ない。テキストにおけるシャムの描写は「五つの高塔をもつた壮麗な王宮と城壁の内外に四百を數へたといふ大寺院の金色に輝く尖塔」などの明治期のテク

ストと同様にエキゾチックで、珍しいというイメージで描かれている。一方、明治期のテクストにない「佛でなければ猛獣のみ棲む、別天地の如く」、「岸邊を蔽つて生茂つてゐる椰子やマングローブの森」という原始的なイメージも見られる。このように、経済的困難がある日本人にとっての理想的な移民先、すなわちユートピア的な南洋空間としての第一次世界大戦前のシャムのイメージは、第二次世界大戦期になると、西洋諸国の脅威から、日本に助力を求める弱者としてのシャムというイメージになったのである。このようなイメージは戦時中の山田長政の文献の中で繰り返し描かれ、日本の東南アジアへの侵略についての言説を正当化するものとして機能したのである。

5 遠藤周作『王国への道 山田長政』

「メナム河の日本人」から『王国への道 山田長政』へ

第二次世界大戦後、連合国諸国と日本との間で講和条約が調印されてから、1952年にタイは日・タイ友好通商航海条約を復活し、日本との外交関係を再開することになった。1950年代後半から日本とタイの貿易は急速に拡大し、日タイ間に経済的な深いつながりができた。これにより、戦争の終結とともに消えた山田長政の神話は、日タイの友好関係としての象徴を再び利用され、「日タイ親善合作映画と銘うった大映作品「山田長政・王者の剣」⁴⁶として登場する。

「映画の全場面はタイが舞台。このため衣装、大小道具、セット・デザインなど、タイの人たちがみてもおかしくないようにと日本側もタイ側も気をくばり、さきごろセット撮影の行われる京都撮影所にアスピン・フィルムの衣装デザイナー、美術監督らやってきて手はずをととのえた。かつてユル・ブリナーの「王様と私」がタイで市民のデモにあい上映中止になった例もあるので、かなり神経質になっているようだ。」
（「ロケ隊、タイへ「山田長政・王者の剣」」「朝日新聞」1959年3月6日、夕刊）

初の日・タイ合作映画となった「山田長政・王者の剣」は日本とタイの両国で上映するため、日本人にもタイ人にも受け入れられるように、山田長政がタイ人に毒殺されるシーンが書き換えられ、長政は毒と承知しながら、長政暗殺の命令を受けたカムヘーンの酒杯を飲むという結末になっている。「山田長政・王者の剣」における山田長政の姿は、タイの経済を発展させるため、タイへ進出する日本企業⁴⁷のイメージを美化することに他ならない。しかし、この映画は「タイ国へロケ隊が行き、象などを使って話題をよんだ。しかし、象

⁴⁶ 「ロケ隊、タイへ「山田長政・王者の剣」」（「朝日新聞」1959年3月6日、夕刊）

⁴⁷ 外資進出の受け皿のため、1959年にタイ政府は投資奨励委員会などを設置し、外資に魅力的な環境を作り出した。この結果、タイに進出する外国企業は増加した。1960年代だけで日系企業を中心に8社がタイに進出した。（柿崎一郎『物語 タイの歴史 微笑みの国の真実』中公新書、2007年9月）

の群もタイ国人も出陣の場面にぞろぞろと歩くだけで、“合作”の内容はおそまつだ⁴⁸と評価され、「日本でもタイでもヒットしなかった」⁴⁹。

1960年代の日本の経済進出に伴い、1970年代には東南アジア各国で大規模な反日運動が行われた。例えば、当時タイでは反日感情が高まり（「克服なるか反日感情」朝日新聞 1970年3月3日、朝刊）、日本製品の不買運動（「日本品をボイコット 経済進出に反発」朝日新聞 1972年11月7日、朝刊）や、当時の田中角栄首相タイ訪問に対する反日デモなどが発生した。このような日本とタイの関係によって、戦後の山田長政テキストは新たに解釈されることになった。遠藤周作『王国への道 山田長政』⁵⁰（平凡社、1981年4月）（以下、『王国への道』と表記）もその中の一つである。

『銃と十字架』（中央公論社、1979年4月）を執筆するため、遠藤周作はキリシタン関係の文献から、ローマから日本に帰る日本人神父ペトロ岐部が山田長政に会った⁵¹という資料を発見した。「山田長政を劇曲にしたい気持ちがあったので」⁵²、遠藤は1971年に「小説“死海のほとり”取材の帰りに、アユタヤの元日本町を訪ねてみた」⁵³。初めてのアユタヤ訪問について、遠藤は次のように述べている。

その時、ふと、芝居が終わった劇場の舞台と客席を思い出したのは何故だろう。ひとつの劇が終り、登場人物たちの運命と情熱が燃えつくし、幕がおり、そして客たちがすべて引きあげていったあとの空ろなホール——それはなんとアユタヤ王宮の廃墟に似ていることだろう。この廃墟の静かさは、幕がおり、人人が姿を消した劇場内部の静寂を私に思いおこさせた。（「廃墟と芝居」『波』1973年11月）

「アユタヤ王宮の廃墟」の「静寂」や、「当時の日本と現代の日本とはあまりにも類似しすぎている」⁵⁴という点に興味を持ち、遠藤はアユタヤや山田長政について調べ、劇曲「メナム河の日本人」（新潮社、1973年9月）を執筆した。劇曲「メナム河の日本人」は劇団雲によって1973年10月「十二日から二十七日まで東京・新橋のヤクルトホール、二十九、三十日が大阪・毎日ホール」⁵⁵で上演されている。遠藤のインタビューによると、劇曲「メナム河の日本人」は「見せ場たっぷり」と自信作であったことが分かる。

「最近新劇は、見ていてもおもしろくないだろう。高い料金取って見せるくせに、舞台に出ている連中だけ楽しみやがって……。まったく演劇の衰弱を感じるねえ。こ

⁴⁸ 「内容お粗末な日タイ“合作”」（朝日新聞 1959年5月7日、夕刊）

⁴⁹ 土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」（『アジア太平洋研究』2003年3月）

⁵⁰ 2006年、プッサパー・バンチョンマニーによってタイ語訳された。（บุษบา บรรจงมณี. สู่แดนสยาม ยามาคะ นางามาสะ. กรุงเทพฯ: เนชั่นบุ๊คส์ อินเตอร์เนชั่นแนล, 2549.）

⁵¹ 「雲・新体制第一弾は遠藤作品——復帰した芥川比呂志演出で上演——」（『読売新聞』（1973年10月5日、夕刊）

⁵² 遠藤周作「アユタヤの日本人町を訪れて」（『読売新聞』1971年12月4日、朝刊）

⁵³ 注51に同じ。

⁵⁴ 遠藤周作「傭兵日本人」（『読売新聞』1972年6月15日、夕刊）

⁵⁵ 注51に同じ。

れは、料金を払った分だけは楽しんでもらおうと、わざと波乱万丈の物語にしてある。それぞれの役者に見せ場も設定してやった」と遠藤氏のハナ息は荒い。「雲・新体制第一弾は遠藤作品 復帰した芥川比呂志演出で上演」「読売新聞」1973年10月5日、夕刊)

しかし、「“芥川周作”の作品」⁵⁶である「メナム河の日本人」は「演出の苦心にもかかわらず舞台が案外盛り上がらないのは、結局、遠藤台本の表現が弱いからだ。ことに日本人論と並んでこのドラマを支える作者の信仰観が、最後まで神をしりぞける長政と殉教するペトロ岐部（橋爪功）との関係で明確に形象化されたとはいいいがたい」⁵⁷という厳しい評価を受けた。また、尾崎宏次⁵⁸は山田長政とペトロ岐部との対話の場面に対して「意外にしり切れとんぼになり、「全体をこれほど物語性に依存してまとめるには及ば」ず、「長政像のなかの英雄ぶりがこっけいなだけに惜しい」としている。このように、劇曲「メナム河の日本人」は評価が低いその理由は、台本の問題であり、かつ遠藤が提示した新たな山田長政像が当時の日本人には受け入れ難いものであったためだと考えられる。

1978年12月1日に山田長政を描く夜9時5分からの2時間半スペシャルドラマ「南十字星 コルネリアお雪異聞 わたしの山田長政」(早坂暁脚本、朝日テレビ製作)が放送された。1978年11月8日「読売新聞」によれば、タイでロケを行ったこのドラマの見どころは「地響き立てて走るゾウの軍団による戦闘シーン」⁵⁹である。このドラマでは遠藤の「メナム河の日本人」のように長政とキリストとの関りについて言及しているが、長政の終焉について新解釈を加え書き直している。具体的には「メナム河の日本人」では他の山田長政テキストと同様に長政はタイ人に毒殺されるが、「南十字星」では長政が「 шам で力と人気を得て、キリシタンを保護する」ため、「幕府の政策と対立する大物になりすぎて」⁶⁰、幕府の密偵に殺される。

翌年、1979年に遠藤は「メナム河の日本人」を基にする『王国への道』を執筆するために、再びタイを訪れた。そして『王国への道』は雑誌「太陽」(1979年7月～1981年2月)に連載され、1981年4月に平凡社より単行本化されている。1981年5月4日「朝日新聞」の書評では「今回は内容的にもはるかに充実している。それは王宮内の陰謀の場面設定とか長政の死に至る過程などが綿密であるというだけではない。主題がはっきり設定されている」⁶¹と高く評価されている。

アユタヤの暑さ

『王国への道』が「主題がはっきり設定されている」と評価された理由は、遠藤が「あ

⁵⁶ 「メナム河の日本人」を書き下ろすまで、遠藤は芥川比呂志に「三回も書き直しさせられてね。つまらん劇曲をいい舞台にするのが演出家だな。この舞台は“芥川周作”の作品だ」と述べた。「雲・新体制第一弾は遠藤作品——復帰した芥川比呂志演出で上演——」「読売新聞」1973年10月5日、夕刊)

⁵⁷ 「俳優座「マリアの首」、雲「メナム河の日本人」 演劇評」(「朝日新聞」1973年10月20日、夕刊)

⁵⁸ 尾崎宏次「句読点のはっきりした舞台 劇団雲「メナム河の日本人」」(「読売新聞」1973年10月19日、夕刊)

⁵⁹ 「長政を描く「南十字星」 タイでロケ」(「読売新聞」1978年11月8日、夕刊)

⁶⁰ 土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」(「アジア太平洋討究」2003年3月)

⁶¹ 「海外雄飛を今に映して 遠藤周作著 王国への道 山田長政」(「朝日新聞」1981年5月4日、朝刊)

とがき」で述べた (1) 東南アジア人の日本人観、(2) 日本人と東南アジア人の性格対比、(3) 長政とペドロ岐部の対比⁶²、という山田長政に「興味をひいた」3点の理由であると考えられる。特に東南アジア人の日本人観について、遠藤は日本史学者の岩生成一との対談では次のような意見を述べている。

遠藤 (前略) 東南アジアの人たちが今の日本を経済大国として敵視するし、軍事的なことに結びつけて脅えていますね。あれは日本人のなかに、そのころの傭兵のイメージが残っているためではないでしょうか。(中略)

岩生 そうですね。それから、日本人は土着民と違って信義を重んずるというふうに褒めていますし、(中略) けれども、恐がられているのは東南アジアどこでもですね。非常に勇敢だということです。(「鎖国時代の日本人」——岩生成一 遠藤周作『日本人を語る——遠藤周作対話集——』小学館、1974年12月)

日本が「経済大国として敵視」され、そのため日本・日本人・日本製品などが排斥される。アユタヤ人に毒殺された山田長政も1970年代の東南アジア人の反日運動のように、強い日本人と見なされたため、排除されたと考えられる。このように、『王国への道』で遠藤は他の山田長政テキストと同様に典型的な山田長政、あるいは日本人の強いイメージを取り上げる一方、その強さの中で日本人の弱さも主張している。例えば、「金色に光った寺院」や「日本でもマカオでも目にしたことのないほど異国的な、しかし豪華で華麗な光景」があるアユタヤの中で生活している強い日本人たちは、タイの「とても口に合わぬ」食べものや、また、「湿気多く」、「気が狂いそうなほど暑」く、「熱病にかかると治りにくい」アユタヤの天気に対する不満を述べる。

「(前略) アユタヤは怖ろしいぞ。お前にはまだアユタヤの怖ろしきはわかるまい」
老人は吐息とも溜息ともつかぬものを洩らした。

「わかりませぬ」

「まずこの国の暑さよ。お前たち日本人には馴れぬこの暑さは年と共に人間の体だけではなく、頭と心とを鈍らせる。アユタヤの者はこの暑さの怖ろしさを知っている(中略) アユタヤの者と争う時には、それより前にこの暑さとも闘わねばならぬ。それを憶えておくがよい。(後略)」(『王国への道 山田長政』⁶³)

「暑さの怖ろしさ」を持つアユタヤは暑い気候に根ざした独特の文化を持つため、気候風土と全く異なるところから来た日本人にとって苛酷な土地である。この点については、岩生成一は『南洋日本町の研究』(岩波書店、1966年5月)で指摘しており、遠藤はそれを

⁶² 遠藤周作「あとがき」(『王国への道 山田長政』平凡社、1981年4月)

⁶³ 本文引用は全て遠藤周作『王国への道 山田長政』(平凡社、1981年4月)に拠る。

基にしてテキストで以下のように描写した⁶⁴。

「(前略) あのジャンクに日本人の欲しがるものがたくさん積んである」

「日本人の欲しがるもの？」

「そう、米。醤油。味噌」

老人は皮肉に頬をゆがめて笑った。

「日本の刀もある。鉄砲もある。そして……^{ひな}雛人形」

「雛人形までも……」(中略)

「日本人はおかしい。どんな土地に行ってもその土地の食べもの、気風に馴れないな。日本にいた時と同じ食べものをほしがり、日本にいた時と同じに暮そうとする。だから、この品物を悦んで買ってくれる。それが……日本人の弱いところ」(『王国への道 山田長政』)

以上のように、日本人はアユタヤに暮らしても、アユタヤ人のような暮らし／生活をせず、日本の食べ物を欲しがり、日本式の生活を求める。また、アユタヤの風土に慣れない日本人はアユタヤに移り住んでも定住せず、「いつか日本に帰国することばかり考えている」のである。このように、異国空間としてのアユタヤの暑さと調和できない日本人の描写から〈弱い日本人〉のイメージが生成されるのである。

『王国への道』における日本人の弱さについて、井上絵里は遠藤の「主観的日本人論」(「朝日新聞」1972年8月21日、朝刊)を取り上げて、この日本人の弱さは「日本町に生きる過去の日本人」と「海外に住む現在の日本人」に共通し、「日本人特有の弱点がその日本町を退廃の一途を辿らせており、それは世界史の中の弱者として抽出できる」⁶⁵と論じている。しかし、テキストの中で、他の日本人傭兵と異なり、「狭くらしい日本などに帰る気持ちなど毛頭ない」「アユタヤで自分の人生を賭けてみる」と思う山田長政の描写は、遠藤の「日本人の弱さ」という主題をどのように反映しているのか。

「恐ろしい」アユタヤ

一般の山田長政テキストを見ると、長政のイメージは外国で成功する、強い日本人のイメージを持っているが、『王国への道』の山田長政は歴史人物としての理想的なイメージだけではなく、人間的な感情の面も描かれている。例えば「王宮に足を踏み入れる男になりたい」、「日本人だけのゆたかな国を作ろう」、「この国の王女を妻とするぐらい出世したい」などの様々な情熱を追及している。このような日本人のイメージについて、遠藤はウィリアム・ジョンストンとの対談で次のように述べている。

⁶⁴ 岩生成一との対談で、遠藤は「(前略) 私があの先生の御本でいちばん面白かったのは、日本人町に住みついていた日本人が日本と同じような生活をやっていたということです。つまり、味噌、醤油からお雛さままで取り寄せていた」と述べた。(『鎖国時代の日本人』『日本人を語る=対談集=』小学館、1974年12月)

⁶⁵ 井上絵里「遠藤周作における歴史小説創作の意味：『王国への道 山田長政』から」(『九大日文』10号、2007年10月)

話がそれましたけれども、確かに日本人は自信を持ったのでしょうか、同時に二つの弱みがある。生活の繁栄はあるけれども、生活の底力をまだ持ってないということが一つ。二番目に、日本人は戦後、とにかく、建て直すために必死だったわけですから、物質的なことでずっと追求してきましたけれども、このごろになって初めて非常な空虚感が全部を襲っていますよ。(中略) その空虚感を何かで埋めなければいけないということが、やっとわかってきたんです。つまり、幸福というものが、電気洗濯機や自動車を買ったりすることではないということに少しずつ気がついてきたわけですよ。(「日本人を考える——ウィリアム・ジョンストン 遠藤周作」『日本人を語る——遠藤周作対話集——』小学館、1974年12月)

遠藤によれば、戦後の日本人の「二つの弱み」は(1)生活の底力をまだ持っていないことと、(2)物質的なことを追求することである。戦後の日本人は、物質的には生活が豊かになっても、それが幸せをもたらすことはないという「空虚感」を感じることになる。これを長政の話と対比するなら、新しい自動車や新しいテレビなどを買い込み、自分たちの生活を向上させようとする戦後の日本人の行為や姿は、最後まで富や力を追求する長政の行為や姿と重なってくる。このように、山田長政の描写は戦後の日本人の弱さを反映していると考えられる。富と力を獲得するために、長政はアユタヤの王宮に入ることを目指した。しかし『王国への道』のアユタヤの王宮にはそれまでにないイメージがある。それは次のようである。

「だが、この王宮こそ怖ろしいところだ」

「怖ろしい……ございますか」

「怖ろしいとも。王宮には至るところに罠がある。笑っている者に毒がある。近よってくる者は刃をかくしている。温和しい者は術策を考えている。お前たち日本人はそうした王宮の者から見れば、まるで子供だ、とても太打ちはできぬ」(『王国への道 山田長政』)

アユタヤの王宮には「急病にかかった」ソングタム王、「幼い」チェータ王、「僧となり身をかかしていた」シーシン親王、「弱々しい」ヨターティブ王女などの上流階級のアユタヤ人が住んでいる。ここから、アユタヤの王宮は支配者が住む空間であっても、それらの支配者たちは病者や女性や子どもなどの弱者なのである。そのため、日本人傭兵は王宮を守り、アユタヤで活躍する。

弱者としてのアユタヤのイメージを一層主張するため、遠藤はアユタヤ人の登場人物、オークヤ・カラホームに「女性のように柔らか」く、「女性的な顔」を持ち、「男の臭いの全くしない」という女性的なイメージを押し付ける。また「女性のように」なオークヤ・カ

ラホームは「皮肉のこもった微笑なのか、好意の微笑なのかかわからぬ」「謎のような微笑」をし、「何か不気味なものをその底にひめている人物」である。このようなオークヤ・カラホームのイメージは上の引用の「笑っている者に毒がある」という箇所と同様に描写されている。このように、『王国への道』のアユタヤは、第二次世界大戦中の山田長政テキストの中で創造された親日的なアユタヤのイメージと全く異なる。なぜ遠藤はアユタヤ人をこのようなイメージで描かなければならないのか。

岩生 シyamと日本との国交の場合、シyamの政府は長政の力を借りていろいろやっていますし、そのほか長政の前任者の場合にも、その人の助けでいろいろなことをやっています。長政のような地位を利用することは、シyamにとって非常に有利と思われましたから、長政を利用して日本との国交を親しくしようということをやっています。（「鎖国時代の日本人」『日本人を語る＝対談集＝』小学館、1974年12月）

岩生成一によれば、アユタヤ人が山田長政のような日本人に位を与えるのは日本人を利用するためである。こうしたタイ人の態度について、戦後の日本とタイなどの東南アジア諸国との関係を見れば、多少重なっていると考えられる。第二次世界大戦時にタイは独立を保つため日本と日泰攻守同盟条約を結んで、日本に協力的な姿勢を取った。一方、連合国側との関係も保ち続けた二重外交により、タイは戦後の敗戦国処理を免れた。また、『王国への道』と同時代に発表されたタイを舞台としたミステリー小説におけるタイ人女性の描写を見れば、タイ人女性は優しいイメージが反映されている一方で、タイ人女性による詐欺行為も描かれている。⁶⁶ただ、ミステリー小説のタイ人女性はマイナスイメージとは見なされず、またテキストには、タイ人女性への同情を表した記述が見られる。しかし、遠藤はミステリー小説と同じようなタイ人への同情を描写することはなく、岩生に同意しながら、「胸中を往来しているものは長政にも推測できない」オークヤ・カラホームを通して「二重人格」のタイ人のイメージを生成した。これについては『王国への道』の「あとがき」で遠藤は次のように述べている。

日本人はアジアの他の民族にくらべるとそれほど二重人格で生きてこなかった。大陸的な陰湿な陰謀や偽善や面従腹背を本能的に嫌悪する傾向があるから、アユタヤ宮廷のオークヤ・カラホームのような人間の前ではさすがの長政も太刀うちできなかったのは無理もなかったと思われる。（「あとがき」『王国への道 山田長政』）

「怖ろしい」アユタヤは「神の王国」の「ペドロ岐部の世界」に反して、「世俗と人間の野望が渦まく世界」である「長政の世界」として描写されている。つまり、テキストにおけるアユタヤは人事の面では「人間の醜悪な欲望」の空間が描き込まれ、自然の面では「現

⁶⁶ 1970-1980年代のミステリー小説におけるタイについては第2部第5章を参照。

世の地獄」のように「おそろし」く、「気が狂いそうなほど暑い」というイメージが強調されている。

このように、遠藤周作『王国への道』は明治期と戦時期の山田長政テキストと比べると、様々な面で異なっている。まずは、『王国への道』における山田長政像は新たに解釈しなおされたものである。遠藤が描いた山田長政は日本人の英雄であり、理想的な山田長政ではなく、日本人の弱さを持つ山田長政である。また、『王国への道』におけるアユタヤも以前のテキストのような享樂的な空間や、山田長政と王女のロマンス的空間ではなく、暑くて恐ろしいアユタヤである。さらに、『王国への道』は日本＝男性／アユタヤ＝女性というパターンは共通していても、女性として描かれたアユタヤは、従順で親日のアユタヤではなく、二面性を持ち、日本人を利用しているように描写されている。これらの要素によって、遠藤周作『王国への道』における日本とタイのイメージはこれまでの山田長政の神話を脱神話化したように見えるが、テキストに投影された〈弱い日本人〉のイメージは〈強いアユタヤ〉のイメージと対立されていない。しかし、〈恐ろしいアユタヤ〉は「二重人格」(悪)という否定的な価値が決められている一方、〈弱い日本人〉は「二重人格で生きてこなかった」(善)という肯定的な価値が維持されている。よって遠藤の『王国への道』は、角田の『山田長政』などの戦前の山田長政テキストと同様にオリエンタリズムの言説が内包されていると考えられる。

6 まとめ

山田長政の物語の中で、シャムの描写は江戸時代から加工されたり複製されたりしている。明治初期に歴史教科書の中に山田長政が登場し、そして明治25年の山田長政ブームの際には、山田長政についての書籍が多く刊行され、長政は全国的に知られるようになる。しかしながら、そのような出版物が多く刊行されればされるほど、山田長政伝説の内容は少しずつ変化していく。その理由の一つとしては、明治期の南進論の影響が考えられる。遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』も明治期の南進論における経済的な海外進出政策を奨励するため、山田長政は海外雄飛として捉えたテキストの一つである。

遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』は明治32年に刊行され、多くの読者を獲得した。山田長政を知っていても、シャムを訪れたことがない麗水は『少年読本第七編山田長政』を執筆するために、史実や実情を反映した様々な歴史的資料を典拠として用いた。その一方、理想的な空間としてのシャムの描写や象の国の描写など、江戸時代のテキストから引き継がれたものも利用している。明治期の山田長政テキストを通して紹介されたシャムのイメージは、好意的に描写されたが、漠然としたものだと思われる。しかし、シャムのイメージ自体はまだ漠然としても、山田長政テキストに反映されている南進論の言説は当時の人々に認識された。また他の明治期の資料でシャムについて言及される場合、例えば、

第二章のシャムに関する旅行記⁶⁷を見てみると、山田長政の旧跡に日本人がよく訪問していたことが分かる。山田長政の旧跡まで訪れるのは、山田長政の存在を確認することができるだけでなく、当時の人々の山田長政に対する憧れの証であり、〈山田長政〉自体がシャムの表象そのものであったと考えられる。

第二次世界大戦前に「日タイ友好親善条約」を締結してから、明治期からすでにシャムの表象となっていた山田長政は日本とタイの関係の象徴として用いられ、戦争への努力を促すものとして利用された。当時の山田長政ブームの中で角田喜久雄『山田長政』は様々なメディアで繰り返し取り上げられ、多くの読者に受容されたのである。角田喜久雄『山田長政』は、以前の山田長政テキストと同様に、物語の内容を改変し、山田長政とルタナ姫のロマンスの要素を追加している。そして、そのロマンスを通して、当時のアジア主義のイデオロギー、例えば、国民の精神的動員や日本の家族的全体主義などを伝え、日本の東南アジア侵略を美化しながら、各地を侵略するヨーロッパを批判し、敵国として仕立て上げたのである。一方で、角田喜久雄『山田長政』におけるシャムについての描写を見ると、それ以前のテキストのように漠然としたイメージのままである。

このように山田長政像は当初は「郷土の英雄」として取り上げられたが、明治末期から第二次世界大戦にかけて、山田長政の物語は次々に脚色され、政治の道具として利用されたため、山田長政像もシャムの栄光を回復する救国の国民的英雄として描かれた。それとともに、各時代に沿って理想の日本人像が反映された山田長政像は、国家の求める国民道徳を広める機能を有しているのである。これらの山田長政像は優位の日本（長政／男）と劣位のシャム（姫＝女／タイ）というようにパターン化されていく。こうして、政治的なメッセージを中心とする第二次世界大戦以前の山田長政像は、舞台のシャムとの相互関係によって、山田長政のイメージが生成された。しかし、テキストの中でのシャムの描写を見れば、歴史的テキストにあるシャムの風景が描かれても、はっきり見られるのは日本の侵略や搾取などを喜んで受け入れるという日本に都合のいいように作られたシャムのイメージである。山田長政テキストにおけるシャムの役割は、舞台となっているシャムだけではなく、その他の南洋の国々の表象ともされているのである。

第二次世界大戦後、多くの山田長政テキストは新しく解釈され、山田長政のイメージも新たに生成された。特に、遠藤周作『王国への道』では戦前期の理想的な長政像（例えば、シャムの姫と結婚して、シャム王になることなど）を否定し、人間らしい山田長政を登場させた。そして、その山田長政像を通して戦後の日本人を批判している。遠藤周作が2回のタイの取材旅行の経験を基にして書かれた『王国への道』では、舞台となったアユタヤはそれ以前の山田長政テキストと比べてより具体的に描かれている。また、他の山田長政の文献でよく描写される〈強い日本／弱いアユタヤ〉のモデルを、〈弱い日本／恐ろしいアユタヤ〉のモデルに逆転して物語っている。その「恐ろしいアユタヤ」は、戦前のように

⁶⁷ 例えば、中村直吉『亜細亜大陸横断・五大洲探検記』（博文館、1908年8月）には、様々なアジアの国々の話の中で、「暹羅探検」の話が収められている。「暹羅探検」で、中村直吉は「盤谷府の市街」、「王城」、「ワットプラケオ寺院」、「ローヤル公園、動物園、博物館」、「バンパインの離宮」、「山田長政の舊跡」などの観光地を描写されている。

従順で親日的なアユタヤではなく、日本を利用する二重人格のアユタヤである。

江戸時代から語り続けられる山田長政テキストは、日本人にシャム（タイ）を印象付け、偉人の山田長政が駐在したシャムのイメージを生成してきた。本章で取り上げた三つの長政テキストで投影されるシャムのイメージは時代によって異なるが、そこに共通しているのはシャムが女性化されるということである。こうしたオリエンタリズムのパターン（日本＝男性、タイ＝女性）は明治期から様々な山田長政テキストで固定化され、日タイの昔から深い友好関係という象徴⁶⁸として利用されている。

「山田長政」が、日タイ修好百年のことし、ブームだ。タイ政府の観光キャンペーンも功を奏してか、長政ゆかりのアユタヤに行く日本人は例年になく多く、テレビ番組や旅行記などにも長政ものが目立つ。日本政府も修好百年事業の目玉商品として現地に「アユタヤ歴史資料館」を無償援助でつくることを決め、経団連なども日本人町跡整備のための募金活動を始めている。（「実在したのか 英雄・山田長政」『朝日新聞』1987年3月10日、夕刊）

1980年代、「アユタヤ歴史資料館」や「バンコクユースセンター（タイージャパン）」などが日本政府の援助により建設された。このような文化的な設備を投資した日本政府は、日本とタイの友好関係を強化するだけではなく、1970年代のタイの反日運動が再び起らないように、山田長政を介して両国の長い交流の歴史をタイ社会に深く根付かせるのである。つまり、英雄としての山田長政は「真実」として管理され、このことを知らないタイ人⁶⁹に山田長政に関する知識を広めた。その「知識」の中に、山田長政によって敵から救われたシャムと同じように、日本から援助されるタイという言説が内包され、1970年代の日本企業のタイへの進出を促したのではないのか。

国策的に作られた山田長政の扱いは外交上のマイナスをもたらすと国際政治学者の矢野暢の反論⁷⁰があるが、山田長政はタイ政府やタイ人に拒絶されたことはない。なぜ山田長政はタイでマイナスイメージを持たないのだろうか。タイ人にとって山田長政は「学生・知識人の一部は長政がいろいろな外国人傭兵の一人と知っているが、普通のタイ人は、まず知らな」⁷¹くても、「侵略者」として扱われていない。タイの古典文学や歴史的な資料を見れば、隣国の人や外国人などが母国を去って、山田長政のようにアユタヤで生活することは、アユタヤ王の保護を受けることである。つまり、外国人を保護することは、国王の力を示すことにつながるのである。

昔からタイには国王の保護にかかる外国人が存在する。後に国籍を変えてタイ人に

⁶⁸ 1987年の日タイ修好百年に、山田長政は「日タイの友好の象徴」として取り上げられた。

⁶⁹ 「実在したのか 英雄・山田長政」（『朝日新聞』1987年3月10日、夕刊）

⁷⁰ 注69に同じ。

⁷¹ 「普通のタイ人、まず知らない」（『朝日新聞』1987年3月10日、夕刊）

なった外国人は少なくない。国籍にかかわらず、国王は母国で困難に遭遇した外国人たちに対して思いやりを持つため、国王の保護を受ける人々は幸せに暮らせる。(กองทหารอาสาต่างชาติในประเทศไทย(ม.ป.ป.) เข้าถึงได้จาก : <http://www1.tv5.co.th/service/mod/heritage/nation/military/volunteer/> (วันที่ค้นข้อมูล: 9 เมษายน 2556) (2013 年 4 月 9 日参照 : タナポーン訳)

このように、タイ人にとっては、山田長政は国王の保護の下にシャムで暮らし、そして、国王に恩返しをするために傭兵になる。そのため、国王の恩を知る山田長政はタイ人にとっても好意的に受け入れられている。また、山田長政がいた日本人町跡を見るために、アユタヤには毎年多くの日本人旅行者が訪れる。そのような日本人観光客によってタイの観光収入が増加している。タイにも日本にもメリットがあるため、山田長政は今でも「日タイの友好の象徴」として扱われている。

タイ日修好 124 年を記念⁷²として、2010 年 12 月 2 日にタイ映画「Yamada:The Samurai of Ayothaya (ヤマダ:アユタヤの侍)」が公開された。主役の山田長政には日本人俳優の大関正義で、山田長政が惚れたタイ人女性「チャムパー」の役は 2007 年度のミス・タイランドワールドのカノッコーン・チャイチュンである。また、日本人によく知られている K-1 王者のブアカーオ・ポー、プラムック選手とも山田長政にムエタイの技術を伝授する師匠の役で出演した。

映画「ヤマダ:アユタヤの侍」でアユタヤの日本人村の忍者の組織に追われる山田長政はアユタヤの住民に助けられ、タイ人女性「チャムパー」に介抱してもらう。回復した山田長政はアユタヤ人の村でムエタイ修業をし、ナレースワン王の傭兵隊員となる。アユタヤのため、ホンサワディー (ビルマ) の兵士を討伐した後、山田長政は日本人村へ戻って、組織に対して復讐をする。監督としてのノポーン・ワティンのインタビューによれば、「映画の楽しさ以外で、アジアのムエタイなども見せ所として取り上げています。海外で上映されたら、この映画のタイ伝統文化や、観光や、タイの面白さがきっと世界中の人たちの気に入ると信じています」⁷³と述べている。このように、「ヤマダ:アユタヤの侍」は歴史的正しさより⁷⁴、山田長政の伝説を介してタイを宣伝する目的で製作されたのである。この映画を見た日本人は「史実・通説が入り交じりその上作り話が多く加わるので、増々歴史的事実から遠くなってファンタジーの世界、否、漫画になってしまっている。(中略)この映画の見せ所は、ムエタイ。これだけを観るつもりなら、がっかりしないでしょ」⁷⁵と評価され、またタイの方も「日タイの歴史を美化する」⁷⁶と批判している。これについて、

⁷² ซามูไร อโยธยา เปิดตัวลั้งการ ไข่มวยพายุหุทธิ์ อั้ง ที่ มากความสามารถจากเหล่าเยาวชนตัวน้อย. เข้าถึงได้จาก:<http://movie.mthai.com/movie-news/83323.html> (วันที่ค้นข้อมูล:28 สิงหาคม 2556) (2013 年 8 月 28 日参照)

⁷³ เปิดหนังบู๊ควบไทย-เกาหลี-ญี่ปุ่น. เข้าถึงได้จาก: <http://www.bangkokbiznews.com/home/detail/life-style/movie-music/20101203/365785/เปิดหนังบู๊-ควบ-ไทย-เกาหลี-ญี่ปุ่น.html> (วันที่ค้นข้อมูล:28 สิงหาคม 2556) (2013 年 8 月 28 日参照)

⁷⁴ 歴史上で、山田長政はソントム国王の治世下 (1611 年-1628 年) にあったが、「ヤマダ:アユタヤの侍」ではナレースワン国王の治世下 (1590 年-1605 年) にあった。

⁷⁵ 「タイ映画:『Yamada the Samurai of Ayutthaya』2010 年」インターネット・ホームページ <http://d.hatena.ne.jp/midorilicht/20130106/1357501142>。(2013 年 8 月 28 日参照)

⁷⁶ ซามูไรอยุธยา แฟนตาซีประวัติศาสตร์ความสัมพันธ์ไทย-ญี่ปุ่น. เข้าถึงได้จาก: <http://www.iseehistory.com/index.php?lay=show&ac=article&id=538787100&Ntype=7>(วันที่ค้นข้อมูล:28 สิงหาคม 2556) (2013 年 8 月 28 日参照)

「ヤマダ：アユタヤの侍」で山田長政（日本）と長政を助けるカーム（タイ）の友情に何度も言及するところが見られる。具体的な例を挙げると、以下の台詞の通りである。

長政 俺を助けてくれて、ありがとう。

カーム 気にしないで。お前はホンサー（ビルマ：タナポーン注）でもないから、アユタヤの敵ではない。日本人たちはナレースアン王の傭兵になって、アユタヤのため、ナレースアン王のために命を捧げるから、お前は俺の友達だ！（タナポーン訳）（中略）

長政（日本語ナレーション）拙者はこの地に暮らしている遠方の親類縁者より拙者の近くで共に生計を営むものたちに惹かれている。彼らはあたかも拙者が同じ色の血を流すものであるかのように、異国から来た拙者のようなものでさえ、愛と慈悲を与えてくれる。友情とは魂と身体を育む。孤独から開放し、あらゆる障害を乗り越えるための力水のようなものだ。拙者はこれまで、友情というものにこれほど大きな意味と、力があるなどと感じたことはなかった。

以上の引用のように、カームは「日本人たちはアユタヤのため、ナレースアン王のために命を捧げる」という前提で長政を友達として受け容れるのである。これは、日本の山田長政の語り方と比べれば、日本が描いた山田長政はアユタヤで成功した山田長政の焦点化する一方で、タイが描いた山田長政はアユタヤや国王のために犠牲になるところが強調されていることである。こうしたタイ人の語り方によって、山田長政や日本傭兵の姿はタイを宣伝する役割を果たしているだけではない。異国人であるのに国王やアユタヤのために命を捧げる者として、タイの教育漫画⁷⁷や、歴史映画⁷⁸などに頻繁に登場している。このように、タイにおける山田長政は、「知らない」存在から日タイ友好関係の象徴となり、そして2000年代にタイ人の重要な歴史人物の一人として見なされるようになったのである。

こうした近代においても繰り返し文芸化される山田長政テキストの変容から、戦前のテキストは政治的言説を背景に生成・受容された一方、戦後のテキストとしての遠藤周作『王国への道』などは多様な解釈を許すものになっている。つまり、タイに関する戦後の文学作品は戦前の文学作品より政治的言説との呼応が稀薄になっている。また、作者自身が見たシャムより、種々の情報や資料を援用して描くため、戦前のテキスト『少年読本第七編 山田長政』などにおけるシャムは遠距離に置いて表現するパンフォーカスの写真のように焦点化される対象が曖昧で、硬い印象を与えるのである。これに対して、戦後期のテキスト『王国への道』を見ると、アユタヤのイメージは焦点距離で一部の対象を焦点化し、戦前のシャムのイメージがより鮮明になり、シャム（タイ）と読者との距離感が縮まった。このように、第4章から第6章では、戦時や戦後の日本現代文学作品を中心とし、タイ対象の対象化のあり方を考察する。

⁷⁷ สาราญ จารุกุลานิช และคณะ. ยามาตะ ซามูไรแห่งอโยธยา. กรุงเทพมหานคร: แอ็คชั่นเฟรม คีตส์, 2553. (2010 年)

⁷⁸ 例えば、全5部作の構成の「The Legend of King Naresuan (キング・ナレスワン)」(2007年から現在まで)でも日本人傭兵が登場している。

第4章

南方徴用作家の〈タイ〉

——アジア太平洋戦争下の日タイ表象——

1 はじめに

アジア市場の拡大を目指して、タイに進出し、バンコク支店を設置した三井物産が、日本タイ間の輸送のために名古屋・バンコク間定期航路を開設したのは、昭和3年（1928年）1月のことである。それ以降、バンコクでは日本企業の会社が増加し、日タイ貿易が拡大していった。昭和初期の日タイ表象については、久保田裕子「近代日本における〈タイ〉イメージ表象の系譜——昭和10年代の南洋へのまなざし——」（「立命館言語文化研究」2010年1月）で詳しく指摘されている。戦前のタイと日本の経済的な結びつきは戦中まで続き、両国の関係は強化されていった。例えば第3章で取り上げた角田喜久雄『山田長政』（大日本雄辨會講談社、1941年2月）を見れば、親日的なタイの姿がよく見られる。しかし、第二次世界大戦が開戦すると、中立を宣言していたタイは1941年12月8日に日本軍にタイ南部を占領され、半ば強制的に日本と同盟国となった。

昭和一六年一二月八日以降、東南アジアに侵攻した日本軍は、次々と各地を占領して、軍政をしいていた。たとえば、第十四軍はフィリピン、第十五軍はビルマ、第十六軍はオランダ領東インド、第二十五軍はシンガポール・マレー・スマトラ、ボルネオ守備軍はボルネオにおいて、といった具合であった。独立国タイに対しては、開戦直後に日本軍の通過を認めさせ、一二月二日に「日タイ同盟条約」を結び、翌年一月三日には「日泰協同作戦ニ関スル協定」を結んで、タイの独立と主権を尊重し、軍政はもちろんタイの国内での顕著な軍事行動を差し控えてきた。たとえば、一九四二年六月二九日に大本営が南方軍総司令官に対し、南方要域の安定確保と外郭地域に対する作戦準備を命じたとき、タイに関しては、「泰国駐屯兵力ハ情勢ニ変化ナキ限り最小限ニ止ムルモノトス」としている。（吉川利治「日タイ同盟下のタイ駐屯軍」『東南アジア史のなかの日本占領』早稲田大学出版部、1997年5月）

当時のタイは他の南洋諸国が植民地化される中、アジアで唯一の日本の同盟国となっていた。「日タイ同盟条約」を結んだタイは日本の東南アジアの他国への進軍に積極的に協力していった。東南アジアを中心とした各地でドイツのP・K（宣伝中隊）のように報道や宣伝活動などの義務を果たした。木村一信は南方徴用作家の役割について、宣伝班（軍報道班）

の担った業務を三つにまとめて説明を加えている¹。まず一つ目は、「対占領地宣伝」であり、日本語の普及、教育を中心としている。また、日本映画の上演活動などもここに入る。二つ目は、「対軍隊宣伝」であり、ここで言う軍隊とは日本軍を指している。戦意高揚と聖戦思想の普及などを目的とし、陣中新聞の発行を主な業務とした。三つ目は、「対敵宣伝」であり、主にラジオ放送を通じての活動である。南方徴用作家たちはビルマ方面、マレー方面、ジャワ・ボルネオ方面、フィリピン方面に渡って活動したため、東南アジアに関する報告文や小説などが多く書かれている。しかしながら、タイは日本の同盟国であり、徴用先ではないため、当時のタイに関する記述は非常に少ない。

昭和16年(1941年)11月に徴用令の「白紙」を受けた作家たちは、東南アジア方面に向かう輸送船に乗せられ、ビルマ方面やマレー方面に派遣された。サイゴンで、マレー方面の文学者は別の汽船に乗り、タイの南部ソククラに上陸した。一方、ビルマ方面の文学者たちはサイゴンからバンコクまでトラックに乗ってきた。ビルマ方面に渡る作家たちはタイ領を経由してビルマへ行くので、日記や旅行記などの中にタイに関する記述がわずかながら存在する。そこで本章では、同盟国のタイは当時の日本においてどのようなイメージで捉えられ、いかに見なされていたのか、という問題を解明するため、徴用作家が書いた戦時中の文学を検討し、分析していく。また、徴用作家が生成したタイの表象をタイ文学におけるタイの表象と比較して考察することが本章の目的である。

2 徴用作家が見たバンコク

ビルマ方面に向かった作家には、岩崎栄、小田嶽夫、北林透馬、倉島竹二郎、榊山潤、清水幾太郎、高見順、豊田三郎、山本和夫などがある²。ビルマに派遣される前に、彼らはタイにしばらく滞在していた。戦時中の作家たちは、タイをどのように見ていたのか、まずは榊山潤「南洋記(三)」³(「文藝日本」1943年8月)を見てみよう。

少しバンコクのことを記しておきたい。西貢は森の都であり、バンコクは森と運河の都である。男女共にパヌンと稱する長さ七尺幅五尺の布を腰にまとふ。色は曜日によつて變へる習慣があつたが、今は多く青色を用ふ。女子の如きは殆ど洋風のパーマネント、わづかに乳を覆ふサバイと稱する洋風上衣を用ふ。地方都市の下層者はすべて裸足である。と、私はタイの事情を何か書物で讀んだ。勿論バンコクが、一流の都市でないことは改めていふまでもない。けれどもバンコクは美しく、また愉しかつた。

榊山潤が述べた「パヌン」と「サバイ」の風景は明治大正期のシャム国情に関する文献、例えば岩本千綱『暹羅国探検実記』(1893年)などの中でよく言及されている。しかし、実

¹ 木村一信「南方徴用作家——〈ジャワ〉を中心に」『昭和作家の〈南洋行〉』(世界思想社、2004年4月)

² 注1に同じ。

³ 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第7巻:榊山潤(3)』(龍溪書舎、2010年2月)所収本文。

際にタイに来ると、「パヌン」と「サバイ」の風景の代わりに、「洋風のパーマネット」の女子の髪型などが現れた。これについて、高見順『ビルマ記』⁴（協力出版社、1943年2月）でビルマ人は洋服を着ずにロンジを着ている一方、タイでは当時の政府による風俗改善がなされ、多くのタイ人は洋服を着ていると、タイとビルマの風景を比較して書かれている。また、平野零児『マンゴウの雨』⁵（天祐書房、1944年5月）では、タイは「文明國も野蠻國もない」、「暹羅などと云つた頃は、只山田長政を思ひ出すだけで、時代と共に、ゑらく遠い遠い國かなんぞのやうに思はれ勝ちでしたがね。タイ國と名が變つてから、急に距離までが近くなつたやうに思ひます」と書かれている。いずれも、それ以前にはありがちだった山田長政と関わる遠い國（シャム）のイメージより西洋化され、「美しく、また愉し」い國としての近代（タイ）が語られている。

「海天」へ赴く。大きなシナ料理店。三階で食事、四階がダンス・ホール。外は燈火管制で暗い。車で名物の裸踊りを見に行く。あやしげな家の前で車がとまる。

一人五十銭。あぶない階段をあがって三階へ行くと、小さな劇場風の広間に出る。人がいっぱいいる。ちょうど休憩で、しばらくするとはじめる。（中略）ジンタに似たへたなうるさい音楽にあわせて、裸かの女が幕の間から出てきて、ゆっくりとものうげに踊る。乳と陰部をかくしただけの衣裳。いきなりそう露出されてはかえって趣がとぼしい。しかし想像したほど醜悪ではない。皮膚も白く、均斉がなかなかとれている。ものすごい顔もあるが、多くは茶目公のような顔をしていてなかなか可愛い。はじめは何かこっちの方が照れくさかったがだんだん見なれてくる。（高見順『高見順日記 第一卷』勁草書房、1965年9月）

高見順は日記の最後で、「バンコックがおもしろ」いと書いている。高見順の日記によると、バンコックにはダンス・ホール、ニュー・バー、P屋、シナ料理店、Swee Hong レストラン、劇場、映画館などがある。特に、ダンス・ホールでの裸踊りは他の徴用作家の日記の中でもよく言及され、日本軍に人気のある場所である。このような歓楽街の描写を中心として、戦時中の他の国とは異なる、面白くて、「愉し」いバンコックのイメージが表現されている。また、榊山潤『ビルマの朝』でも静養地としてのバンコックのイメージを反映されている。

『此處じゃ、ゆつくり静養するといふ譯にも行くまい。ラングーンへ戻つた方がいい』飛行機があつたら、都合によつてはバンコックへ行つて、二週間も静養し、元氣をとり戻した方がよからうといふのである。有がたい好意である。

大村大尉も、それをすすめて呉れた。

『いいな、バンコックは』

⁴ 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第1巻:高見順(1)』（龍溪書舎、2010年2月）所収本文。

⁵ 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第14巻:平野零児 座談会・対談』（龍溪書舎、2010年2月）

稲葉はバンコックを思ひ出すやうに、

『氷もあるし、麥酒もある。地雷のない散歩区域もあるし—一行つて来いよ』（榊山潤『ビルマの朝』今日の問題社、1943年6月⁶⁾

『ビルマの朝』では、ビルマでデング熱にかかった矢木が静養するためにバンコクに送られる。回復した矢木の「市民たちの喜ばしげなお祭り騒ぎ—そんな戦争気分のバンコック」という言葉は、戦争を「遠い悪夢のやうに拭ひ去」る場所としてバンコクを捉えていると考えられる。一方、戦場になるビルマについては、倉島竹二郎「ビルマ戦線の思ひ出」⁷⁾（「放送」1943年3月）は「瘡痍不毛の地にあつて、物質不足その他のあらゆる悪条件のもとに、日夜をわかたぬ戦闘や警備をやつてみられる兵隊さんたちの御苦勞は、竝大抵ではない」と書いている。このように、日本人にとってタイの空間は、歓楽街のイメージを含めて「悪夢」のようなビルマの戦線とは対照的に、精神的な癒しをもたらす平和な空間として見なされる。そうした空間性の表象が戦時下における〈タイ〉の大きな特色の一つである。

3 タイ人への眼差し

岩崎栄『萬歳(チャイヨウ)』⁸⁾は昭和19年(1944年)5月に泉書房より発行された。『萬歳』は「輸送船」「佛印」「バンコック」(但し「バンコック」は目次にはない)「宣傳戦」「紙の花」「動く」「チェップ一家」「タイ軍従軍」「チェムマイ」という章に分かれ、マレーとビルマ方面に向かう南方徴用の文化人たちについての話である。この作品では、輸送船内の情況、南国の風景、宣伝班の仕事などの内容が、作者・岩崎栄の視線から語られる。ただし、タイ人女性チェップと日本軍一等兵である藤井の話だけは、主に藤井の視点から語られている。チェップと藤井との関係は、チェップの弟を仲立ちとして始められる。藤井は日本語がわからないチェップの家族と身振り手振りでコミュニケーションをとったり、チェップの弟に物をあげたりして交流を深めていく。チェップの家族も藤井を同じ家族の一員として認め、果物などをあげたりする。最後は藤井がビルマに派遣されることで、チェップの家族と別れることとなる。このチェップと藤井の物語には、戦時の日本人とタイ人の関係が理想化したかたちで反映されており、日本人のタイ人に対する眼差しが見いだされる。

チェップの家は兵隊の宿舍の近く、「あまり大きくない」「バナナ畑の中の茅屋」である。バナナ畑や椰子の木などがある果樹園は、豊饒な南国の一般的な風景で、果樹園を営むことは当時のタイ人の典型的な職業であった。チェップには、父親、母親、弟、小さな妹がいるが、女性や子供や老人といった面が強調されており、その点で庇護を受けるべき弱者の空間

⁶⁾ 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第5巻:榊山潤(1)』(龍溪書舎、2010年2月)所収本文。

⁷⁾ 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第11巻:倉島竹二郎』(龍溪書舎、2010年2月)所収本文。

⁸⁾ 土屋忍「解説 岩崎栄著『萬歳』——記録性とユーモア」(『萬歳 文化人の見た現代アジア16』ゆまに書房、2002年9月)は「他作家と比べてかなり細かな情報が織り込まれているのが特徴で」、「自らの感性や記憶を信じて書くタイプの文学者が多い中では貴重な存在」があると述べている。『萬歳』の引用は『萬歳 文化人の見た現代アジア16』(ゆまに書房、2002年9月)による。

と読み取ることもできる。そうしたチェップの家の人々が、日本軍人の藤井を『フジー、フジー』と呼びながら、片手で藤井を招く場面などは、日本軍を歓迎するタイの縮図という印象もある。

チェップは「歯だけは白」い、「黒い妙齡」の娘である。チェップだけではなく、「父親も赤ン坊を抱いた母親も、弟も、妹も、みんな黒い顔を揃へてゐる」。日本人から見たタイ人の身体は〈肌が白い〉日本人と違い、「黒い人種」で、「遠い異國」を感じさせるものであり、これは土民性や未開性を強調するものと言える。藤井はいつもチェップの話了他の人に語る。その話は、チェップがスイカとザボンをまちがう話、当番をするときに徴用者と将校の区別ができない話、おかしい日本語を喋る話などである。チェップは日本語や英語ができず、作品中の彼女の発言は、藤井が教えてくれた、意味もわからない日本語のみとなっている。タイの空間の中にいるタイ人でありながら、チェップは語る主体としては登場せず、藤井の視点から一方的に語られる存在である。藤井によって語られるチェップは、スイカとザボンをくれたり、洗濯してくれたりするというように、藤井（あるいは、日本軍）への好意と服従が前景化された存在である。

〈黒い〉タイ人女性が好意を持つのは藤井である。藤井は「困ったやつ」で、「脱糶したり、上官と喧嘩したり、つまり劣等兵」であるとされている。また、彼とチェップの関係は、「住民を擲擻つちやいかん」という日本兵隊の規律に反して、日本の集団に「にやり、にやりしながら見」られている。つまり、藤井は日本軍の中では劣位に立つが、その彼でさえ、タイ女性のチェップやチェップの家族の中では、優位に立つ存在である。

「おうい、チェツプ！　こんちくせう。」

チェツプが、絹糸のやうな細かい聲で、「コンチクショウ」と應じる。

「わしや、下に行つて、晝寝をする。」藤井は、指を下に指し、肘枕で眠る眞似をしてみせ、

「晩には、スイカを呉れよウ」と呶鳴りつけて、くるりと廻れ右をする。

チェップと藤井の交際は「同盟國の好意に包まれるやうな感激」で、「日泰親善」だと言われる。しかし、藤井はチェップの弟に物を「投げて」やったり、チェップに「呶鳴」ったり、守衛の仕事を手伝わせたりする。しかし、いくら藤井に怒鳴られても、チェップは従順に藤井の言うとおりに従う。このように、藤井に支配されながらも、その藤井に好意的で従順なチェップの家族の描写は、日本人からみた戦時中のタイ人の表象ではないだろうか。

ところで、榊山潤「盤谷挿話」⁹（『新太陽』1943年7月）という作品がある。ビルマへの派遣辞令を待っている主人公の坂井は、バンコクのタイランド・ホテルに泊まる。彼は、そこで働くパパイという洗濯女の娘と知り合う。パパイを可愛がっている坂井は、彼女を喜ばせるため、いつも物をやっている。しかし、最後にパパイは敵の爆撃で亡くなり、坂井はビ

⁹ 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第7巻:榊山潤(3)』（龍溪書舎、2010年2月）

ルマに派遣される。

坂井は、何かいい氣持だつた。パパイの素直な喜びの鼓動が、少時は室内に残つてゐるやうな感じだつた。自分には大して必要のない品物で、人が喜んで呉れるのを眺めるのは嬉しい。

翌朝、坂井はまた、髭そりの後でつけるクリームを、パパイにやつた。これは毛唐が使用するものと見えて、如何にも濃く、二三度使つて坂井は持てあました。坂井はそれをパパイにやつて、パパイの喜びが、日本の墓口の場合と、どつちが大きいかをためすやうな氣持だつた。

「盤谷挿話」とチェップの話とを比べてみると、類似点がいくつかある。まず、パパイとチェップは日本軍人（藤井と坂井）に仕えるタイ人の女性であり、親日で従順なタイ人の象徴でもあり、そこには「日本を男性、タイを女性」とするアナロジーが用いられていると考えることができる。二つ目は、パパイは坂井から墓口をもらってから、坂井と親しくなる。これに対して、藤井はチェップの弟に金平糖をやってから、チェップの家族のメンバーとして認められる。しかし、相手に物を与える行為は日本人の優しさや友好関係を表すだけではない。物をあげる行為は、あげる側（日本）をもらう側（タイ）に対し、精神的優位に立たせ、自分（日本）より弱者（タイ）を守らなければならないという感情を引き起こすのである。日本人から物をもらうタイ人と、そのことによって日本を受容するタイとの関係性は、戦時の日本とタイの関係を象徴的に表現しているようである。

「タイの土をタイへ……」かうして聲を呟した四十年來の宿怨の地パクセ、ルアンプラバンの大都及びカンボヂヤの一部が母なるタイに歸るのだ、いままで笑ひを封じてゐたタイ全民衆が面を北方に向けて吐から“チャイヨ”を口々にいつてゐる、恩讐に綴られた永い昨日も明けて“白象”がほんとの笑ひをとり戻したのだ」（「“白象”は微笑む 宿怨40年の地 メコン河の宝庫タイに還る日」『読売新聞』1941年3月12日、朝刊）

昭和15年（1940年）にタイはフランスに旧領土の返還を求めて、国境紛争を起こした。戦闘は日本の調停により終了し、タイはフランスから旧領土を返還された。日本の助力で旧領土を取り戻したタイの喜びは、藤井から金平糖をもらうチェップの弟の話や、坂井から墓口をもらうパパイの話と重なっている。言い換えれば、もらう側のタイは、日本人に従順なチェップやパパイの描写に反映されており、それは戦時の日本人にとって日本人が期待するタイ人を通俗的かつ象徴的に表象している。

4 「チャイヨー」と叫ぶタイ人

岩崎栄『萬歳』と榊山潤「盤谷挿話」のもう一つの共通点は、タイ人が日本人に対して発する「チャイヨー」である。「チャイヨー」はタイ語であり、日本語の「万歳」と同じ意味を持ち、喜びや祝いを表すときに使う。『萬歳』というタイトルも、「部落を通過すると、土民達は仕事をやめ、両手を高く挙げ、「チャイヨウ」「チャイヨウ」と叫ぶことからつけられており、それは日本軍に対する歓呼の表現である。「チャイヨウ」と叫ぶタイ人の風景は、徴用作家たちの様々な作品で言及されている。それらの風景は日本人にとって、どのような意味があるのか、次の引用文を見てみよう。

五六人の子供が、これも向ふ側に行くつもりであらう。浦上の車と前の車の間に、どやどやと駆けて入った。乗つてゐる浦上と岸が日本人だと分ると、十くらゐのその中の一人が、両腕をあげた。

「チャイヨウ」

泰の萬歳である。他の子供たちもそれを真似て、両腕をあげた。

「チャイヨウ、バンザイー」

車の中で、岸と浦上もそれに應じた。子供らは向ふ側に走り去つたが、どれも半裸體の子供の、笑つた黒い顔が目に残つた。

「張切つてゐるな」

その後ろ姿を見送つて、愉しさに岸が云つた。(榊山潤『航空部隊』実業之日本社、1944年9月¹⁰)

榊山潤『航空部隊』におけるタイ人の子供たちの「チャイヨウ」は日本軍人の「岸」を「張切」らせる。また、清水幾太郎は「座談會 大東亞青少年運動の構想」¹¹（「座談會 大東亞青少年運動の構想」『時局雑誌』1943年6月）で「僕などは、割合にセンチメンタルな性質を有つてゐるせゐか、異國へ来て、子供が、チャイヨー、チャイヨーと聲を嗄してど鳴つてくると、涙が出るほど嬉しい」と述べている。タイ人の「チャイヨー」は、他の東南アジアとは異なる風景である。それに徴用作家が見ているのは、従順な同盟国としてのタイの表象だけではない。タイ人の和やかな「チャイヨー」は日本人に温かい感情を与え、まるで同じ国民からの励ましを受けているような感覚を与えるのである。このように、「チャイヨー」は日本人にとっては異言語だが、日本とタイが一心同体であるような関係を結ぶ言葉だと読み取れる。

『萬歳』の最後に藤井はビルマに派遣され、チェップと別れることになる。一方、「盤谷挿話」のパパイも連合軍の空襲で亡くなり、坂井と死別する¹²。双方の作品には戦争で別れる話という共通点がある。特に「盤谷挿話」では、タイ人の娘の死に接した坂井は「啞然とし

¹⁰ 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第6巻:榊山潤(2)』（龍溪書舎、2010年2月）所収本文。

¹¹ 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第14巻:平野零児 座談會・対談』（龍溪書舎、2010年2月）

¹² ホテルの洗濯女の娘のパパイの話は『ビルマの朝』（今日の問題社、1943年6月）でも登場する。しかし、『ビルマの朝』でのパパイは亡くなった友達の写真を見せるという話である。

て眼を瞞」っている。パイの死（被害者としてのタイ）に対する坂井の同情には、日本人とタイ人の親密な関係性が見られ、戦時の他の作品でもよく書かれている。

通りの端には、臨時の食べ物を賣る露店まで出てゐた。泰の高射砲隊が、初めて墜した敵機。すでに幾度も、不法な爆弾を市中に落した憎むべき英國機。それを現物に行く市民の群れである。まるでお祭りのやうな騒ぎであつた。（中略）

車は、のろのろと進んだ。警官の制止も思ふやうにならず、狭い舗道からあふれ出す人波に、速力が出せなかつた。晝食の時間が過ぎて、ひどく空腹を感じ出した浦上には、それがいくらか苛立たしい。が、バンコック市民の弾む鼓動を思へば、そんな苛立ちさへ申譯ない感じだ。（榊山潤『航空部隊』実業之日本社、1944年9月¹³）

日本にとっての敵国である英国機を撃墜したタイの人々（バンコクの市民）の「お祭りのやうな騒ぎ」を見て、空腹からくる苛立ちに申し訳なさを感じる日本軍人の気持ちを通じて、日本とタイが同じ敵に向かい合う同盟国であることを印象づけようとしている。徴用作家たちが描くタイの風景は、明るく、日本に好意を持つ人々に満ち、他の戦場とは違った平和な場所という性格が強い。

日泰文化協定は百年、千年の懸案といふべきでせう、今後の運用について老婆心ながらただ一言付け加へるとすれば

日本は…文化的にも兄のやうなつもりで泰を導かねばならぬといふことです、あくまで指導であつて支配のやうな誤解を持たせてはならぬ。（「兄の気持ちで導かう 實結ぶ日泰文化協定」「読売新聞」1942年10月29日、朝刊）

こうした記事に見られる「兄の気持ち」という比喩的表現は、戦時下において、大東亜共栄圏を正当化する言説として、新聞雑誌をはじめ多くのメディアでくりかえし使用されたものである。藤井とチェップ、あるいはパイと坂井の例のように、日本人とタイ人を擬似的な兄妹として描く徴用作家たちの描写のパターンは、自身を「兄」として立体化する戦時下に反復された日本的言説の投影という一面があることは否めない。その上で、タイ表象に特色があるとすれば、それがしばしば「妹」として、すなわち女性性が前面化されるように描かれている点にあるだろう。

5 タイ文学における日本軍の表象

戦時中の日本文学におけるタイの表象は、親日的な表象のみが一方的に描かれていた。しかし当時、侵略されたタイ人は日本軍に対する不穏な感情を持っていた。タイは対外的には

¹³ 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第6巻:榊山潤(2)』（龍溪書舎、2010年2月）

日本の同盟国であり、連合軍に宣戦布告をしていたが、国内では日本の植民地のように支配され、圧力をかけられた。

日タイの関係は、開戦直後に締結された「日タイ同盟条約」に基づいて、日本軍のタイ国内通過や駐留が行なわれていたのだが、日本軍はややもすると占領軍のようにふるまって、独立国であるタイ人のプライドを傷つけることが多かった。たとえば市中のクロン（運河）で白昼、素っ裸で水浴したり、列車で着いた兵隊がホームからいっせいに立ち小便したり、タイ人をなぐったり、僧侶に不敬を働くなどの行為である。なかでも激しくタイ民衆の反感を買ったのが「バンポン事件」¹⁴であった。これは泰緬鉄道の工事中にバンポンという町で、鉄道第九連隊の将校がタイ僧侶をなぐったことから、憤激した民衆が日本兵を襲撃し、数人を殺害した事件である。（市川健二郎『日本占領下タイの抗日運動：自由タイの指導者たち』勁草書房、1948年4月）

「バンポン事件」の後、タイと日本との関係を改善するため、昭和18年（1943年）1月に中村明人¹⁵がタイ駐屯軍司令官に就任し、終戦に到るまでタイ国内の活動を取り仕切った。中村明人は両国親善に貢献し、タイの信頼を得た。いずれにしても、日本と同盟国という立場のタイは、連合軍の空襲を受けていた。タイ人作家であるアージン・パンジャパンの戦時回想録『バム・バンコク』¹⁶では当時のタイへの空襲の状況について、次のように述べている。

日本軍に侵略されてから、僕は国のことを心配し、ずっと恨みを抱いていた。だが、今日は最高の幸せだ！それは、敵（連合軍：タナポーン注）の航空機のしっぽから煙が出ているのが見えたことだ。どこから攻撃されたのか知らないが、そのバンコク人がやつけた敵はここに落ちて、目の前で死につつある。（タナポーン訳）

連合国側により空爆されて、日本軍とともに空爆の被害を受けたタイは、日本軍に同調した。つまり、当時タイの日本に対する感情は、複雑で、愛情と憎しみが混ざり合ったものであった。これについて、中村明人は敗戦した日本軍へのタイ人の態度を次のように述べている。

かれら（タイ人：タナポーン注）の日本兵に対する同情は、日一日と高まっていった。弱いものを助け、貧しいものに恵んでやることは仏教の教えである。この教義をタイ人

¹⁴ 「バンポン事件」は1942年11月24日に勃発した事件である。その原因は、タイ僧侶が捕虜にタバコを恵んだためである。

¹⁵ 帰国後、中村明人は太平洋戦争期のタイの状況についての『ほとけの司令官 駐タイ回想録』（日本週報社、1958年6月）を執筆した。以下中村の発言は同書による。

¹⁶ อาจิ้นท์ ปัญจพรรค์. บอมม์กรุงเทพฯ. สำนักพิมพ์มติชน. กรุงเทพมหานคร, 2541. (1998年)

は戦後如実にわれわれに示してくれた。バナナ売りのお婆さんが、その日の糧にひさぐ商品を惜しげなく使役に疲れて帰る日本兵の雑嚢に押し入れてくれたり、交番の巡査が疲れた兵を列からつれ出して付近の店でコーヒーや牛乳を飲ましてくれたり、車夫が車賃はいらぬから乗れとすすめてくれたりしたという例は、毎日のようにあった。

中村は、苦しんでいる日本軍人を助けるこのようなタイ人の態度は、「シンガポールと(略)まったく天地の差」でシンガポールでは日本軍に敵意を持ち、「まったく人道を無視」し、「復讐的」だとも述べている。

日本軍に対する同盟国タイの複雑な距離感は、トムヤンティ¹⁷の『メナムの残照』¹⁸の中でも描写されている。『メナムの残照』の原題は「運命の相手」を意味する『クーガム(คู่กรรม)』で、1967年に雑誌「シーサヤーム」で連載され、翌1968年に初版が刊行された。『クーガム』は戦後の作品だが、著者であるトムヤンティは戦時中のタイを描く上で、戦争に関する資料の他に、幼い頃の記憶と、知り合いの元連合軍人・フェルディナンド氏の証言を素材にして書いたとされている。また、主人公「コボリ」はタイ駐屯軍司令官の中村明人をモデルとしている¹⁹。トムヤンティは軍人である父から中村明人のことを聞かされていた。『メナムの残照』の物語は、実際の歴史に沿って設定されている。物語は開戦の直前に始まり、自由タイ運動のパラシュート事件(1944年3月6日)について述べられ、最後にバンコク・ノイ駅が空爆された事件(同年11月29日)で終わる。『メナムの残照』はタイで6度テレビドラマ化²⁰、4度映画化、1度ミュージカル化もされている²¹。『メナムの残照』の中の「小堀」と「アンスマリン」の悲劇的な愛の物語はほとんどのタイ人が共有しており、『メナムの残照』はタイ人の側から見る日本のイメージを表す代表的な作品といえる。この『メナムの残照』の粗筋を少し紹介したい。

海軍士官であった父親のルアンはアンスマリン(アン)が生まれた直後、イタリアに留学する。帰国後ルアンはアンの母親オーンと離婚し、アンは母親に引き取られる。貧しい生活の中、アンは母親と祖母の愛をうけ成長し、大学に進学する。アンの小さい時からの遊び友達に、村長の一人息子で、工学部に通う大学生ワナスがいた。彼は5年間のイギリス留学に発つ前に、アンに愛を告白し、彼女に自分の帰りを待ってくれるよう求める。昭和16年(1941年)12月8日に日本軍はタイに進駐し、バンコクに駐留する。日本軍はアンの家の近くにあった小さな造船所を買い取り、沿岸や河川を航行する小型船を造るようになる。その造船所の所長のコボリはアンに好感を抱くが、タイに進駐している日本軍への反発が強いアンは

¹⁷ トムヤンティの本名はウィモン・シリパイブーンである。1937年、バンコクに生まれる。タマサート大学商学部を卒業する。14歳より文筆になじみ、20歳で長編を発表する。トムヤンティは作家として活躍するだけでなく、タイ女流作家協会会長、タイ王国上院議員を歴任した。

¹⁸ トムヤンティ『メナムの残照(上・下)』(西野順次郎訳、角川文庫、1978年12月)のち『メナムの残照 上・下』(大同生命国際文化基金、1987年12月)。引用は後者による。

¹⁹ สรรพสิริ วิริยศิริ. สัมภาษณ์กรมตำรวจบางกอกน้อย. ศิลปวัฒนธรรม. 11, 8. 2533. (1990年)

²⁰ 1970年、1972年、1978年、1990年、2004年、2013年にテレビドラマ化された。

²¹ 映画化されたのは1973年、1988年、1995年、2013年で、ミュージカル化されたのは2004年である。また、ミュージカル「クーガム」は2007年に再上演された。

コボリを冷たくはねつける。しかし二人の関係についての噂が村で広まったことを機に、コボリが日本軍司令官の甥であることや、アンの父親がタイの高級海軍将校であったことから、タイ日親善という政治目的もからみ、アンはコボリと結婚することになる。タイの地下工作活動で困っているアンの周りの人を助けるため、アンはコボリを愛していく。しかし、ワナスと約束しているアンはコボリに自分の気持ちを伝えることができない。最後に連合軍の空爆でコボリは重傷を負う。アンは瀕死のコボリを胸に抱かかえ、自分の思いを伝える。コボリはアンの胸の中で息絶える。

高橋勝幸は「日本軍のイメージが悪い中で、小堀は理想の日本人として人口に膾炙している。タイ人女性が日本人を見ると、「小堀」と声を掛けるほどである。それはテレビや映画の影響であろう。タイ人女性が日本人を見ると、「小堀」と声をかけるぐらいその名前は浸透している。僕は1987-8年にタイに交換留学したが、やはり「小堀」と学生寮の食堂のおばちゃんなどに声をしばしば掛けられた」²²と述べている。タイ人にとって「小堀」は日本人の総称として使われるほど最も有名な日本人の名前である。「『永遠の恋』と日本像 ドラマメーカーカム(〈ママ〉)」「ノパドル・モンコンパンさん」²³によれば、「『コボリ』はタイ人の心に入り込み、日本と日本人に対するイメージをもつくり出している」ということである。つまり、タイ人の心を広く捉える『メナムの残照』は、タイにおける日本、またはタイ人の日本人に対する表象を生成していると言える。また、『メナムの残照』において生成された日本の表象(他者表象)の中には、タイの自己表象も潜んでいると思われる。

自分で認識している自分と、他の人から見た自分の姿には相違がある。本人が気づいていない側面を他の人は気づいていたり、逆に自分だけが知っていて、他の人に気づかれていない側面があったりもする。自分で思っている自分を「自画像」、他の人から見た自分を「他画像」という。親日のタイは徴用作家たちの視点で描かれたタイであり、日本人によるタイの「他画像」が見られるとしたら、『メナムの残照』はタイ人の視点で描かれたタイであり、タイの「自画像」が見られると言える。このタイの「自画像」がいかにかに描写されているのかを、次に考察する。

『メナムの残照』のアンスマリンの家は、コボリの造船所(日本人の空間)の近く、『萬歳』のチェップの家と同様に果樹園や菜園がある「タイ式の家」である。このアンスマリンの家の空間は、機械だらけの日本の造船所と異なり、自然的でタイ式な空間だと考えられる。アンスマリンの家族は祖母と母親というように、女性ばかりであり、チェップの家族のように弱者(女性)の空間として捉えることができる。しかし、日本軍を大歓迎するチェップの家に対し、トムヤンティが描いた〈タイの空間〉であるアンスマリンの家は、日本軍に荒されるだけでなく、イギリス人の捕虜にも入られ、連合軍にも空爆される。これは、日本軍にも連合軍にも侵略されていた当時のタイの自己表象であると考えられる。

『メナムの残照』について、トムヤンティは「初めからこの本を日本人に読んでもらいた

²² 「タイにおける第二次大戦の記憶——自由タイ、『メナムの残照』、『王朝四代記』を中心に」(『地球宇宙平和研究所所報』2007年12月)

²³ 「西日本新聞」(2004年4月23日)

い希望を有していた」²⁴と述べている。トムヤンティは意図的にアンスマリンをタイの自画像として生成し、理想的なタイ人女性として描写していると考えられる。これは、日本が見た南洋女性のステレオタイプから脱し、小柄、白い肌、大きな眼を持つ娘である。また彼女はタイ式の家に住み、タイの楽器「キム」を演奏するように、典型的なタイ人でありながら、日本語も英語も話すことができるインテリ女性である。このように、タイ女性を代表するアンスマリンのイメージは、岩崎など徴用作家たちが描いたタイの女性像とは全く異なる。それは特に、彼女の反日態度に表れている。

「わたし、あんな奴と話したくない。大嫌い」

「どうしたの—アン、戦争と個人とは別よ。彼らにはあの人たちの任務があるのだし、わたしたちはわたしたちの仕事をすればよいの。ただ、友好的に話しかけられても何も迷惑にならないでしょう」

「大嫌いよ！」娘は強く言い放ち、さらに続けた。「いやな奴らに近寄ってもらいたくないの。とにかく、日本人が嫌いだわ」

アンスマリンは愛国者で、日本に嫌悪感を持つ。彼女は、女性として弱い立場に居ながらも、タイ人としてのプライドを持って、日本軍を「残酷」「野蛮」だと批判し、日本に服従しないタイ人像を表している。敵国人のコボリと結婚させられても、彼女は「自分の民族を裏切りたく」ないと、自分の愛国心を肯定する。しかし、結婚後のアンスマリンは「敵が損害を受ければ喜ぶべきことであったが、それが今では逆の感情が湧いて」、日本軍に同情を表す。日本の軍人に同情したり、またイギリス軍人を助けたりするアンスマリンは、他人の痛みを自身の痛みと感じ、互いに助け合う仏教の教えの影響とされるタイの国民性を示したものだと思われる。つまり、タイは日本ほど〈強く〉なく、日本のように〈残酷〉でもない。〈平和〉〈調和〉を愛し、困っている者を助けるタイ。これがトムヤンティが伝えたい自画像である。

一方、コボリ海軍大尉を見てみると、コボリは「日本軍司令官の甥」であり、「背の高い」「青年将校」で、立派な造船所長である。コボリのイメージは、他の日本軍人と異なり、タイ人にとっての理想的な日本軍人として描かれている。

「全滅したのだろう。それで、所長はどうしたかね」

「まだ死んでいませんわ」

「それはよかった！」ポンは心から叫んだ。

「被害を受けたと聞いてやはり彼のことが気になったよ。どういうわけかわからないが、ニッポンはみんな虫が好かないが、奴だけは別だ。彼とは何回も問題を起こしたが、それは親しいからだよ。ほんとうに日本人であるのは残念だ。」

²⁴ 「訳者のあとがき」『メナムの残照 下』（大同生命国際文化基金、1987年12月）

コボリは愛するタイ人女性・アンスマリンの存在から、タイ人をよく助けている。一方、インターネット上での日本人読者の感想²⁵によると、コボリは軍人としては落第であり、気弱で、柔弱な日本軍人である。しかし、仏教の教えを内面化したタイ人は、コボリがタイ人を助けることを「行儀がよい」と認め、「マリ（コボリ：タナポーン注）のように女房を愛する旦那を見たことがない」とほめている。コボリはやさしい日本人として描かれており、日本の固有名「コボリ」の代わりに、周囲の人々から「マリ」²⁶と呼ばれる。『萬歳』などには見られない、コボリのような日本軍人は、タイ人にとっての理想的な日本人として生成されていると言える。

小堀が転勤を延期し、彼女と婚約したことは、新聞も大きく取り上げて発表していたので、村人たちの話題の中心となった。

「オーンの娘は幸福よ！」

アンスマリンにとってこのような噂を聞くのは心苦しいことであった。今や瞬時にして、村人たちの侮蔑の陰口は消えて、彼女は幸福な人になってしまった。あの口うるさいミヤンばあさんも、ときどき顔を出してはお世辞を言っていくのであった。

「オーンさん、用事があればいつでも手伝いますよ。アンも幼いときから知っている隣同士だから。こんな幸福が舞い込むなんて夢のようだね。軍司令官から真珠やダイヤモンドやお金など、たくさん贈られたらいいね」

作中において、タイ人女性が日本軍人と結婚することは、「幸福」なことと見なされている。日本軍人と親しくしているアンスマリンの家は「チーズ、バター、ハム、コンデンスド・ミルク、牛乳」など戦時中に手に入りにくい物をもらい、一般人より優遇されていると言える。このような描写は、徴用作家たちが書いたタイ人（もらう側）と日本人（与える側）の関係（チェップと藤井・パパイと坂井）と重なっており、もらう側のタイのイメージが反復して描写されている。しかし一方で、このことは村人たちに注目され、「嫉妬のあまり「非国民」とまで言われ」、日本人と子供ができて「タイ人ではないのが玉に傷だ」と言われる。

「国家間の友好関係」という政治的な理由のため、コボリと無理やり結婚させられたアンスマリンは、日本に領土を侵略され、同盟条約を結ばされたタイの状況と重なる。アンスマリンは日本人に反感を抱きつつ、困った時にはいつもコボリに助けを求めらう。これも、戦時中のタイの状況が反映されていると考えられる。つまり、日本は「侵略者」と見なされながらも、フランスに奪われたタイの旧領土を取り戻す際にはタイを援助しており、また、タイ

²⁵ 「メナムの残照」考」インターネット・ホームページ <http://kuruzou.zero-yen.com/sunset.htm>。(2010年10月28日参照)。

²⁶ ジャスミンという意味がある。タイ人にとって、ジャスミンとは、日本の桜と同様の存在で、また仏様にお供えする花輪を編む時の材料の一つとしても使われる。

は日本軍から大きな被害を受けることがなかった。これに対して、タイ人は日本軍とともに連合軍による空襲で被害を受けた。戦争を時間的・空間的に共有していたため、戦争に敗れた日本軍に対して、タイは同情するしかなかった。このようなタイと日本との関係が、アンスマリンとコボリの愛と憎しみに溢れた、複雑な関係として表現されているのである。

6 まとめ

戦時下の日本文学におけるタイの表象の特色は、岩崎栄『萬歳』、榊山潤「盤谷挿話」、高見順「高見順日記」など、徴用作家たちの言説に典型的に表われるように、ビルマなどのような前線とは対照的な後衛地としての側面にある。もちろん、榊山潤「航空部隊」やタイの作家たちが描くように、日本の同盟国であるタイは連合国によって襲撃される戦場でもあり、そうした一面も点景として表現される。しかし、徴用作家たちのテキストで前景化するの、レストラン、ダンス・ホール、ホテル、映画館、音楽、酒、女、そして、チャイヨーなどの〈癒し〉の空間であり、日タイ同盟を背景として、日本軍を歓迎し服従するタイの姿である。そうしたタイ表象の背景には、大東亜共栄圏を支える日本とアジアとの関係性のモデルである。つまり、「兄」である日本とその庇護や指導を受けるべき弟妹であるアジア諸国・諸地域という大衆的な次元で共有されていた関係性のモデルである。そうしたモデルは、岩崎栄『萬歳』や榊山潤「盤谷挿話」など徴用作家のテキストには、「兄」のような日本の軍人とその「妹」のようなタイの女性という組み合わせを通して、典型的なかたちで描かれている。

「兄」を歓迎する「妹」としてのタイは、なぜ「妹」なのだろうか。たとえば、松岡英夫『ビルマの話』（児童図書館出版社、1944年11月）の第1章「ビルマといふ國」には、「ビルマは、いはば、日本の幼い弟のやうな國です。兄としては、弟のことは隅から隅まで知つてゐて、何かと面倒をみてやらなければなりません」という表現がある。日本は「何かと面倒を見てやらなければ」ならない「兄」として自身を主体化し、庇護や指導の名のもとに擬似的な兄弟・兄妹関係を強いる戦時下のモデルが看取されよう²⁷。ここではビルマを「弟」として語っている。ビルマを「弟」とし、タイを「妹」として語るのは、戦時下における大東亜共栄圏についての同じ言説モデルの投影だとしても、両者の表象の結び方には、何の違ひもないのだろうか。「弟」と「妹」は、入れ替えてもかまわない性格のものであろうか。

タイについては、チェップやパパイが、「弟」ではなく、やはり「妹」のような娘であったことには理由があるように思われる。ひとつには、タイがビルマのような前線ではなく、後衛の〈癒し〉の空間として表現されていたことと関係していよう。『萬歳』や「盤谷挿話」の「妹」のような娘たちは、もちろん文字通りの妹ではなく、恋人の一面を兼ねたような存在でもある。その存在は、レストラン、ダンス・ホール、ホテル、映画館、音楽、酒などによる異国タイの中心に位置するのにふさわしい。ただし、チェップやパパイは文字通りの恋人でもなく、「妹」のような娘という性格を失わない。それは異国で戦う兵士にとって、故郷

²⁷ 松本常彦「『ビルマの堅琴』以前」（松本常彦・大島明秀編『九州という思想』花書院、2007年3月）

に残してきた庇護すべき存在、母や妹や娘などの女性たちの代理的な表象でもあるだろう。日タイ同盟を結び、「チャイヨー」と叫ぶタイが、女性性を前景化するかたちで表象される理由のひとつは、その点に求められる。チェップやパイが、「妹」のようでもあり、恋人のようでもあるのは、庇護すべき存在としての女性なるものを代表しているからである。

興味深いのは、戦後のタイの作家が、戦時下において徴用作家たちが用いた日本軍人とタイ人女性のロマンスのパターンを使用している点である。日本の戦争犯罪が問われる戦後において、戦時下の日本の軍人と自国の女性を主人公として、その二人のロマンスを理想化されたかたちで描くというのは、タイ以外には例を求めにくいのではないだろうか。しかも、その作品『メナムの残照』は、小説としてのみならず、テレビドラマ、映画、ミュージカルなど種々のメディアを通して広く受容され、人気も根強いために、それぞれの分野で、くりかえしリメイクされている。こうした受容のあり方も、アジアの他の国家や地域では想像しにくい事態であろう。こうした受容のあり方が示唆するのは、『メナムの残照』における日本軍人とタイの女性という組み合わせが、特殊例外的なものというより、そういう組み合わせを受容する土壌の存在ということであろう。そうした土壌を形成する、ひとつの水脈として徴用作家たちが描いたタイ表象を再考してみる必要があるだろう。

ただし、それは単純な反復ではない。『メナムの残照』におけるタイの女性（アンスマリン）は愛国的で、それゆえ、反日感情を持っていたし、日本人の主人公（コボリ）も、例外的な日本人という一面が強調され、タイ人の期待にそのような変形された日本人となっている。このコボリに対するアンスマリンの葛藤には、戦時下に表明できなかった日タイ関係が再現されているようにも見える。また、『メナムの残照』は、1990年代になってもテレビドラマ化され、タイの国民的スターであるトンチャイ・マックインタイが「コボリ」を演じたこともあって、大ブームを巻き起こした。たとえば、そういう現象を戦時下の記憶だけで解釈するのは、明らかに一面的でしかない。テレビドラマ化も映画化も1970年代以降のことである。その当時の日本は、敗戦国から、いわゆる高度経済成長を遂げ、アメリカ合衆国を追う経済大国になっていた。自立的で反日的なアンスマリンが、タイ人にやさしい日本人コボリとの間に繰り広げられる葛藤に満ちた愛憎劇は、戦後復興と高度経済成長を遂げ、戦前と同じように、経済や文化を通じて、再びタイに上陸してきた経済大国日本への愛憎や葛藤を二重写しにするものとして受容されているのではないか。つまり、『メナムの残照』は戦時下の徴用作家たちが描写したタイと経済的成長を遂げた日本に対するタイの側からのまなざしが合流する場所になっている。

政府は投資奨励委員会を一九五九年に設置し、外資進出の際のタイ側の受け皿とした。また産業投資奨励法も改定し、外資に魅力的な環境をつくり出した。この結果、タイに進出する外国企業は増加し、タイの輸入代替型の工業化が進展することになった。（中略）一九六〇年代だけで日系企業を中心に八社がタイに進出した。この結果、一九六一年のタイにおける自動車組立台数は五二五台に過ぎなかったが、一九六八年には一万四

〇〇〇台にまで増加した。(柿崎一郎『物語 タイの歴史 微笑みの国の真実』中公新書、2007年9月)

こうした経済状況の中で、1967年に発表され、1970年にドラマ化された『メナムの残照』におけるタイ人にやさしい、理想的な日本人としてのコボリのイメージはタイ人の日本人に対する好感度を上げ、「外資に魅力的な環境をつくり出」すために生成されたと考えられる。1960年代の日本企業の急激な進出による日本商品の氾濫と、対日貿易赤字の拡大はタイ人の日本に対する不満をもたらし、1972年の反日運動の原因となった。興味深いのは反日運動の翌年、『メナムの残照』は映画化され、好評を得ている点である²⁸。こうした現象によって、日本とタイの経済的關係が復活が可能となっただけではなく、現在まで日本人による戦争や経済進出に対するタイ人の反日感情が薄らいだと考えられる。

²⁸ กิเลน ประลองเชิง. (2556, 29 สิงหาคม). ตูกรม 1. ไทยรัฐ. เข้าถึงได้จาก <http://www.thairath.co.th/column/pol/chuckthong/338933> (วันที่ค้นข้อมูล 29 สิงหาคม 2556) (2013年8月29日参照)

第5章

1970-1980年代のミステリー小説におけるタイ

1 はじめに

第二次世界大戦後、第1章で述べたように、タイは戦時中の反日組織「自由タイ運動」によって「敗戦国」という扱いを免れ、戦時中は同盟国であった日本との関係はしばらく断絶した。その代わりに、アメリカとの関係が良好となり、アメリカによる様々な支援を受けた。1967年、ベトナム戦争に従軍するアメリカ軍兵士がタイで休暇を過ごすため、タイ政府はアメリカ軍と「レスト・アンド・レクリエーション」条約を締結する。条約の締結に伴い、タイの首都バンコクは急速に発展したが、一方で娯楽施設や性産業などの施設も増加し、そのためタイは「セックスパラダイス」と呼ばれるようになる。また、1974年に公開された映画007シリーズ「黄金銃を持つ男」(The Man with the Golden Gun)はタイが舞台となっており、人気映画の舞台としてタイは広く海外に紹介された。観光の面だけではなく、1960年代以降は再び国交が回復してから、日本企業の海外進出のため、多くの日本人がタイを訪れた。それと関連してタイの旅行記や、小説なども多く執筆されるようになった。1960年代以降のタイを舞台とした日本文学において、例えば、三島由紀夫『暁の寺』(「新潮」1968年9月-1970年4月)について、久保田裕子は「高度に資本主義化された〈日本〉というイメージとして表象されている。またジャントラパー姫は「肉の厚いシヤム薔薇」として、女性ジェンダー化されたタイのイメージ表象を体現した存在であるが、本多は彼女に託して、タイを異性愛のまなざしのもとに女性ジェンダーとして固定化し、審美的対象として見ている」¹と指摘している。女性ジェンダーやセクシュアリティと結びつけるタイの表象は、1980年-2000年代のタイを舞台にした日本のロマンス小説にも見られる。メータセート・ナムティップは五つのロマンス小説²を取り上げて、次のように分析している。

訪れた日本人旅行者の目には南国タイは「性的な期待」「倦むことなき官能性、あくことなき欲望」を挑発する場所で、日本本土ではもちえない「性的体験」を誘発する場所として映っている。また、1970年代から主要産業となった観光業とともに発展した性風俗産業によって、「セックス天国」としてのイメージが外国人旅行者にとって、タ

¹ 久保田裕子「近代日本における〈タイ〉イメージ表象の系譜——昭和10年代の〈南洋〉へのまなざし——」(「立命館言語文化研究」2010年1月)

² 宮本輝『愉楽の園』(初出:「文藝春秋」1986年5月-1988年3月)、嵐山光三郎「蘭の皮膜」(小説新潮、1989年8月)、山田詠美「天国の右手」(『贅沢な恋人たち』幻冬舎、1994年4月)、佐藤亜有子『ボディ・レンタル』(初出:「文藝」1996年冬季号)、辻仁成『サヨナライツカ』(初刊:世界文化社、2001年1月)がある。

イ社会の固定イメージとなっていることは否めない。(メータセート・ナムティップ「日本文学にみるタイ表象——オリエンタリズムのまなざしから観光のまなざしへ——」
「立命館言語文化研究」2010年1月)

ロマンス小説におけるタイは基本的には「セックス天国」として官能的な表象が焦点化され、前景化されている。これについて、第1章の「読売新聞」や第2章の旅行記においても、〈買春街〉としてのタイは繰り返し書かれていた。つまり、官能的なタイは1960年代の日本人の関心を引く話題なのである。しかし「読売新聞」や旅行記によれば、戦後のタイは「セックス天国」だけでなく、政治的不安定や様々な社会問題を抱えた犯罪都市と見なされた。こうした背景により、タイは1970年代から1980年代にかけてミステリー小説の舞台としてよく使われている。例えば、西東登『蟻の木の下で』（講談社、1976年7月）、山本恵三『新・黄金の三角地帯』（スポニチ出版、1980年10月）、谷恒生「一人っきりの戦場」（「小説推理」1980年7月・8月）、胡桃沢耕史「ロン・コン」（「問題小説」1980年5月）、胡桃沢耕史「ロン・コン PART II」（「問題小説」1980年12月）、中村敦夫『チェンマイの首：愛は死の匂い』（講談社文庫、1983年8月）、谷克二『蒼き火焰樹』（徳間書店、1988年12月）、和久峻三「山田長政の秘宝 シャム日本人町の超人」（「野性時代」1986年8月～11月）、山本恵三『黒き魔境を撃て』（廣済堂文庫、1988年1月）、中津文彦「バンコク狙撃指令」（「野性時代」1990年1月～3月）などがある。

ミステリー小説には「かくれた秘密の捜査と発見」という本質があり、「ハードボイルド探偵小説、スパイ小説、ゴシック・ロマンス、犯罪スリラーなど」³の様々なジャンルが含まれている。また、ミステリー小説は社会現象と深く関わっている。これについて内田隆三は次のように述べている。

探偵小説という物語の内部に起こっている出来事と大都市という現実が起こっている出来事とのあいだに素朴な因果関係を設定しているからである。それは物語の空間と現実の空間をごく安易な仕方ですなげしてしまうことになる。われわれとしてはそこで立ち止まるのではなく、探偵小説に起こっている不安なたわむれを、探偵小説を構成するディスクールそのものから理解するべきだろう。(内田隆三『探偵小説の社会学』岩波書店、2001年1月)

大衆に読まれるミステリー小説では「大都市という現実が起こっている出来事」が設定されているため、1970-1980年代のタイを舞台としたミステリー小説では、当時の日本人が関心を持つタイに関する出来事や言説を基にストーリーが生成されたのである。このように、ミステリー小説は第1部で取り上げたメディアとの影響関係が大きい。一方、ミステリー小説で「物語の内部に起こっている出来事」という要素によってミステリー小説な

³ J.G.カウエルティ『冒険小説・ミステリー・ロマンス』（研究社出版、1984年10月）

りにそれぞれの個別のタイの表象が生成されると考えられる。これらのミステリー小説は、どのようにタイの社会問題に触れ、タイの社会の現実を描いているのか。また、タイの社会問題を反映したミステリー小説では、読者にどのようなタイがイメージ化されるのか、という問題を通して現代日本文学におけるタイ表象を検討することが本章の目的である。

2 太平洋戦争の記憶

太平洋戦争中、東南アジア地域が日本軍に占領される中、タイはアジアで唯一の日本の同盟国となっていた。戦時中の南方徴用作家たちが描いたタイは日本軍にとって、ビルマの戦線とは対照的に、レストラン、ダンス・ホール、ホテル、映画館、音楽、酒、女などの〈癒し〉の空間である。しかし〈癒し〉の空間とされる一方で、日本軍を歓迎し服従するタイの姿は「大東亜共栄圏を支える日本とアジアとの関係性のモデル」⁴り、「兄」である日本とその庇護や指導を受けるべき「妹」のようなタイという組み合わせは、形式的には共和を唱えつつ、実態としては支配／被支配の関係にある日本とアジアとの関係を象徴的に示している。タイは「日タイ同盟条約」を結んでも、日本の植民地のように支配されて圧力をかけられたのである。

ところで、1970代から1980年代にかけて、インドシナの諸国が共産主義化していく状況の中で、タイは民主主義陣営としてインドシナの中心地となり、隣国のラオスやベトナムなどからの避難民が多く流入した。また、インドシナへの玄関口として海外からの投資が増加した。伴野朗『陽はメコンに沈む』（講談社、1977年3月）は、当時のインドシナについて「サイゴンで急進派仏教徒が反政府デモ。メコンデルタで戦闘激化。カンボジア政府軍、共産ゲリラを掃討。ジャール平原のパテト・ラオ（ラオス：タナポーン注）軍拠点を米軍機爆撃」と記し、タイをラオスと比べ「田舎から大都会へ出て来た感があり」、「人の多さ、車の数に圧倒された。街の賑わいも比較にならなかった」と述べている。内戦とは無縁のタイには1970～80年代に多くの観光客が訪れたことも一因となり、タイを舞台にした小説は他のインドシナの国より多く刊行されていると考えられる。

タイを舞台にした小説の特徴の一つは物語の中で太平洋戦争への言及がなされていることである。例えば、『山田長政の秘宝 シャム日本人町の超人』の時代設定は80年代だが、物語の内容は第二次世界大戦中タイ国に駐留していた日本軍が掘り返した財宝探しと殺人事件に関する生首の謎についての話である。興味深いのは、『山田長政の秘宝 シャム日本人町の超人』以外、戦争の背景を描写している他のタイを舞台にしたミステリー小説では、戦時中タイ国駐屯軍参謀の「辻政信」への言及が共通して見られる点である。

辻政信は、戦後にイギリス軍の戦犯追及から逃れるために、自身は戦死したことにして

⁴ Treeratsakulchai Thanabhorn 「南方徴用作家の〈タイ〉——太平洋戦争下の日タイ表象——」（『九大日文』19号、2012年3月）

司令部から脱走して僧侶になり⁵、中国を經由して日本に帰国した。その後、辻は戦犯逃亡の体験を基に『潜行三千里』（毎日新聞社、1950年6月）を執筆した。『潜行三千里』は「幸いご好評をいただき、たびたび版を重ねてまいりましたほか、海外でも英語・フランス語・タイ語・中国語に翻訳出版され」⁶た。1961年、辻は東南アジアの視察を目的としてバンコク経由でラオスに向かい、そこで消息を絶った。辻政信失踪については「東北ラオスでの病死、事故死、他殺説を筆頭に、ハノイ潜入説、雲南省で死亡説、さてはビルマ国境の秘密結社に監禁されているといった情報が乱れとん」⁷で、今までもまだ謎に包まれている。辻政信の失踪は当時の日本人に注目されたため、辻政信の失踪についての文献や、小説、例えば、伴野朗『陽はメコンに沈む』（講談社、1980年10月）などが多く刊行された。例えば、『蟻の木の下の』の「淵上軍曹」という登場人物は、辻政信と同じ石川県の出身であり、同様に自身は戦争で戦死したことにして、秘密裏に日本に帰国している。しかし「淵上軍曹」はタイ人女性を犯したり、「無辜の良民を射殺し」、「タイ国人といえども許されなかった」と描写され、アジア諸国に非道的なことを行った戦時中の日本軍兵士の象徴として描かれていると考えられる。一方、『新・黄金の三角地帯』でも辻政信が登場人物として登場している。それは次のようである。

天野京三は国夫に驚くべき仕事を依頼してきた。昭和三十六年、ラオスのビエンチャン北方百二十キロ付近で忽然と消息を絶った実戦の神様と言われた旧日本軍陸参謀で元参議院議員辻政信を黄金の三角地帯で探してくれということだった。

辻は第二次大戦中自分の戦場でもあった黄金の三角地帯で僧侶に変装して数十万とも言われる日本軍戦死者の遺骨を収集し、手厚く吊っているという噂だった。黄金の三角地帯は白骨街道と呼ばれる位、ビルマ戦争から敗走していた日本軍の殆どが飢えと病いで死んでいった処でもあった。（『新・黄金の三角地帯』スポニチ出版、1980年10月）

以上のように、『新・黄金の三角地帯』では辻の失踪の理由は黄金の三角地帯で日本軍戦死者の遺骨を収集するためとされ、『蟻の木の下の』の淵上とは『新・黄金の三角地帯』の辻と全く異なる描写がなされている。また『黒き魔境を撃て』でも、『新・黄金の三角地帯』の辻のように、戦死者の霊を慰めるため黄金の三角地帯で自分で彫った仏像を一体ずつ建てて歩く旧日本兵の小山の描写もある。このように、辻政信のイメージは『黒き魔境を撃て』のように清廉潔白なイメージがある一方、『蟻の木の下の』のような悪魔的なイメージもある。ビルマの戦争やラオスで失踪事件を連想させる辻政信は、なぜタイを舞台としたミステリー小説の中で繰り返し語られるのだろうか。

辻や辻のような登場人物が登場するミステリー小説を見ると、全てタイのビルマやラオスの国境地域を舞台にしている。タイ・ビルマ・ラオスの国境は1980年代に世界最大の麻

⁵ 中村明人『ほとけの司令官 駐タイ回想録』（日本週報社、1958年6月）

⁶ 辻正信「新装版まえがき」（『潜行三千里』図書刊行会、1978年10月）

⁷ 「[海外トピック] 辻政信氏消えて5年 ラオス 現地も大勢は死亡説」（『読売新聞』、1966年5月28日、夕刊）

薬・覚醒剤密造地帯で凶悪犯罪が多発する地域として知られた「黄金の三角地帯」である。

「黄金の三角地帯」は「タイ側から見物できるだけの場所」⁸のため、「タイ北部山岳地帯一体に広がるケシ畑、ひいては阿片の産地という意味合いが含まれている」⁹。タイの一部としての「黄金の三角地帯」は、麻薬生産地や暗黒地帯として描写されるが、当時は多く観光客が訪れる観光地¹⁰として知られていた。

終戦後、日本軍は連合軍の追撃によりビルマから国境のジャングルを越えて、タイ側に逃れたが、多くの日本軍の兵士は密林の中で降り続く雨の中で傷つき疲れ果て、敵の猛追、飢え、病などに苦しみ、タイまで辿り着くことなく、密林の中で死んでいった。1974年10月25日に「ビルマ戦友会」のメンバーが「チェンマイ西北部、ビルマ国境近くのメイホンソン（チェンマイの近くにある県：タナポーン注）」¹¹へ元日本兵の遺骨を収集しにいった。また、1977年には「タイ日本人戦没者遺骨調査団」がチェンマイで遺骨調査を行い¹²、翌年2月に23人の「政府派遣タイ国戦没者第一次遺骨取集団」として「タイ北部ビルマ国境を中心にした取集作業を完了、千二百八十六柱をバンコクに持ち帰った」¹³。この遺骨収集活動は「NHK特派員報告 33年目の遺骨収集 ～タイ・ビルマ国境～」として1978年2月28日に放送された。しかし、遺骨収集の記事には、「黄金の三角地帯」は遺骨収集の場所として全く言及されていない。1970年代の新聞記事¹⁴を調べると、「黄金の三角地帯」という言葉は1972年8月から使用されている。つまり、戦時下に日本軍が展開した地域が後の「黄金の三角地帯」と重なるとしても、戦時下において「黄金の三角地帯」などと呼ぶ呼称はなかった。したがって遺骨収集の記事に「黄金の三角地帯」という呼称が用いられないのは当然である。ところが、タイを舞台とする一連のミステリー小説においては、あたかも戦時下においても「黄金の三角地帯」が戦場であったかのような記述になっている。ミステリー小説のそのような傾向の背景や理由について、どのように考えるべきであろうか。

麻薬の産地として知られた「黄金の三角地帯」がミステリー小説の舞台として選ばれたことは疑いはない。しかし、黄金の三角地帯が戦場になったような描写は、〈タイとミャンマーの国境〉という要素が、太平洋戦争末期ビルマから撤退した多数の日本兵が死亡した〈タイとミャンマーの国境〉と重なっているため、黄金の三角地帯と戦場を結びつけ描かれたのではないだろうか。こうした描写によって、読者は戦時の危険なジャングルである〈タイとミャンマーの国境〉のイメージから、想像し難い黄金の三角地帯のイメージを生成するこ

⁸ 戸田杏子、佐藤彰著「ゴールデン・トライアングル」『タイ楽しみ図鑑』（新潮社、1990年5月）

⁹ 『地球の歩き方 タイ——やすらかなる国 ’88～’89版』（ダイヤモンド社、1988年4月）

¹⁰ 『地球の歩き方 タイ——やすらかなる国 ’88～’89版』（ダイヤモンド社、1988年4月）によれば、80年代の黄金の三角地帯について「旅行者が多く、中には大型バスを乗りつけて来る団体さんもいる。数年前まで、1軒だけだったみやげ屋も、今では道の両脇にずら～と並んでいる。おまけに、ゲストハウスも5軒ある。メコン川対岸は、ミャンマー側とも、ただただジャングルが見えるばかりだ」と述べている。

¹¹ 「遺骨五百片故国へ タイ北部で戦友会収集」（『読売新聞』1974年11月6日、夕刊）

¹² 「遺骨九百柱を確認」（『朝日新聞』1977年11月24日、朝刊）

¹³ 「旧日本軍傷病兵の遺骨 千二百余柱を収集」（『朝日新聞』1978年2月7日、夕刊）

¹⁴ 「アジアにもマフィアの“黒手”」（『読売新聞』1972年8月19日、夕刊）、「麻薬ルート タイが撲滅に全力」（『朝日新聞』1972年8月11日、朝刊）

とができる。戦場であったような黄金の三角地帯の描写以外、多くの小説テキストには戦争で生き残った日本人がタイで生きる姿が描写されている。例えば、『蟻の木の下で』の淵上は麻薬密輸業者になり、『一人っきりの戦場』の旧日本兵の中村はビルマ戦線から脱走して「タイ人になりすましてメソットに住み」、「売春窟のかたわら、麻薬、宝石などの密売を」手がけるようになった。また、「ロン・コン PART II 《母の河(メコン)に眠れ》」を見れば、バンコクで阿片商として生きる旧日本兵が登場し、さらに『バンコク狙撃指令』でも、旧日本兵のガーモン・クネインと陣開明がバンコクで狙撃手として活躍している。これらの登場人物の共通点は、戦時中に脱走したり、除隊してアメリカの諜報機関に参加するなど、兵士としては失格とされた者たちであるという点である。戦後に改名した彼らは、日本人とは異なる存在としてタイで違法行為を行い、金銭を得ている。このように、戦後のタイは墮落した日本人や、悪人が住むカオス空間として表象されている。

3 〈癒しの空間〉から〈危険な空間〉へ

戦後において、インドシナ諸国は様々な政治的問題や社会問題を抱えていた。インドシナを舞台にしたミステリー小説（例えば、柘植久慶『グリーンベレーの挽歌』集英社、1986年12月）ではインドシナ戦争（ベトナム戦争、ラオス内戦など）を背景にしている。同様に、当時のタイも政治的に安定していたとは言い難く、1970年代に知識人や学生などが中心となり、社会運動が起っていた。

1971年にタノム（当時の首相）・クーデターが発生し、1973年10月には、タノム軍事独裁政権に反対する学生運動が展開された。この事件による死者は77名で、行方不明者は444名に達し、その結果、タノムは海外へ亡命した。この事件は後に「血の日曜日」と呼ばれた。そして、3年後（1976年）海外に亡命していたタノムが帰国すると聞いた学生たちは、タノムの国外退去を求めるため再び学生運動を行った。

クーデターの起きた十月六日の午前二時頃から右派勢力と学生との銃撃戦が始まり、国境警備隊が動員され、その銃撃に参加するようになり右派勢力は優勢となり、右派勢力は暴徒と化して、学生を殴り殺し、死体を木に吊して椅子で乱打したり、死体をひきずって歩いたり、気絶している学生を路上で焼き殺すといった凄惨な光景がタマサート大学周辺で展開した。結局、死者四一名、負傷者一六七名、逮捕者三〇七一名を出して、学生の革新的勢力は潰滅している。（田中忠治「タイ十月学生決起——軍事政権の崩壊」『タイ入門』日中出版、1988年1月）

この事件によって、学生運動に参加した学生は、警察に共産主義者であると決め付けられ逮捕された。また、共産党に入党する意思はなかったが、警察の追跡から逃れるため、知識人や学生たちはタイ国共産党との接触を求めてジャングルに潜行した。こうして1970

年代後半タイ国共産党の勢力は拡大していった。この二つのクーデターは当時の日本の新聞¹⁵でも数日間報じられ、日本人にも知られている。ミステリー小説でもこれらの学生運動事件を取上げている。特に、学生の「死体を木に吊して椅子で乱打」する事件は『チェンマイの首:愛は死の匂い』で次のように描かれている。

「(前略) 一九七六年、わたしは高校三年だった。タマサート大学の事件で、大学生の恋人が殺されたの。学生が全部逃げた後、わたしは一人で構内に駆け込んだの。あたり一面が血の海だった。四人の学生が焼き殺されていた。眼玉をくり抜かれた若者もいたわ。やっと、わたしはあの人を見つけた。運動場のサッカー・ゴールの木に吊されて死んだあの人頭を、奴らが折りたたみ椅子で代る代る殴りつけていた。

わたしはその場で気を失ったわ……」(『チェンマイの首:愛は死の匂い』講談社文庫、1983年8月)

『チェンマイの首:愛は死の匂い』以外、『新・黄金の三角地帯』、『バンコク狙撃指令』、『一人っきりの戦場』、『黒き魔境を撃て』、『蒼き火焰樹』などもタイの不安定な政治状況を物語のプロットとして取上げている。このようなタイの政治的混乱は、同時代のタイを舞台とする小説の一般的光景として反復され、日本の読者に危険なタイのイメージを与える一面を持った。市民を守るべき政府の警官隊や兵隊が、学生を大量虐殺する場面からは、国内状況の不安定さによって、政府から〈安全の保障されていないタイ〉のイメージが作り出される。こうした政治的な不安定さや無秩序さの別の面での表象として、小説テキストでよく描写されているのはタイの麻薬の問題である。

バンコクは、アジアでは香港に次いで多くの麻薬患者を抱えている。東洋では香港と二つしかないといわれる麻薬中毒患者専用の病院まである。タニヤラック麻薬病院である。如何に麻薬患者が多いか、これからも想像できる。このタニヤラック麻薬病院の院長は、バンコクの麻薬中毒患者の一番多い時は五十万人を超えたといっている。

タイ、ラオス、ビルマの三国国境地帯、いわゆる黄金の三角地帯で採れるアヘンから生産されるヘロインは、バンコクを基地として世界中に流れていく。世界の麻薬中毒患者が使用する麻薬の約七割を供給しているともいわれている。(『新・黄金の三角地帯』スポニチ出版、1980年10月)

このような麻薬の問題は、タイを舞台にした小説だけではなく、インドシナ諸国を舞台にした小説にも描かれている。しかし引用文にもあるように、タイは世界の「麻薬の大産地」として知られていたため、他のインドシナ諸国より麻薬の問題が繰り返し描かれてい

¹⁵ 例えば、1976年10月7日「朝日新聞」(朝刊・夕刊)の一頁ではタイのクーデターの記事が掲載されている。そのクーデターについて同年12月まで60記事以上連続して報じている。

る。特に、1970年代から1980年代にかけて麻薬のルートとして知られた黄金の三角地帯は日本人の関心を引き、鄭仁和『幻のアヘン軍団——黄金の三角地帯にその影を追う』（朝日ソノラマ、1977年3月）や、竹田遼『黄金の三角地帯: ゴールデン・トライアングル』（めこん、1977年9月）など黄金の三角地帯についてのノンフィクションやルポルタージュが多く刊行され、70-80年代のミステリー小説の参考文献として利用された。例えば『チェンマイの首: 愛は死の匂い』を執筆するため、中村敦夫は一ヵ月間タイで取材を行っただけでなく、「主な参考文献」で様々な文献¹⁶を物的証拠や根拠として読者に示しながら、「あとがき」で「この小説の描写は、物語と登場人物以外、すべて私の目撃した事実である」と述べている。その上で、中村は「暴力団が介在するような利権は、すべて警察が握っている」ため、「警官によるゆすりたかりも珍しいことではない」などと自らが「目撃した事実」としてタイの裏面を読者に提供する。

その他に、タイの政治不安や犯罪の横行というイメージを主張する要素としては、性に関する記述がある。具体的には、買春観光とそれに伴う人身売買の記述である。1970年代、バンコクは急成長を遂げ、娯楽施設や性産業などに関する施設も増加していった。特に、日本人男性による買春旅行が広く行われた。買春旅行は「旅行のハイライト」¹⁷であり、日本旅行会社が送り出した団体客の現地オプションツアーで「カラオケ+夕食」¹⁸という暗号で買春を提供していた。1987年7月6日の「朝日新聞」ではバンコクのホテルマンによって「以前は¹⁹、二百人の日本人男性が三泊四日でここに来ると、三百人（延べ）が女性のところに行った」²⁰という日本人旅行者の買春ツアーの実態が述べられている。こうした実態は小説にも積極的に導入され、『一人っきりの戦場』でも次のように描かれている。

タイは何より観光に力を入れている。王宮やフローティングマーケットやアユティヤの遺跡などの名所ではない。観光とは歓楽街、枝路地にひしめき合う酒場やトルコ風呂で働くおびただしい女たちを意味しているのだ。（『一人っきりの戦場』集英社、1980年9月）

日本人から見たタイは「酒場やトルコ風呂で働くおびただしい女たち」がいる空間である。このようなイメージが膨大な言説となって語られるようになったきっかけが、第1章で述べたように、1973年のカマモト事件である。カマモトは1966年にチェンマイに家を購

¹⁶ 「主な参考文献」としては、例えば、鄭仁和『幻のアヘン軍団』（朝日ソノラマ、1977年3月）、プレイヤー・アヌマーンラーチャトン『タイ民衆の生活』日タイ協会、1982年7月）、アバイ・ポテパット『タイ 変革の胎動』（第三書館、1980年6月）などがある。

¹⁷ 楠本憲吉「東南アジア紀行」『中国/東南アジア 新編 世界の旅1』（小学館、1971年10月）

¹⁸ 旅行会社を営む関泉氏は「まさか『買春手数料』などと記すわけにもいかないので、あたりさわりのない表現にしたのです。私が問題提起したいのは、日本旅行が団体客に買春を斡旋しているばかりか、その料金から手数料を徴収していることです。れっきとした一流旅行会社が、買春の手数料で稼いでいる（後略）」と述べている。（安田浩一「買春ツアー」がバレた日本旅行の“厚顔無恥”「財界展望」2006年9月）

¹⁹ 買春ツアーは世界中に不道德行為と見なされて非難されたため、1980年代に禁止された。

²⁰ 「減った？日本人買春ツアー バンコクに見る」（「朝日新聞」1987年7月6日、朝刊）

入し、1970年からタイ人の少女たちを買って、一人一ヶ月 500 バーツを支払って、少女たちとハーレム生活を始めた。しかし、1973年にカマモトは麻薬、覚せい剤密輸組織との関係と、人身売買の疑いで逮捕される。当時の新聞記事ではこの事件について次のように述べられている。

(前略) 九日の「バンコク・ポスト」「ネーション」両紙が報じたところによると、八日、タイ北部のチェンマイで、一日本人が“少女の人身売買”の容疑で逮捕された。これによると、チェンマイ県警察は、同県のムアン都に住む陶器商カマモト(またはタマモト)・トシオ(三八)を、八日朝、自宅で逮捕し、取り調べている。

警察当局によると、カマモトの家から、十三歳から十七歳までの少女七人が発見された。カマモトは、これらの少女を一万一五万バーツ(約十五万円一七十四万円)で自分の妻として買ったと自供しているが、警察当局では、カマモトが香港その他にタイ女性を“輸出”するための人身売買を行っていたものとの傍証を得、同人を追及している。
(「ひどい日本人」逮捕 タイで少女を人身売買「読売新聞」1973年1月9日、夕刊)

カマモト事件は「チェンマイ事件」として知られ、1970-1980年代のミステリー小説の中でも言及されている。例えば『一人っきりの戦場』ではカマモト事件に直接触れていないが、タイの北部でハーレムのように少女に囲まれて暮らしている中村老人という登場人物がカマモトをモデルとして描かれたと推測できる。『黒き魔境を撃て』でも「チェンマイで数人の十代の娘を嫁にしている」など、カマモト事件を連想させる記述がある。また、「ロン・コン《母の河(メコン)で唄え》」には「東南アジア一帯で一番有名な日本人はタマモト氏」で、彼がハーレムを作ったチェンマイに行くため、師匠は「三万円払って申し込んでおいた」という記述がある。このように、チェンマイ(あるいはタイ)は観光地としてよりは、カマモトがハーレムを作った場所として知られることになり、カマモト事件によってタイの「女性天国」の表象はさらに強化されたのである。

こうした性的空間の表象は、はたして戦時下における〈癒し〉の空間の表象と無関係であらうか。チェンマイ事件を特殊で例外的な事件として言及するのではなく、むしろ、形通りに反復する日本の小説のありようからすれば、〈癒し〉の空間を繰り返し前景化し、表象の上で、そのような表象を強制した大日本帝国以来の文学の〈伝統〉を1970-1980年代においても受け継いでいると言うべきではないだろうか。ただ、戦時下とは異なり、戦後に様々な政治的問題や社会問題を抱えたタイは、前述のようなカオス空間として表現されることになった。また、戦前や戦時中のテクストの舞台はバンコクが多いが、戦後のテクストではチェンマイを舞台にすることが多い。それは、世界の麻薬生産地である黄金の三角地帯の近く、カマモトハーレムなどがあるチェンマイは、性の誘惑や刺激が待ち受ける場所であり、主人公たちの男性らしさに対する攻撃が仕掛けられているのである。

4 救われる女性たち

ミステリー小説の中での日本人男性の主人公たちはタイの様々な地方に行き、原住民と触れ合いながら、事件の真相を明らかにしていく。ミステリー小説の原住民たちは主人公の通訳であり、随行者であり、パズルを正解へと導く重要な役割を果たしている。興味深いのはそのような役割を担っている原住民は多くの場合女性であるという点である。例えば『黒き魔境を撃て』で耕造と行動を共にし、日本人女性誘拐事件の捜査を手助けをするアンジイや、『一人っきりの戦場』で萩尾を様々な事件に巻き込むランワンなどである。彼女たちは日本人たちをタイへ導く随行者である以外、日本人との性の対象としても描かれている。

「この国の女性は生きている夫には日本の女性なんかより遥かに優しく尽くしてくれます。しかし、どんなに夫を思っていたとしても一旦、相手が死んでしまえば、カラリと忘れるんです。人間は、死ねば皆、仏になって幸せになると信じているから、少しも哀しまないんです。そのかわり、生きている間は、年齢など全く気にしないで優しくしてくれるんです。」(『黒き魔境を撃て』廣済堂文庫、1988年1月)

この引用には、日本人男性が理想化しつつ一般化したタイ人女性のイメージが典型的に示されている。ただし、そのタイ人女性の〈優しさ〉は、テキストの中では性サービスとかかわる女性や、性的欲求が強い女性を介して描かれる。例えば、『チェンマイの首:愛は死の匂い』での「好みの相手を選」ぶタイ人ホステスのリーは「勝手に堂田のホテルへ押しかけ」てくる。また、『新・黄金の三角地帯』での17歳のアサナは「脚が国夫の膝の上に乗ってきた。手は胸の上に置かれた。縋り付くように国夫へ体を擦りよせてき」、主人公を誘惑する。〈性的挑発者〉としてのタイ人女性の「想像できない程成熟した」「小麦色に日焼けした脚。つやのある肌。小さな黒い茂み」(『新・黄金の三角地帯』)などの描写は、「日本の女性なんかより遥かに優しく尽くしてくれ」るタイ人女性というイメージを形成し、こうしたイメージがミステリー小説を読む男性読者に受容されたのではないだろうか。そして、このようなステレオタイプ化されたタイ人女性のイメージが小説の主人公と同様の性的体験を目的とした日本人の男性をタイへ赴かせるのである。しかし興味深いのは、従順な態度で日本人男性の性的欲望を満たすイメージに反して、ミステリー小説におけるタイ人女性たちにはもう一つ意外な顔がある。

「あんたは顔に日本人をぶらさげて歩いてる。鏡に写してみるといいんだ。傲慢そのものの顔してるのがわかるよ。あんたは、あたしたちを哀れみ、同情し、金であたしたちの頬つぺたをひっぱたく日本のヒヒジジイに憤慨するだろう。その憤慨する気持が傲慢なんだ。いいかい、よくお聞き。あたしたちはね、好きで抱かれているんじゃない。お

金が欲しいから、触れると膿がでてきそうな爺さんの腹に組み敷かれるんだよ。爺さんは孫みたいな女の身体をなでさすり、満足して法外なチップをはずんでくれる。その方がうすっぺらな同情よりどれだけありがたいかshれないんだ」(『一人っきりの戦場』集英社、1980年9月)

『一人っきりの戦場』の冒頭では、タイ人女性の優しさを期待していた主人公の萩尾が、買春婦のランワンに現金やトラベルチェックやパスポートを盗み取られてしまう。タイ人女性に裏切られたことによって萩尾は「バンコクで女が鼻を鳴らしてすり寄ってきたら、その女は懐の金が狙いだったこと」(『一人っきりの戦場』)とタイ人女性を蔑視するようになる。こうした悪人としてのタイ人のイメージは、ミステリー小説だけではなく、第2章の旅行記『深夜特急』(1986年)や第3章の『王国への道 山田長政』(1984年)にも反映されている。しかし、ミステリー小説において、従順な態度で恋愛ビジネスのサービスをしたり、観光客のお金を騙し取ったりするタイ人女性の登場人物は「好きで抱かれている」のではなく、経済的な事情のために詐欺などの悪事を働いてしまう。このようなタイ人女性のイメージは小説テキストで繰り返し描写されている。例えば『チェンマイの首:愛は死の匂い』でも次のように描かれている。

女たちのほとんどはまだ十代か二十代前半で、例外なくタイ北部や東部の貧農の娘たちである。多くの少女たちが、親の借金返済や口べらしのため、バンコクの同郷の友人を頼って、汽車や長距離バス、トラックなどを乗りついでやってくる。昼は工場で働き、運と器量がよければこうしてホステスの職につける。女たちは、意味も分からぬ日本語の歌を必死に覚え、百曲以上歌える者も珍しくはない。(『チェンマイの首:愛は死の匂い』講談社文庫、1983年8月)

貧しいタイ人女性たちは「親の借金返済」のため、「昼は工場で働き」夜は身体を売り、「野良働き、狩猟、織物、家事の一切を女子が受け持つ」(『チェンマイの首:愛は死の匂い』)のである。同様に『一人っきりの戦場』でも「馬車うまのように働かなければなりません。家畜よりも身体を酷使し、痩せこけた肉体で春をひさ」ぐタイ人の女性が描かれている。〈悪〉と見なされている売春婦たちは裏では家族のために働き、また親孝行な娘などの日本人が好む〈美德〉を備えた女性として描かれている。一方、女性とは対照的に「酒、麻薬という悪魔に魂を売りわたし」(『一人っきりの戦場』)、「働かず、日夜阿片を吸うだけ」(『チェンマイの首:愛は死の匂い』)と、タイ人男性にはマイナスのイメージが投影されている。

陰湿に笑いながらソムサクがズボンをずり落とした。股間はすでに怒張し、吐く息が生まぐさかった。その怒張したものを少女の顔面におしつけた。少女は二、三度、首を振り、あきらめたように口に含みこんだ。

萩尾は正視できなかつた。後手縛られた少女がひざまずき、野獣のような大男の股間に顔を埋めている。それは、あまりにも残酷な光景だった。

「日本野郎、なんだその面は。俺たちは犬畜生だと思っていやがるのか」ソムサクがわめいた。悪鬼のような形相だった。(『一人っきりの戦場』集英社、1980年9月)

『一人っきりの戦場』のソムサクとその仲間は「けだもののように女たちを襲い、獣欲のおもむくままに凌辱」すると形容され、非人間的な動物のような性行為で女性をレイプする。また『黒き魔境を撃て』にも、女性の秘部に蛇を「半分ほど押しこんだところで尻尾のほうを噛み切り、噛み切られた蛇の軀は「秘部の中で全身の鱗を逆立てて必死に動き回る」という原住民の動物(アニマル)のような変態的な性行為が描写され、非難されている。しかし、実際には1970年代の日本人の買春ツアーが世界に知られ、セックス・アニマルと呼ばれていたのは日本人である。この言説に対抗するため、先進的な日本人の基準で原住民男性による残酷な性行為を非難して、「セックス・アニマル」という言説を原住民に押し付けるのである。そして、非人間的な蛮行を行う原住民男性から可愛そうな〈美德〉ある女性たちを救うために、ヒーローとしての日本人男性が登場するのである。

「(前略)あなたは十数年ほど前、チェンマイで数人の十代の娘を嫁にしているという
ことで、まるで色魔のようにマスコミで報道された男性のことを覚えていますか」

「もちろんです。俺も彼のことを色魔だと思った一人です」

「ところがその話はこっちへ来て全くでたらめであることが解ったんです。彼は、貧しい娘が可哀相で面倒を見てやっただけなんです。娘たちのほうが彼の好意に感謝して、彼のために何かしてやりたいと言って彼と一緒に生活するようになったんです。いまでも彼女たちは、その男性のことを心から愛しているそうです。こちらの女性は、日本人の感情の物差しで測ることはできません。ですから、たとえわたしがクン・サーの兵隊に殺されても、女房に哀しませることはならないです。それに、わたしが死んだら、生命保険の保険料は総て女房へ渡ることになっています。」(『黒き魔境を撃て』廣濟堂文庫、1988年1月)

以上のように、「貧し」くて「可哀相」なタイ人女性を救うため、ヒーローとして日本人男性はタイへ来て、タイ人女性の「面倒を見」る。そして、タイ人女性が日本人に感謝を示す行為としてセックスが描かれている。例えば『黒き魔境を撃て』のアンジイは、タイ人の警官の身体検査から助けてくれた耕造に身を任せる。タイ人女性の感謝の表現行為としてのセックスは、パターン化されている。日本人男性とタイ人女性との買春という〈不道徳〉な性サービスによる現実の関係が、小説では日本人男性の親切心への感謝による援助関係として書き換えられる。これらの文学テキストは、日本人男性による買春ツアーを前提に、ツアー客とは違う日本人の主人公を登場させながら、結果としてはよく似た行為

を美化する言説となっている。

5 ミステリー小説におけるタイ

ミステリー小説におけるタイは、王宮や寺院などの一般的な観光名所によって代表されるのではなく、政治の混迷や麻薬、買春などの様々な社会問題を抱え、犯罪が多発する〈危険な空間〉として描かれる。この危険な空間の中にやって来る日本人の登場人物たちを案内する随行者になるのはタイ人女性である。これらのタイ人女性はもちろん文字通りの随行者だけではなく、セックスの相手としての一面を兼ねた存在である。日本文学テキストの中でタイ人女性を取上げることは新しいことではない。戦時中のテキストをみれば、タイそのものに「庇護すべき存在としての女性」という表象が投影されている。日本の〈妹〉のような同盟国のタイを連合軍から「庇護」するという国際関係がそのまま小説の人間関係として描いている。こうした記述の形^{パターン}には、他者（タイ）をどのように対象化したいかという主体（日本）の欲望が表れている。そうした主体（日本）による対象化の欲望は、1970-1980年代のロマンス小説やミステリー小説にも典型的なかたちで現れているだろう。ロマンス小説は「「ロマンス」（恋愛・官能）の実践の場」²¹としてタイを描くが、「タイ人を性欲の対象と描くことはあっても、恋愛対象、すなわちヒーローまたはヒロイン格に描くものが極めて少ない」²²。ここには対象化への欲望の素朴な表れを見ることができる。その点では、ミステリー小説はやや違った要素がある。ミステリー小説では、ヒロインはタイ人女性である。ヒロインたちが性的サービスと関わるのはロマンス小説と同じであるが、ロマンス小説と違って、それだけで〈不道德〉や〈悪〉として片付けられることはない。むしろ彼女たちは貧困の中で苦心して働く面などの〈美德〉を兼ね備え、反対に働かず、怠惰なタイ人男性たちを非難し、〈悪〉とする。そして、これらのタイ人の男性から可哀そうなタイ人女性を「庇護」、あるいは「援助」するのがヒーローとしての日本人男性の使命なのである。他者（タイ）を性（男・女）によって非対称的（悪・善）に分割し、その一方（女）だけを「庇護」の対象にしようとする構造に、主体（日本）の欲望を認めることは、それほど困難ではないだろう。このような言説は、日本人による買春行為の美化に他ならない。つまり、一方で劣位化されたセックス・アニマルとして対象化しながら、もう一方で貧しい女性を厚意的に援助する存在として自己を主体化する。

六十五歳を過ぎて、日本から何千キロも離れた山の中で、孫のような妻と夢中になって蝶やカブト虫を追いかけている小山の心が、何となく解るような気がした。停年退職して、子供や妻に疎外され、自分の存在感を失って失意に満ちた日々を送っている日本の

²¹ メータセート・ナムティップ「日本文学にみるタイ表象——オリエンタリズムのまなざしから観光のまなざしへ——」
（「立命館言語文化研究」2010年1月）

²² 楠本憲吉「東南アジア紀行」『中国/東南アジア 新編 世界の旅 1』（小学館、1971年10月）

老人のことを考えれば、小山の生き方は老人の行き方の理想を示しているようであった。
（『黒き魔境を撃て』廣濟堂文庫、1988年1月）

65歳の小山が日本から離れた理由は「停年退職して、子供や妻に疎外され、自分の存在感を失っ」たからである。しかし、タイに来てから「孫のような妻」に「優しく尽く」されたため、疎外された存在意義を取り戻すことができた。日本人の買春観光で置き換えると、経済力で女を買うことや、タイ人女性に従順な態度で歓迎されることによって、男（夫、あるいは父親）としての存在価値を確認し、自分が優位な立場であるという実感を強めることに似ている。そのようなグロテスクな対象化とそれによる主体化が、ここでは「理想」として語られているのである。

一方、タイ人女性たちは従順なふりをして日本人の欲望を満たすことによって、自分の金銭に対する欲望を満たす。こうしたタイの対象化は2000年代のテキストにおいても繰り返し示される。例えば、笹倉明『愛闇殺』（早川書房、2006年6月）の須山昭次は、美容師のタイ人女性・ミュと一緒に暮らし、彼女に独立資金を提供して美容院をはじめさせる。ここでも援助する日本人男性と援助されるタイ人女性のパターンになっている。このような記述の形は、戦時下の日本軍人とタイ人女性のロマンスのパターンの現代版であり、かつての軍事力が、現代では経済力に代わるものの、支配と被支配が固定化した帝国主義的な言説性を持っている。

ところで、1970-1980年代のミステリー小説における危険な空間としてのタイに、日本人女性が入った場合、どのようになるのだろうか。例えば『黒き魔境を撃て』の海外青年協力隊員の風祭由香や、『新・黄金の三角地帯』での美香などは原住民に誘拐され、レイプされてしまう。このように1970-1980年代のタイは女性にとっては危険な空間で、日本人男性だけが活躍する空間として構成されている。当時、日本人女性たちは男性の性的侵略によって、日本が「アジアの人々から蔑視されることになる」²³という理由から、1977年に「アジアの女たちの会（Asian Women's Association: AWA）」を発足し、日本人男性の買春観光に反対する活動を行っていた。こうした背景もテキストにおけるタイの空間が、日本人女性を排除し、男性しか活動できない空間として生成された一因ではないだろうか。1970-80年代のタイを舞台とするミステリー小説における日本人女性の排除とタイ人女性の〈理想〉化は、主要な読者である日本人男性の現状と願望の投影として捉えることができるかもしれない。日本人女性の排除は〈現実的な世界〉（日本）での母・妻・娘などによる束縛からの挿話は、日本の現実世界では実現しないこと（麻薬や買春ツアーなど）を〈非現実的な世界〉（タイ）で実現する願望の記述である。このように、日本人男性を主体とするタイの対象化は当時のミステリー小説の中で繰り返し描写され、観光ガイドブックではあからさまに表現できない「快樂」と「冒険」のイメージを伝え、大量の日本人男性を観光客に仕立て上げたのである

²³ 「“買春ツアー”は妻にも責任」（「朝日新聞」1980年11月21日、朝刊）

1970-80年代のミステリー小説における基本的構造が日本人男性（主人公・読者）による女性としてのタイの対象化にあるとすれば、そのような構造の変化が生じるのは1990年代になってからである。1980年代の様々な社会問題を解決するため、1988年に首相に就任したチャートチャーイは「インドシナ戦場から市場へ」のスローガンを掲げ、カンボジアのフンセン首相との会談を実現するなど積極的な対インドシナ外交を展開した²⁴。また、外貨獲得政策のため、タイ国政府観光庁は、1987年に「タイ観光年（Visit Thailand Year）」という観光キャンペーンを実施した。1990年代のミステリー小説を見ると、例えば谷恒生『タイ・プーケットツアー殺人事件』（ケイブンシャノベルス、1991年2月）での夕子とゆかりはプーケットツアーをプレゼントされ、タイに渡る。そして、彼女たちはプーケットで連続殺人事件と関わることになる。また、井原まなみ『悪魔の果実殺人事件』（光文社文庫、1993年10月）での真紀と理沙は殺人事件を解明するためタイに行くことになる。このように、1990年代のミステリー小説ではタイに来て探偵となるのは若い女性へと変化する。1990年代に入るとタイは男性の空間としての表象がなくなり、女性でも入ることができる空間になる。

²⁴ 加藤和英『タイ現代政治史——国王を元首とする民主主義』（弘文堂、1995年10月）

第6章

村上春樹「タイランド」から見た「タイ」

1 はじめに

1970—1980年代の様々な社会問題を抱えるタイについて、1988年に就任されたチャートチャーイ首相は「インドシナ戦場から市場へ」のスローガンを掲げ、カンボジアのフンセン首相との会談を実現するなど積極的な対インドシナ外交を展開した¹。外貨獲得政策のため、タイ国政府観光庁が1987年に「タイ観光年（Visit Thailand Year）」という観光キャンペーンを実施し、第5章の1970—1980年代のミステリー小説で描写されたような〈男性しか入れない空間〉や〈危険な空間〉としてのタイの表象を払拭してから、タイ観光は飛躍的に成長している。また、1985年のプラザ合意以後日本では急激な円高が進み、海外旅行ブームが起きた。海外に行けるのは男性だけではなく、女性も海外旅行をするようになった。ポーラ文化研究所（東京）の20歳代の独身OLを対象としたアンケート調査²によれば、「今、一番欲しいもの」の1位は「海外旅行」であった。またJTBの1992年2月の調査に、海外旅行は「ちょっとリッチな気分を味わえる旅行に女性の人気は集まっている」ため、「海外旅行をした人は、全国で推定約200万人。このうち、約45%が団体のツアー客で、その60%以上が女性。パッケージツアーを利用した卒業旅行の参加者となると、女性は80%にも達する」³。このように、当時の若い女性にとって「海外旅行もしたことないのは格好が悪い」⁴ため、現代的な女性の象徴として海外旅行をしていたのである。こうした1990年代の旅行現象によって、多くの日本人女性の性観光者は「リッチな気分を味わえる」ため、格安なタイのリゾートを訪れている。

1999年6月8日の「朝日新聞」によれば、日本人の「主な旅行先は米国（四百九十五万人）、韓国（百九十万人）、中国（百万人）、タイ（七十八万人）の順」⁵である。日本人旅行者の急増とともに、タイを舞台とした小説が多く刊行された。1990年代の日本現代小説におけるタイの表象を検討するため、本章では1990年代の小説を代表する村上春樹「タイランド」を取り上げる。村上春樹は世界中で最も広く読まれている現代作家の一人である。特に、村上作品には日本国内だけではなく、世界中の読者が共有できる普遍的な要素が存在している。また、「タイランド」は日本人女性のタイのリゾート地への旅行が描かれており、1990年代における女性の海外旅行の現象と重なっているため、本章では村上春樹「タイランド」を取り上げて、1990年代の日本人が見たタイ、また、世界中の読者に共有され、

¹ 『タイ現代政治史——国王を元首とする民主主義』（弘文堂、1995年10月）

² 「独身OL肩ひじ張らず ポーラ文化研究所がアンケート調査」（「朝日新聞」1989年10月31日、朝刊）

³ 「海外旅行は女性が主役 海外出張減り、“救いの女神”」（「朝日新聞」1992年3月15日、朝刊）

⁴ 「海外旅行 心に余裕ある外国人の人々」（「朝日新聞」1986年9月3日、夕刊）

⁵ 「日本人の海外旅行、昨年7年ぶり減少」（「朝日新聞」1999年6月8日、夕刊）

受容されているタイの表象について考察したい。

村上春樹「タイランド」(初出:「新潮」1999年11月)は短編連作小説集『神の子どもたちはみな踊る』(新潮社、2000年2月)に収録され、2003年にナンタジット・コムサン⁶により英語版からタイ語版に翻訳された。村上はこの短編連作小説集について「時間をおいてゆっくりと手直ししながら、年末までかけて雑誌に連載しています。全体としてはビートルズの「サージェント・ペパーズ」みたいにコンセプト・アルバムのなものになる」⁷と述べている。「サージェント・ペパーズ」は正しくは「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」といい、1967年に発売された「ビートルズの最高傑作といわれるアルバム」⁸である。中山泰樹⁹によれば、「サージェント・ペパーズ」は「テーマ・パークのように」「どんな設備や乗り物があるのか、どこにどのような仕掛けや驚きが待っているのか、ワクワクドキドキ」で、「トータル性をもった完璧なるコンセプト・アルバム」である。このように、連作小説集『神の子どもたちはみな踊る』に収録されている「UF0が釧路に降りる」、「アイロンのある風景」、「神の子どもたちはみな踊る」、「タイランド」、「かえるくん、東京を救う」、「蜂蜜パイ」の六つの短編は、阪神淡路大震災の「コンセプト」の下にそれ自体の「内面や記憶という「大きなテーマ」のための機能的な要素」¹⁰がある。六つの短編の中では「タイランド」は海外(タイ)を舞台にした唯一の作品¹¹である。

村上とタイについて、1998年11月4日の「村上朝日堂」の読者フォーラムで村上は「タイの空港のレストランに入って、「ジャングル・カレー」というのを注文し」¹²たと書いたが、旅行としてタイに一度も行ったことがない¹³と主張している。しかし、「タイランド」を執筆する前に村上は「バリ島の「アマヌサ」というホテルの広大なプールのわきに寝ころんで、日がな本を読んで過ご」¹⁴し、「アマヌサはなにしろプールが広くて(ばかでかい!)、けっこうすいているので、僕は一日たっぷりと泳いでられて、とてもハッピー」¹⁵だと述べている。これは五日間本を読んだり、プールで泳ぐ「タイランド」のさつきの「完璧な休息」と重なる。このことから、村上がバリ島での体験をもとにして物語を作り上げたと言えよう。しかし、バリ島の経験を書くのに、なぜバリ島を舞台にせず、タイを小説の舞台として選んだのか。この問いに答えるため、まず村上が描写したタイを見てみよう。

⁶ คมสัน นันทจิต. อาฟเตอร์เดอะควาย (AFTER THE QUAKE). กรุงเทพฯ: กายมารูต, 2546.

⁷ 村上春樹(著) 安西水丸(イラスト)「16 | 涙、涙のブライアン来日公演実況中継」『CD-ROM版 村上朝日堂 スメルジャコフ対織田信長家臣団』(朝日新聞社、2001年4月)

⁸ 中山泰樹『超ビートルズ入門』(音楽之友社、2002年9月)

⁹ 注7に同じ。

¹⁰ 松本常彦「地震のあとで——彼女は何を見ていたのか——」(『九大日文』12号、2008年10月)

¹¹ 「UF0が釧路に降りる」の舞台は北海道で、「アイロンのある風景」は茨城県、「神の子どもたちはみな踊る」、「かえるくん、東京を救う」そして「蜂蜜パイ」は東京都である。

¹² 村上春樹(著) 安西水丸(イラスト)「読者&村上春樹フォーラム 183」『CD-ROM版 村上朝日堂 スメルジャコフ対織田信長家臣団』朝日新聞社、2001年4月)

¹³ 村上春樹「解説」(『村上春樹全作品1990-2000 ③ 短編集Ⅱ』講談社、2003年3月)

¹⁴ 村上春樹(著) 安西水丸(イラスト)「読者&村上春樹フォーラム 352」『CD-ROM版 村上朝日堂 スメルジャコフ対織田信長家臣団』朝日新聞社、1)「読者&村上春樹フォーラム 183」『CD-ROM版 村上朝日堂 スメルジャコフ対織田信長家臣団』朝日新聞社、2001年4月)

¹⁵ 村上春樹(著) 安西水丸(イラスト)「読者&村上春樹フォーラム 386」(同上、2001年4月)

「タイランド」の世界は、高級リゾートを擁する脱色化された風景として描かれており、歴史的・地政学的実体として立ち現れることはなく、ニミットと占い師の老女以外にはタイ人も登場しない。またニミットがさつきに提供するサービスは、メルセデスでの送迎の他、プールやサンドイッチ、アイスティーといった西欧化されたものであり、タイの歴史的・文化的記号は消去されている。むしろさつきが多額の金を払って消費した「タイランド」とは（中略）西欧先進国生活を送るための高級リゾートであり、例えばバリなどの他の観光地とも交換可能な場所として描かれている。（久保田裕子『言葉はく（出来事）を超えることができるか——村上春樹「タイランド」論——』『日本文学』2012年8月）

久保田裕子が指摘したように、テキストの中でタイの描写は「歴史的・文化的記号」は表記されず、「バリなどの他の観光地とも交換可能な場所として描かれている」。また、テキストをさらに見ると、占い師の老女の登場人物設定は、神秘的タイのイメージと重なっているが、これも村上がバリ島に滞在していた間に「インドネシアにはそういう種類の、土着的というか、スピリチュアルな能力をもった人（中略）いろんな不思議な話」¹⁶が題材になっている。なぜ村上は実際に休暇を過ごしたバリ島を舞台にせず、タイを小説の舞台として選んだのか。また、テキストの舞台はタイではなく、「バリなどの他の観光地とも交換可能」になるのだろうか。それは「他の観光地とも交換可能」なものではない、タイに意味があるのではないだろうか。この問いを解決するために、「タイランド」の分析を行うことで、「タイランド」におけるタイの空間について考察することを目的とする。

2 「根というものが無い」さつき

「タイランド」¹⁷はさつきという登場人物の「人生」^{たび}についての物語である。出発点としての子どもの時、さつきは父の愛情を受けて、「彼女のまわりのものごとはずべてうまく運んでい」て、「悪いことは何ひとつ起こら」ず、幸せに育てられた。しかしさつきが18歳の時に父を癌で失ってから、さつきの人生は「まったくべつの筋書きの話が始まったみたいに」「すべてが悪い方向を向いてしまっ」た。さつきにとって、父に対する思い出は「四月の思い出」のようである。

This lovely day will lengthen into evening
We'll sigh goodbye to all we ever had
Alone where we have walked together
I'll remember April and be glad

¹⁶ 村上春樹（著）安西水丸（イラスト）「読者&村上春樹フォーラム 309」（同上、2001年4月）

¹⁷ 本文引用は全て『村上春樹全作品 1990-2000 ③ 短編集Ⅱ』（講談社、2003年3月）に拠る。

素敵な一日も夕暮れとともに幕をおろし
その日の全ての出来事に別れを告げる
ひとり、僕はかつて二人で巡った道を歩きつつ
あの四月の日々を思い返して幸せな気持ちになる¹⁸

「四月」という時期からは、〈春〉や〈青春〉が連想される。「四月の思い出」は青春時代のさつきの父に対する幸せな記憶なのである。しかし、「父親が死んだあと一ヶ月もたたないうちに」、「素敵な一日も夕暮れとともに幕をおろし」たように、母が「ひとことの相談もなく」さつきと父との幸せな思い出である「ジャス・レコードのコレクションと大きなステレオ装置」を処分した。母の行為に対する不満や、母との葛藤はさつきの人生を「悪い方向」(=「その男」との関係)に変えてしまったと読み取れる。名前がない「その男」¹⁹はさつきの「生まれるはずだった」子供たちを中絶させただけではなく、その存在自体が辛い記憶となってさつきを苦しめている。家族とつながらないさつきは、「一年間深い孤独のうちに生きる」「心のふれあい」がない「相互のコミュニケーション」の関係で過ごしている北極熊の話と「オーバーラップ」²⁰するだけではなく、「蜂蜜パイ」の淳平や、「アイロンのある風景」の順子と同様に、「根というものが無い」「深い孤絶を感じ」、「どこにも結びついていない」²¹のである。そして、辛い記憶から解放されるため、18歳で一人、「遠くの、ひとりも知り合いがいない町」²²である〈自由の国〉のアメリカへ行く。

アメリカのデトロイト²³でさつきは「甲状腺の免疫機能についての研究」する医者として働き、「オペラしか聴かない」、「証券アナリスト」をしているアメリカ人と結婚した。しかし、さつきの夫はアルコール依存症で、さつきの「よく知っている女性」と不倫し、さつきが「子どもを欲しがらな」いことを理由に離婚した。離婚後、さつきは「ジャス・レコードのコレクション」を処分した母と同様に、「死ぬまで一度も」アメリカ人の夫に対する不幸な思い出としてのオペラを「聴かなくてもとくに寂しいとは思わない」と語っている。「自動車の町」のデトロイトでさつきは結婚生活に失敗しただけではなく、自動車の「ボンネットの白ペンキで「JAP CAR」と書かれ」「窓ガラスとヘッドライトが誰かに叩き

¹⁸ “I’ll Remember April” Lyrics © Universal Music Publishing Group DE PAUL, GENE / RAYE, DON 和訳は「四月の思い出(I’ll remember April)」(http://take5555.exblog.jp/5291056/) (2012年11月13日 アクセス)より引用した。

¹⁹ これについて、河合隼雄は「たとえば、大江健三郎さんの『人生の親戚』の中で、大事件が起こるんですね。息子が二人自殺してしまうんですが、主人公の人が、そのことを話すときにいつも「あれが起こった」「あれはね」「あれはね」と言うんですよ。名前は付けようがないんです。しかしその人にとっては「あれ」というのが一生ついて回るわけです。(中略) これをもし自我としておくと、私の心の中に[it]があるんですが、さつき村上さんが言われたように周りの環境というのがあるわけです。だから、周りの環境と[it]との関係が一番不思議で訳のわからないことのように僕は思います。すごい関係があるようにも思えますし、関係があるようで、何も関係ないとも言えるんです。」「現代の物語とは何か」『こころの声を聴く』新潮社、1995年1月)と指摘している。

²⁰ 徐忍宇「内なる闇へのイニシエーション——村上春樹「神の子どもたちはみな踊る」論——」(『九大日文』12号、2008年10月)

²¹ 村上春樹「蜂蜜パイ」(『村上春樹全作品1990-2000 ③ 短編集Ⅱ』講談社、2003年3月)

²² 注21に同じ。

²³ 榎泰邦によれば、デトロイトに「治安状況および市の荒廃ぶりは最悪の状況を脱したといわれる」町であり、犯罪都市として小説の中でよく描写されている。(『デトロイトの復活 アメリカ製造業と日本企業』丸善ライブラリー、1999年12月)

割られ」るなど、生活上の安全も保障されていなかった。

川村湊によれば「クルマが、それに乗っている人間とほぼ等身大になっている場合があり、「クルマという「箱」は、個人を外側の、外界の危機や危険に晒しながら、それがまるで安全であるかのように思わせる一種の魔法の箱にはほかならない」²⁴のであり、「ホンダ・アコード」はさつきの身を守る「箱」なのである。1976年5月に「ユーティリティ、走りの良さ、乗り心地、経済性、といったクルマ自身に求められる要件と、環境にやさしい低公害性、安全性、といった社会的な要請とをバランスよく“調和”させた《ヒューマン・カー》という新しいコンセプトのもとに」²⁵デビューしたホンダ・アコードは、1993年に「日本カー・オブ・ザ・イヤー」を獲得して国内だけではなく、海外でも高い評価を得た。これは「ノーベル賞候補になることだって夢じゃない」と高く評価されたさつきと重なっている。しかし、さつきの「ホンダ・アコード」は「窓ガラスとヘッドライトが誰かに叩き割られ、ボンネットの白ペンキで日本人を差別する用語の「JAP CAR」と書かれた。久保田裕子が「自動車がナショナリティを象徴する記号として機能する状況が背景にあったことがわかる」²⁶と指摘しているように、破壊された自動車はアメリカの社会と調和（アコード）できず、アメリカに「根をつける」ことができないさつきの象徴なのである。結局、さつきは再び日本へ戻っていくのである。

3 バンコクからリゾートの空間へ

日本に戻ってから、さつきは東京の大学病院で働き、世界甲状腺線会議を参加するためタイに行く。タイの国名は、タイ族の名に由来して「自由」という意味を持っている。つまり、西洋の「自由の国」のアメリカと同様に、タイは東洋の「自由の国」である。舞台としてのタイは「西洋/東洋」の平行・ワールドとされているだけではなく、世界甲状腺線会議を行った〈バンコク〉²⁷は1990年代に「デトロイト・オブ・ジ・イースト」²⁸（東洋のデトロイト）と呼ばれていた。このように、デトロイトと同様に「猥雑でうるさくて空気の汚く、「車は渋滞し、人々は怒鳴りあい、クラクションが空襲警報のように空気を裂いて」いるバンコク²⁹を舞台としたことは〈東洋〉にある〈南の国〉や、バリ島などにはない

²⁴ 川村湊「自画像としてのクルマ——「眠り」」（『村上春樹をどう読むか』作品社、2006年12月）

²⁵ 「アコード20年のあゆみ」インターネット・ホームページ <http://www.honda.co.jp/factbook/auto/ACCORD/19960700/ac96-001.html>。（2012年11月13日参照）

²⁶ 久保田裕子「言葉は〈出来事〉を超えることができるか——村上春樹「タイランド」論——」（『日本文学』2012年8月）

²⁷ タイについての村上の小説は「タイランド」だけではない。1993年に「パーカー万年筆のシリーズ」の報告として「太陽」に連載された「バンコック・サプライズ」というショート・ショートがある。「バンコック・サプライズ」で「とおおおってもすごいことがバンコックであったんですよ。超信じられないようなこと。ものすごおおおいこと」というをバンコク描かれている。

²⁸ バンコク日本人商工会議所副会頭を務める村松吉明TMT社長は「通貨危機の逆風は、いまや追い風に変わりつつある。輸出という緊急対策がタイをワンステージ上の国に押し上げている」と話す。そこで、「デトロイト・オブ・ジ・イースト」（東洋のデトロイト）のタイが90年代初め、21世紀には自動車生産基地になれるよう掲げた目標が、再び現実味を帯び始めている。（「内需からの転換（アジア危機2年 変わる産業地図：上）」『朝日新聞』1999年6月3日、朝刊）

²⁹ 1990年代のバンコクの交通渋滞の激しさは世界に知られている。たとえば、1995年2月9日の「朝日新聞」にもバンコクの渋滞についての「「世界最悪」の渋滞、出口なし タイ・バンコク」という記事がある。

近代的な風景を投影したいのではないのか。

バンコクの自動車運転事情はすさまじいです。「日本で運転していて割り込まれても、ちょっとのことくらいで短気を起こしちゃいけない。これに比べれば甘い甘い」と認識を新たにしました（笑）。でもバンコクの運転手たちは素晴らしいドライビング・テクニックを持っているみたいで、車間距離なくてもぶつかりません（あの絶妙なブレーキング！）。割り込む側・入れる側の阿吽の呼吸もあり、日本人がやる場合のただの危険な運転とはものが違うみたいです。無謀さの格が違う、とも言えますが。（「読者&村上春樹フォーラム 198」『CD-ROM版 村上朝日堂 スメルジャコフ対織田信長家臣団』朝日新聞社、2001年4月）

「読者&村上春樹フォーラム」で「あおい」という読者から送られたタイについての手紙（1998年11月4日）におけるバンコクは、「すさまじい」「自動車運転事情」であるにもかかわらず、タイ人の運転手は「素晴らしいドライビング・テクニックを持っている」。このようなタイ人の運転手の描写は「タイランド」の「とても美しいステアリングの切り方をした。きちんと同じ場所に手をあて、同じ角度のところで持ちかえ」るニミットという登場人物と重なっていると言える。ニミットは「六十を過ぎた、やせたタイ人」で、33年間ノルウェイ人宝石商（その方）の運転手として勤めていた。ノルウェイ人宝石商が亡くなる前に、ニミットはメルセデス・ベンツとジャズのカセットテープを譲り受けた。夫のオペラをもう聴かないさつきに対して、ニミットは「その方」との思い出としてのジャズのカセットテープを大事にしている。また、ニミットの等身体としてのメルセデス・ベンツも、さつきの「叩き割られ」た「ホンダ・アコード」とまったく異なり、「宝石のように美しく磨き込まれ」、「車体にはしみひとつない。新車より美しい。それは誰かの非現実的な妄想からそのまま抜け出してきたみたい」である。

さつきはニミットと初めて出会ったときに「ニミットという」タイ語の固有名詞に対して、「ファーストネームなのかラストネームなのか、それもわからない」、「とにかく彼はニミットなのだ」とニミットの存在を受け取る。「不快に感じ」、「金網がはられた小屋の中」にいるようであり、「なにもかも脱ぎ捨てて自由になりたい」と願っているさつきを辛い過去から解放させるため、「素晴らしいドライビング・テクニックを持っている」ニミットはさつきの導き役として、「暑くて^{わいざつ}猥雑でうるさくて空気の汚い」バンコクの空間から「街の外」へ連れ出す。そのシーンでニミットは『言いだしかねて (I Can't Get Started)』の「カセットテープを取り出してカーステレオに入れ、小さな音でかけた」。

僕は飛行機に乗るたびに“ I Can't Get Started ”という古い歌の出だしを思い出します。

I' ve been around the world in a plane / I' ve settled revolutions in Spain・・・

という歌詞。だから飛行機に乗ると、僕はいつもスペイン内戦のことを考える。スペイン内戦のことを考えると、アーネスト・ヘミングウェイのことを考える。ヘミングウェイのことを考えると、飛行機の事故のことを考える。だからそんな歌について考えるのはもうよそうと思うのだが、つつい考えてしまうんです。（「世界でいちばん気に入った三つの都市」『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです 村上春樹インタビュー集 1997-2009』文藝春秋、2010年9月）

上に引用した旅行雑誌「Papersky」（2004年7月号）のインタビューによれば、“I Can't Get Started”の曲は「飛行機の事故」＝「死」と結びついている。つまり、さつきが導かれる「街の外」の空間は「死の空間」とも言えよう。河合隼雄によれば「死は挫折であり消滅であり、否定的な面をもつことはもちろんであるが、このように再生へとつながってゆく限りにおいては、肯定的な面ももっている」³⁰。このように、新しい、よりよいものへと再生してゆくため、さつきは「本格的に水泳」ができるプールへ行く。そのプールは「高い塀で囲まれ、重々しい鉄の門扉」で閉じられ、「古い石造りの二階建ての建物」の裏手に隠れ、「人の気配というものが感じられない」ところである。プールの空間は、人間同士のバリア（壁）があり、人とコミュニケーションできない空間である。また、「地下水を汲みあげて使って」いるこのプールは「井戸」を連想することができる。つまり、「誰にも打ち明けられなかった」さつきの「子どもを抹殺し、底のない井戸に投げ込んだ」「秘密」は「井戸」のような「プール」を通して象徴されるのである。

さつきは五日間そのプールで一人で泳ぎ、「いやな記憶を頭の外に追いやることができ」、「空を飛んでいるような自由な気分になれた」。この自由な気分はジャズを聞く度に「胸の中からなんとか抜け出そうとしている自由な魂」が出てくるニミットの主人のことと同様である。ニミットの主人は「ラップランドの故郷」に「何かとくべつな事情があった」ため、「三十三年のあいだ、彼は一度としてノルウェイには戻」らなかった。ラップランドはサンタクロースが住むところであり、家族と過ごすクリスマスを連想される。また、松本常彦によれば、タイと「ラップランド」や「北極」など「南との対照が意識されており」、「寒さと遠さを背景に」「家族」との関係の表現になっている³¹。ジャズを聴くことによって辛い記憶を一時的に忘れることができても、「死ぬる日まで、自分が生まれたラップランドの故郷の町を懐かしがっていました」。こうして、主人のような終わりを迎えないため、休暇の最終日にニミットはさつきを夢を予言する年老いた女のところまで連れていくのである。

4 未開地の老女の予言

³⁰ 河合隼雄『河合隼雄著作集 ユング心理学入門1』（岩波書店、1997年12月）

³¹ 松本常彦「地震のあとで——彼女は何を見ていたのか——」（「九大日文」12号、2008年10月）

1998年8月9日の「読者フォーラム」で村上はバリ島についての読者の質問に対して、ライアル・ワトソン『未知の贈りもの』（村田恵子訳、筑摩書房、1992年12月）という小説に言及して、「バリの近くの小さな島の巫女的な踊り少女の話です。半分学術的、半分スーパーナチュラルな本ですが、なかなか面白い」³²と述べ、『未知の贈りもの』から影響を受けた³³。「タイランド」でも「人々の心を治療」するため夢を予言する老女の描写は『未知の贈りもの』の「事件がおこる前に警告を運んできた夢」を見る「八〇歳を越している」イブ・スーリの描写と重なっているのである。

夢を予言する老女が住む場所はバンコクの空間や、リゾートの空間と全く異なる世界であり、「せせこましい水田、痩せた汚い家畜」がおり、「道路は水たまりだらけで」、「性器をむき出しにした牡犬があたりをうろつき」、「裸に近いかっこうの子どもたちが道ばたに並んで立つ」て、人為的に歪曲されず汚染されていない、自然な空間なのである。この空間にいる老女はさつきの「身体の中には石が入って」「その石をどこかに捨てなくてはなりません。そうしないと死んで焼かれたあとにも、石だけが残」と予言する。その「石」は「三十年間にわたって憎み続け」「誰にも打ち明けられなかった」さつきの内に秘めた「秘密」である。老女によりさつきの治療方法は「石を飲み込んでくれる」「大きな蛇の出てる夢」を待つことである。テキストの終わりに、さつきは自分の「心の底」を認識して、ニミットに言おうと思ったが、ニミットに「言葉は石にな」るので、「言葉をお捨て」「夢をお待ちなさい」と言われる。言葉は石になるとはどのような意味なのだろうか。

たとえば、「自分はノドに何か詰まっている」というと、「何か言いたいことがあるでしょう、思いきって言いなさい」と言う、「いや、じつは父親を殺したいと思う」と言うとしますね。そうすると、それを言ってしまったことで傷つくのです。自分は何も意識してそんなこと思っていなかった、と思っても、自分は父親殺しの意思を持っていたということで、また辛くなるわけでしょう。（河合隼雄 村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』岩波書店、1997年3月）

河合隼雄によれば、言語的に精神分析することは通常の意識のレベルに近いところに問題がある人の場合は分析しやすいが、非常に深いところに問題がある人は、言語的に分析しようとしても、傷が深くなり、治らない場合があると指摘している。さつきの場合も、

³² 村上春樹（著） 安西水丸（イラスト）「読者&村上春樹フォーラム 131」（『CD-ROM版 村上朝日堂 スメルジャコフ 対織田信長家臣団』朝日新聞社、2001年4月）

³³ 『未知の贈りもの』の目次で「第一状態 火」、「第二状態 地」、「第三状態 水」、第四状態 気」という四大元素を基にして分けられ、インドネシアの孤島「ヌス・タリアン」での自然とともに生きる島の人の話を語られている。『神の子どもたちはみな踊る』で、「アイロンのある風景」で焚き火を見る順子は「火」だとすれば、「神の子どもたちはみな踊る」でグラウンドで踊る善也は「土」、「タイランド」で水泳するさつきは「水」、「かえるんく、東京を救う」でかえるんくと出会う片桐は「風」である。さらに、村上は「UFOが釧路に降りる」で空気のかたまりである小村の「空」という五つ目の元素を加えて、そして、「蜂蜜パイ」で「最後のひとつ、そういうものを『クロージング』的に置」（Eメール・インタビュー「言葉という激しい武器」聞き手：大鋸一正「ユリイカ」臨時増刊号、2000年3月）くのである。また、『未知の贈りもの』では「踊り」「夢」「予言」「石」「大きなかがり火」「動物」などの連作小説集『神の子どもたちはみな踊る』にあるキーワードと重なっており、『神の子どもたちはみな踊る』と関連性があると言えよう。

辛い記憶（石）を 30 年間抱えてきたため、その辛い記憶を言語化してしまうと、「言葉は石になり、さらに詰まって、自分を傷つけるのである。その唯一の治療方法は言語化せず、夢を待つことである。

テキストの冒頭にあるバンコクの場合で、村上はニミットにバンコク市内の象³⁴の話を読ませている。バンコク市内の象の話は全体の文脈と無関係のように見えるが、「数が増えすぎて、市民はとても迷惑しています。何かに驚いて通りを暴走する象もいて、このあいだはずいぶん数の車が壊される「市内の象」は、「とりあげることができ」ないさつきの辛い思い出とすれば、その思い出を「とりあげる」ためには、「放置するしかない」ということになる。つまり、「放置すること」³⁵は記憶を言語化せず、いつ来るのか分からない「夢」を待つという自己治療の方法である。これは、ニミットが 33 年間ずっと一緒にいた「その方」と「一心同体」であったように、さつきが抱える 30 年間の地面みみたいな「堅固な」苦しみが自分の一部になることである。そして、さつきの苦しみは時間の流れとともに消滅（＝死）し、「蛇」が「石」を飲み込んでくれるのように辛い思い出から自由になる。吉野裕子³⁶によれば、蛇について日本では古代から信仰されてきた。蛇は男性の男根を連想させるだけでなく、トグロを巻く様子は女性器も連想させるため、蛇は「性」（＝生）の象徴としてよく使われている。生の象徴以外、蛇の脱皮は古い皮を脱いで（死）、美しく新鮮な皮に変わる（再生）ため、死と再生の象徴的な意味も持っている。つまり、蛇の夢は古い思い出を脱いで、さつきの新生をもたらす夢なのである。

しかし、今までのさつきは「生きることだけに多くの力を割」きながら、「その男」を責めて、彼が「死ぬことを求め」てばかりいる。言い換えれば、さつきは「自と他を明確に区別し、他を観察することによって出来上がって」、「すべてのものを支配するほどの強力を誇るようになった」³⁷のである。こうして、さつきの苦しんできた自我を消滅するためには、自と他とを区別せず、自然の法則（死）を認識して自然の一部にならなければならない。これによって、さつきがタイの田舎に連れていかれたことの意味は自然へ帰ることである。自然な空間にいる老女の治療によって、「私の生まれるはずだった子どもたちに対してした」その男を非難する自我意識から、「その子どもを抹殺」するのが自分だと意識するようになった。つまり、自分の井戸の中に深く入れば入るほど相手の井戸と共有できる

³⁴ バンコク市内の象は 90 年代の外国人観光客の間で話題になり、「バンコク週報」で「バンコク都庁は九五年二月より、象が都内道路を歩行することを禁止している。バンコクやその近郊では、象が下水溝などにはまって負傷する事故がたびたび起きており、死亡するケースも少なくない。都庁では車の多い道路を象が歩くことは危険であり、象の健康にも悪いとして、飼い主に地方へ帰るよう勧めている。しかしこれまでも地方に帰った象が、再びバンコクに戻ってくることが繰り返されてきた」（「バンコク出稼ぎ象、デモ行進」『バンコク週報』2000 年 3 月 10 日）と述べられている。

³⁵ これについて、『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』で河合隼雄が自己治療について「ぼくは何をしているかという、偶然待ちの商売をしているのです。みんな偶然を待つ力がないから、何か必然的な方法で治そうとして、全部失敗するのです。ぼくは治そうとなんかせずに、ただずっと偶然を待っているんです。（中略）そりゃつらいですよ、なんにもしないんだから。待っていて、うまいこと偶然が起こったら、そのときにはやっぱりパッパッとがんばらなくてはいいんですけどもね」と述べている。（河合隼雄・村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』岩波書店、1997 年 3 月）

³⁶ 吉野裕子『ものと人間の文化史 32・蛇 日本の蛇信仰』（法政大学出版局、1984 年 5 月）

³⁷ 河合隼雄『河合隼雄著作集第 11 巻 宗教と科学』（岩波書店、1998 年 10 月）

と、村上春樹³⁸が言ったように、さつきは辛い思い出の裏で自分が「その男」(石)と共存(夢を待つこと)していることを把握できたのである。

「夢を待つこと」という治療の方法は近代人にとって馬鹿げた方法のように見えるが、医者やさつきにとっては「ホルモン錠剤」などの医学的な治療より、さつきの無意識な心に訴えるのである。老女の予言は、釧路に降りる UFO・アイロンのある風景・善也の『お方』・かえるくんの存在と同様に、理性や科学で解けない「未知」のものである。近代人としての読者はこれらの「未知」なものをどのように捉えるべきであろうか。

今われわれが世界について知っていることをどうにか説明しようと苦闘している、トップクラスの理論物理学者のうちの数人である。かれらの考えは当然変化し、意識が成長するように成長してゆく。「理性の時代」の安易な楽観主義に逆戻りすることはできないということだけはたしかだが、そのほかにたしかないことは何もない。宇宙は非理性的な状態であり、方法より気分にかけている部分が多い。宇宙はわれわれの耳に聞こえない音楽に合わせて踊る。だが、もしわれわれが「すること」よりも「あること」に集中すれば、そのリズムをとらえることはできるのである。子供たちのように、すっばりと宇宙のふところに入りこめば。(ライアル ワトソン『未知の贈りもの』ちくま文庫、1992年12月)

宇宙は毎日少しずつ踊るように変化(「死」と「再生」)していく。「そのリズムをとらえる」ため、「子供たちのようにすっばりと宇宙のふところに入りこ」む。特に、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件の間に生きている登場人物、あるいは被害者たち³⁹は、この乱れている地球の「リズムをとらえ」ながら、地球のバランスと調和して生きなければならない。

5 「タイランド」におけるタイ

『神の子どもたちはみな踊る』の登場人物、例えば、「UFO が釧路に降りる」で北海道に行く小村や、「アイロンがある風景」で死の世界へ旅をする順子と三宅などは、生きられない状態から解放されるため、「遠くの、ひとりも知り合いがない町に行って(中略)そこで孤独に一生を終える」⁴⁰。「タイランド」でアメリカに行くさつきもその一人である。しかし、他の登場人物と同様に「どれだけ遠くまで行っても、自分自身からは逃げられない」

³⁸ 村上春樹「現代の物語とは何か」(『こころの声を聴く—河合隼雄対話集』新潮社、1995年1月)

³⁹ 「UFO が釧路に降りる」で小村の「オーディオ機器専門店」は秋葉原に、「神の子どもたちはみな踊る」で善也の「海外旅行関係の本を専門する小さな出版社」は神谷町駅に、「かえるくん、東京を救う」で片桐の「東京信用金庫」は新宿に、「蜂蜜パイ」で小夜子のマンションは高円寺にある。「タイランド」のさつきは「ノーベル賞候補になることだって夢じゃない」と書かれているので、さつきの職場である「東京の大学病院」は東京大学医学部附属病院だと考えられる。全ての登場人物の職場や住まいは、日比谷線・千代田線・丸ノ内線とつながり、地下鉄サリン事件からの被害者が多く発生したところである。こうして、『神の子どもたちはみな踊る』の登場人物たちは地下鉄サリン事件の被害者になる可能性があると考えられる。

⁴⁰ 村上春樹「蜂蜜パイ」(『村上春樹全作品 1990—2000 ③ 短編集Ⅱ』講談社、2003年3月)

⁴¹ため、さつきはタイで自分自身と向き合ったのである。

「タイランド」は、国際的な都市性、リゾート化された癒し空間、未開地的な要素などが同居する場所としてタイを描写する。バンコクの空間は、アメリカのデトロイトのパラレル・ワールドのように西洋的な近代社会であり、多くの問題が生じる現実の世界である。現実の世界から苦痛を感じていたさつきは、現実の世界（現在の空間）から、非現実の世界であるリゾートの空間へ抜け出した。リゾートの空間は「非日常的な環境のなかに身を置くという場所的感覚も」「日常の生活空間がもつ都会的便利さを失うことなくもっていなければならない」⁴²。さつきが滞在したのは「金がかかっていた」「高級リゾート・ホテル」であり、自然景観をもつ山間部リゾートである。そこで、さつきは水泳で肉体を使うことで頭を解放した。こうした「タイの歴史的・文化的記号」と出会わず、リゾートの空間だけに滞在するさつきの旅行は1990年代に流行した日本人の海外旅行の形が反映されているのである。つまり、「旅先の日常生活が伝えてきた歴史や文化から切り離され、お金を介した消費行動だけで幸うじて接点を持つ、「個人旅行」が「孤人旅行」と化した、脱文脈化する海外旅行の現状である」⁴³。このように、「タイランド」のタイは国際化され、女性が「個人旅行」が出来る安全な観光地として描かれているだけではなく、旅行者をもてなし、サービスをするニミットのような優しいタイ人と接触することができる空間としても見られる。

最後の日に、さつきは「せせこましい水田、痩せた汚い家畜。道路は水たまりだらけで、牛の糞のにおいがいたるところに標って」、「裸に近いかっこうの子どもたちが道ばたに並んで立って」いるという人為的に歪曲されず汚染されていない「みすばらしい村」で、西洋の知識では辿り着くことができない「心の底」を認識する。このように、さつきをタイの三つの空間に案内したのはニミットである。タイ語で「ニミット」は固有名だけではなく、一般名詞としても使われている。

นิมิต นิมิต [動] = นิมิต* [名] = นิมิต*

นิมิต นิมิต [名] ①前兆、微候、端緒 ②しるし、記号 ③原因、理由 ④夢 ⑤《文》男女の生殖器 // นิมิต์สุบิน—subin 夢の知らせ [[梵・巴]] (松山納『タイ語辞典』大学書林、1994年10月)

「ニミット」はもともと仏教語の「ニミッタ (Nimitta)」から来た言葉であり、仏教的な文脈によって微妙に異なる意味で用いられる。特に、「ニミット」は瞑想用語としてよく使われ、心の中に生じてくる種々の「しるし、記号」という意味がある⁴⁴。このことから、

⁴¹ 村上春樹「UFOが釧路に降りる」(注40に同じ。)

⁴² 長谷川芳郎「リゾートの歴史と空間考」(『リゾートの構図——世界にみるリゾートづくりの発想と手法——』総合コミュニケーション、1987年6月)

⁴³ 山口誠『ニッポンの海外旅行——若者と観光メディアの50年史』(ちくま書房、2010年7月)

⁴⁴ 「nimitta」『A Buddhist Dictionary A Manual of Pali Terms and Buddhist Doctrines By Nyanatiloka Mahathera』インターネット・ホームページ<http://www.urbandharma.org/udharma2/dictionary/bd17.html>。(2013年10月10日参照)

「ニミット」は心の中に現れるイメージという概念が存在しているため、前兆、記号、原因、夢などの複数の意味に託されているのである。このように、一般のタイ人読者にとって、「タイランド」の「ニミット」は登場人物のニミットだけではない。さつきがみた「夢」や、さつきの心に現れる「記号」としての石や、さつきに対する「予言」は全て「ニミット」である。つまり、様々な「ニミット」はさつきの無意識的な精神状況が示されている。これで、「ニミットというのが（中略）わからない」さつきの描写は自分の「心の底」が認識していないことが反映されているのではないか。このように、「すべてはうまく運ぶ」ため、さつきは「とにかくこのニミットという男に黙ってまかせて」、自分の無意識を意識するようになった。「ニミット」がわからないのはさつきだけではなく、一般の日本人読者にも、ニミットの名が持つ複数性や象徴性や多様性は読まれない。「ニミット」の非対称性は西洋の知識だけ重視し、精神世界を非対称にする近代の日本人が反映されているのではないか。

以上のように、「タイランド」は従来のタイ表象で慣用化された危険な空間、ロマンス化される関係、有名な観光地、歴史的・文化的な要素などに言及しない。その一方で、国際的な都市性、リゾート化された癒しの空間、未開地的な要素などが同居する場所としてタイの奥行きを描く。従来のタイ表象では見えなかったタイの奥行きが、タイ人読者しか読めない「ニミット」の多様性を通じて描かれている。このように、「タイランド」は日本人にとってのタイの画一的な表象とタイの側から見た場合の奥行きとの非対称性を黙示的に示したのではないだろうか。

終章

序章で述べたように「モノ」の意味は他者によって作成されている。タイの意味を理解するためには、日本などの外部に立つ観察者からの視点が必要である。本論で見てきたように、観察者からのタイへの眼差しは社会、文化、時代によって構成され、メディアを通して表象化される。終章ではこれまで各章で論じてきた論点をまとめ、日本近現代文学で描かれている日タイ関係の歴史の中でタイ表象はどのように変容してきたのか、という問題について考察する。

1 明治大正期の〈シャム〉

本論で明治大正期のシャム表象について述べたのは第1部の第1-2章と第2部の第3章である。まず、第1章で確認したように明治期の「読売新聞」では、仏教や山田長政についての記述が見られても、最も高い関心が寄せられているのはシャムを日本の植民地化することについてである。こうした背景から、当時の新聞におけるシャムは移住に適した生活環境であるという、南進政策に都合のよい側面だけが描写されている。

第2章「タイ国旅行の表象」では明治期のシャムの旅行記、シャムの国情の報告書、仏教交流旅行記や、シャム探検／冒険記を取上げた。これらの旅行記によれば、当時シャムへ渡航した日本人はシャムを植民地化しようとする欲望を持ち、シャムの国情や資源などを徹底的に探求したのである。しかし、第1章の「読売新聞」で描かれた〈理想的な植民地〉としてのシャムの表象に反して、これらの旅行記におけるシャムは危険な野生動物や野蛮な密林などの〈原始的なシャム〉として描写されている一方で、シャムの資源の豊かさが暗示されている。また、冒険旅行記『馬來半島の猛獣狩』(1911年)では「豊かな胸乳が揺れ」、「男根の形をした木造の」「戀の神」を崇拜する醜いシャム人女性が描写されている。このような描写はシャム人女性に対する性的幻想を喚起するだけでなく、信仰深いシャムが表現されている。

一方、第3章で取り上げた遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』(1898年)を見ると、『少年読本第七編山田長政』には第1章の「読売新聞」と同様に、明治期における立身出世や南進論の移民政策の主張が内包されており、そうした理想や主張を伝えるためにシャムで成功した山田長政を利用していた。シャムは第2章の旅行記のような原始的なシャムではなく、理想的な空間として強調され、漠然としたシャムの表象となっている。そして当時の旅行記のように、象の戦いなど読者の冒険心をかきたてる要素が見られる。また、『少年読本第七編山田長政』においては、山田長政(日本=男)とシャムの王妃(シャム=女)の関係を通して、日本とシャムの好意的な関係のパターンが定式化される。山田長政テキストのシャムの風景はまだ漠然としていても、日本人は明治期に繰り返して語られた山田

長政の伝説によってシャムを意識するようになったのである。

以上のように、明治大正期のシャムに関するメディア（「読売新聞」や旅行記など）と『少年読本第七編山田長政』は南進論の言説を共有している。特に、『馬來半島の猛獣狩』などの冒険旅行記と『少年読本第七編山田長政』を見れば、それぞれの文献で描写されたシャムの表象は正反対であっても、海外で様々な困難を乗り越えて成功するストーリーや、異国の風景としての象などの野生動物の描写や、シャム人女性の登場などは共通されている。このように、シャムの冒険旅行記は山田長政の跡を辿り、理想的な山田長政の冒険をリアルに再現していると考えられる。

2 アジア・太平洋戦争期の〈タイ〉

昭和初期に入ると、三井物産による安価な原料確保と市場拡大のため、日本とシャムの関係が強化される。「読売新聞」で日本とシャムの外交活動、例えばミス・シャムの来日や、仏教的交流や、青年交流などがよく報道され、シャムは日本と良好な関係にある国として語られている。また、戦前昭和期の旅行記として三井物産『暹羅案内』（1938年）でも「読売新聞」と同様に友好親善の言説や、西洋に植民地化されないようにシャムを富強化するという建前が書かれながら、経済的な利益獲得の目的として、日本人のシャムへの渡航が奨励されている。こうした目的で『暹羅案内』にはシャムの各地方にある資源や、シャムへの進出の必要性などのガイドブックのような要素を付け加えただけでなく、当時の日本人旅行者にタイの近代的な面や、便利な情報も提供している。

昭和14年（1939年）にシャムはタイに国名を改称する。「読売新聞」の記事によれば、戦時中にタイは昭和初期の日暹親善の表象を引き継ぎ、日本軍を歓迎する〈同盟国〉のタイが描かれている。これは、第3章の角田喜久雄『山田長政』（1940年）でも日本とシャムの良好な関係の象徴となる長政と親日的なルタナ姫の関係をロマンス化し、メロドラマの形式を介して欧米の植民地体制を打破して東南アジアを守るという「大東亜共栄圏」の言説を強調し、読者に戦争への協力を呼び掛けている。一方、『山田長政』におけるシャムの風景描写は明治期の『少年読本第七編山田長政』と同様にまだ漠然としたものである。

また、第4章「南方徴用作家の〈タイ〉」で取り上げたように、アジア・太平洋戦争期に南方徴用作家によって描かれたタイを舞台とした小説を見れば、女性的なタイや日本の同盟国としてのタイの表象が見られる。ただ、南方徴用作家の文芸作品における日タイ関係の描写は、「読売新聞」や角田喜久雄『山田長政』のような日本の軍人に協力する〈同盟国〉としてのタイだけではなく、「兄」の日本によって庇護される対象となる「妹」のようなタイが描かれている。つまり、戦時中の〈友邦のタイ〉や〈同盟国のタイ〉はただ日本によって生成された神話であり、実際のタイは他の東南アジア国と同様に日本に〈庇護〉（＝支配、独占）される存在と見なされていたのである。

「読売新聞」や『山田長政』で見られない、南方徴用作家の小説作品においても一つ

のタイの特色は、ビルマなどの前線と対照的な後衛地であり、癒しをもたらす空間としてのタイが描かれていることである。こうした癒しの空間としてのタイは、ダンス・ホールやバーなどがある近代的な生活を楽しめる要素があるからだけではなく、日本の軍人に同情するというタイの仏教的な国民性の要素もある。

このように、アジア・太平洋戦争期の〈タイ〉は明治大正期の〈シャム〉と異なる表象として語られている。つまり、戦前期の〈タイ〉はシャム人への差別や未開地としての描写があまり描かれず、その代わりに近代的な風景や、癒しの空間や、優しいタイ人などの描写が多く描かれている一方で、日本に従順な性質を持つ、女性的なタイの表象も固定化されている。

3 アジア・太平洋戦後期の〈タイ〉

第二次世界大戦後、タイは親日的な態度が薄らぎ、アメリカとの関係を強化していった。「読売新聞」には1950年代のアメリカ化されたタイの姿が報道されている。1960年代にアメリカの支援で、日本は再び東南アジアとの貿易を振興し、タイとの様々な交流活動を推進した。1960年代の旅行記を見れば、〈買春街〉のタイが観光のハイライトとして紹介されてから、1960年代後半からタイは日本人の買春ツアーの目的地となった。「読売新聞」でも〈買春街〉としてのタイが書かれている。

また、1960年代の新聞における薬物犯罪記事によって、タイの北部にある麻薬生産地である〈黄金の三角地帯〉は日本人から注目され、人気の観光スポットとなっただけではなく、当時の日本人の関心に応じて黄金の三角地帯を巡るルポルタージュも多く刊行された。さらに、〈買春街〉や〈黄金の三角地帯〉のタイの表象は、1970 - 1980年代のミステリー小説でミステリーの要素として利用された。多くのミステリー小説は、日本人男性（探偵役）とタイ人女性（随行者）という登場人物の設定になっている。しかし、随行者のタイ人女性の描写は性風俗に関わり、観光客のお金を騙し取ったりするという、第3章の遠藤周作『王国への道』で描かれたタイ人の裏側と同様の表象がなされている。しかし、ミステリー小説ではタイ人女性を悪く描くより、経済的な事情で困っている、可愛そうなタイ人女性という側面が強調され、援助／庇護すべき存在として描写されている。こうしたタイ人女性と日本人男性の関係は当時の日本人の売春行為を美化する言説であると考えられる。戦後のタイの表象は戦時中の〈癒しの空間〉としてのタイと無縁であるように見えるが、日本人男性の性的な欲望を充たす〈買春街〉としてのタイは、戦時下の小説に描かれたバンコクのダンス・ホールの裸踊りなどの風景による、日本軍にとって〈癒しの空間〉としてのタイ表象が受け継がれたものだと考えられる。

4 平成期（1990年代）の〈タイランド〉

〈買春街〉や〈黄金の三角地帯〉などのタイの表象は、1987年のタイ国政府観光庁の「タイ観光年」というキャンペーンにより払拭され、伝統的なタイや、リゾート地のタイや、国際化されたタイの表象が積極的に受け入れられていった。これにしたがい、1990年代の旅行記におけるタイには、ビーチリゾート、仏教文化、タイ料理などのタイのイメージが投影されている。これらのイメージによって、身体や精神を癒す〈やすらかなる国〉としてのタイの表象が強化されたため、タイは日本人にとって観光地だけではなく、長期滞在地となったのである。こうしたタイの表象は第6章で取り上げた村上春樹「タイランド」でも見られる。

これまでのタイ表象の画一化を脱する志向性を持つ「タイランド」では、国際的な都市性、リゾート化された癒しの空間、未開地的な要素などが同居する場所としてタイの奥行きが描かれている。また、従来のタイ表象では見えなかったタイの奥行きが、日本人読者にとって意味が取れないタイ語の「ニミット」の複数性や象徴性を介して、無意識を重視するタイが反映されている。このように〈タイランド〉としてのタイは世界中に知られる、多様性のある空間である一方で、タイ人しか理解できないタイとしても語られているのである。

以上のように、日本近現代文学におけるタイ表象は大きく3つに分けられる。それは明治大正期の〈シャム〉、戦時中から戦後までの〈タイ〉、1990年代の〈タイランド〉である。まず〈シャム〉は、基本的に、江戸期以来の山田長政テキストに見られる遠い南国という漠然とした表象を負いつつ南進論の対象として政治的言説を背景に生成される場合が多い。戦時中の〈タイ〉は、戦時下においては兄妹関係として語られ、戦後においては1970-1980年代のミステリージャンルに見られるかたちで表象が形成されていく。その表象の画一化を脱する志向性を持つのが、〈タイランド〉である。

*

ここまで新聞と観光メディアを含めて、明治期から1990年代にかけての文学作品において、日本人の想像力によって構成されたタイの表象を明らかにした。日本に明治期から意味づけ・位置付けられることによって、タイは自らの自己を意識的に、そして戦略的に再構築したのである。なお、本論でタイ表象の研究は網羅的に解明したが、まだ研究されていないところも多くある。具体的に言うと、例えば1921年にタイで発行された「ヤマト新聞」(หนังสือพิมพ์ยามะโตะ)は、当時のタイ社会や政治家などを批判することで人気を博したが、三年後タイ政府によって廃刊されている。「ヤマト新聞」における当時のタイの表象は今後の研究課題として考察したい。また、本論で取り上げたそれぞれの時代の主な文学作品は、タイを舞台とした日本文学作品の一部分に過ぎず、まだ研究されていない他ジャンルの作

品、例えば、バッグパッカー小説、駐在員小説、ボランティア小説など多く存在している。その他に、タイを舞台とした漫画、映画、曲なども本論で研究対象になっていないが、文学作品以外の分野ではどのようなタイが表象化され、広められていったのか。このような問題も検討を要すると考える。

出典・主要参考文献

文学作品

- 井原まなみ『悪魔の果実殺人事件』（光文社文庫、1993年10月）
- 岩崎栄『萬歳 文化人の見た現代アジア 16』（ゆまに書房、2002年9月）
- 遠藤周作「メナム河の日本人」（新潮社、1973年9月）
- 遠藤周作『王国への道 山田長政』（平凡社、1981年4月）
- 木村一信、竹松良明『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第1巻:高見順(1)』（龍溪書舎、2010年2月）
- 木村一信、竹松良明『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第5巻:榊山潤(1)』（龍溪書舎、2010年2月）
- 木村一信、竹松良明『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第6巻:榊山潤(2)』（龍溪書舎、2010年2月）
- 木村一信、竹松良明『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第7巻:榊山潤(3)』（龍溪書舎、2010年2月）
- 木村一信、竹松良明『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第11巻:倉島竹二郎』（龍溪書舎、2010年2月）
- 木村一信、竹松良明『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第14巻:平野零児 座談会・対談』（龍溪書舎、2010年2月）
- 胡桃沢耕史「ロン・コン」（「問題小説」1980年5月）
- 胡桃沢耕史「ロン・コン PART II」（「問題小説」1980年12月）
- 西東登『蟻の木の下で』（講談社、1976年7月）
- 笹倉明『愛闇殺』（早川書房、2006年6月）
- 高見順『高見順日記 第一巻』勁草書房、1965年9月）
- 谷克二『蒼き火焰樹』（徳間書店、1988年12月）
- 谷恒生『タイ・プーケットツアー殺人事件』（ケイブンシャノベルス、1991年2月）
- 谷恒生「一人っきりの戦場」（「小説推理」1980年7月・8月）
- 遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』（博文館、1899年4月）
- 角田喜久雄『山田長政』（大日本雄辨會講談社、1941年2月）
- トムヤンティ『メナムの残照 上・下』（西野順治郎訳、大同生命国際文化基金、1987年12月）
- 伴野朗『陽はメコンに沈む』（講談社、1977年3月）
- 中村敦夫『チェンマイの首:愛は死の匂い』（講談社文庫、1983年8月）
- 中津文彦「バンコク狙撃指令」（「野性時代」1990年1月～3月）

松岡英夫『ビルマの話』（児童図書館出版社、1944年11月）
三島由紀夫『暁の寺』（『決定版三島由紀夫全集 第14巻』新潮社、2002年1月）
村上春樹『村上春樹全作品1990-2000 ③ 短編集Ⅱ』（講談社、2003年3月）
山本恵三『黄金の三角地帯』（スポニチ出版、1978年11月）
山本恵三『黒き魔境を撃て』（廣済堂文庫、1988年1月）
山本恵三『新・黄金の三角地帯』（スポニチ出版、1980年10月）
ライアル・ワトソン『未知の贈りもの』（村田恵子訳、筑摩書房、1992年12月）
和久峻三「山田長政の秘宝 シヤム日本人町の超人」（『野性時代』1986年8月～11月）

新聞記事

● 「読売新聞」

「[アジアに生きる] タイと日本」（1966年4月18日、朝刊）
「アジアにもマフィアの“黒手”」（1972年8月19日、夕刊）
「兄の気持ちで導かう 実結ぶ日泰文化協定」（1942年10月29日、朝刊）
「アユタヤの日本人町を訪れて」（1971年12月4日、朝刊）
「安定した反共国家タイ」（1956年7月24日、朝刊）
「安定度増すタニン政権 タイ・クーデターから1年 成果挙げた汚職一掃」（1977年10月6日、朝刊）
「遺骨五百片故国へ タイ北部で戦友会収集」（1974年11月6日、夕刊）
「[医療ルネサンス] (152) 第二部現代病の周辺 エイズと闘う=2（連載）」（1993年2月23日、朝刊）
「艶麗振袖姿で ミス・シヤム神戸へ」（1937年4月24日、夕刊）
「[海外トピック]辻政信氏消えて5年 ラオス 現地も大勢は死亡説」（1966年5月28日、夕刊）
「開国百年の日本」（1958年3月17日、朝刊）
「歓呼に揺らぐ白象の国」（1939年6月25日、朝刊）
「経済至上・自尊心砕く“ほほえみの国”タイの反日」（1974年1月11日、朝刊）
「[月例座談会] 日本の問題・世界の問題」（1962年9月28日、朝刊）
「句読点のはっきりした舞台 劇団雲「メナム河の日本人」」（1973年10月19日、夕刊）
「熊谷直亮氏の消息」（1894年1月25日、朝刊）
「雲・新体制第一弾は遠藤作品一復帰した芥川比呂志演出で上演—」（1973年10月5日、夕刊）
「[金剛宝都] =1/南天子（連載）」（1918年6月5日、朝刊）
「[金剛宝都] =2/南天子（連載）」（1918年6月11日、朝刊）
「[金剛宝都] =3/南天子（連載）」（1918年6月16日、朝刊）

- 「[金剛宝都] =4/南天子 (連載)」(1918年6月17日、朝刊)
- 「[金剛宝都] =5/南天子 (連載)」(1918年6月24日、朝刊)
- 「[金剛宝都] =6/南天子 (連載)」(1918年7月1日、朝刊)
- 「[金剛宝都] =7/南天子 (連載)」(1918年7月4日、朝刊)
- 「[金剛宝都] =8/南天子 (連載)」(1918年7月8日、朝刊)
- 「[金剛宝都] =9= (完) /南天子 (連載)」(1918年7月15日、朝刊)
- 「シヤムから熊の仔と虎」(1937年4月25日、夕刊)
- 「シヤム国王ケラレコルン1世が編纂出版した仏典を浄土宗本山に寄贈」(1895年7月12日、朝刊)
- 「シヤム少年団来月末来朝」(1929年7月1日、朝刊)
- 「シヤムと日本及び各国」(1903年4月18日、朝刊)
- 「シヤムに貢納を拒否された清国が、戦争を仕掛けるとかで騒然」(1877年9月29日、朝刊)
- 「シヤムに領事館を置かず」(1888年3月3日、朝刊)
- 「シヤムのいろいろ (1) 象の乞食ほか」(1902年12月13日、朝刊)
- 「シヤムの踊を語る 湿度の違いから苦勞した楽器 ほか」(1935年4月23日、夕刊)
- 「シヤムの芸術とその教育=上」(1901年8月23日、朝刊)
- 「シヤムの象狩」(1902年10月19日、別刷)
- 「シヤムの日本植民地」(1894年3月14日、朝刊)
- 「シヤムの婦人と家庭」(1932年2月21日、朝刊)
- 「シヤムの仏教を視察した生田得能師、四谷の笹寺で土産法談/東京」(1891年5月8日、朝刊)
- 「シヤムの我に望む所」(1902年12月12日、朝刊)
- 「シヤム仏像奉迎」(1927年10月17日、朝刊)
- 「シヤム舞踊団「フジ・ヤマ」勉強 日本をどりも研究」(1935年4月15日、朝刊)
- 「シヤムへ行く「少年使節」」(1930年11月13日、朝刊)
- 「植民協會の演説會 (承前)」(1894年4月10日、朝刊)
- 「[シンガポールより] =1/南天子 (連載)」(1918年3月25日、朝刊)
- 「[シンガポールより] =2/南天子 (連載)」(1918年3月26日、朝刊)
- 「[シンガポールより] =3完/南天子 (連載)」(1918年3月27日、朝刊)
- 「真宗の僧侶がシヤム公使を訪問、将来宗教上の通信を約束」(1888年2月14日、朝刊)
- 「新體制への文化團體 (2) 国防文藝連盟」(1940年9月14日、夕刊)
- 「神秘と情熱 シヤムの踊り」(1935年4月11日、朝刊)
- 「[聖火の道] =16 バンコク市内に400寺 外人僧も修行 (連載)」(1964年1月23日、朝刊)
- 「政治評論家・馬場恒吾「正しき自己認識」(1940年8月4日、朝刊)

- 「[世界の裏窓] 日本人観光客 タイ “一夜妻” 連れ堂々」(1976年1月16日、夕刊)
- 「象のお国シヤムの面白いお土産話」(1937年5月9日、朝刊)
- 「象のお礼にシヤムへ少年団」(1937年2月17日、朝刊)
- 「タイ國で現地ロケ 本紙小説で東寶が國策映画」(1940年7月27日、朝刊)
- 「泰国で日本賞 日本文化の論文入選決る」(1943年2月9日、夕刊)
- 「泰國で“邦品見本市”」(1939年11月5日、朝刊)
- 「タイ人“裏社会”金融の核 新宿に「地下銀行」さらに2店 独自に宝くじ発行」(1997年12月5日、夕刊)
- 「タイと国名改称」(1939年5月26日、夕刊)
- 「タイに残留兵二、三百 現地での結婚組もいる」(1952年3月21日、朝刊)
- 「タイに大麻薬ルート 黒幕は女貿易商、留学生を利用」(1968年9月19日、朝刊)
- 「タイの野口プロに抗議の弾丸 反日感情高まる／キック・ボクシング」(「読売新聞」1972年10月18日、朝刊)
- 「タイの花 「ミス・タイ」を改称、3年ぶりに栄冠は輝く」(1944年1月6日、朝刊)
- 「血に結んだ日泰 きょう“同盟”から1年のお祝い」(1942年12月21日、朝刊)
- 「[追跡 不法就労] タイ女性引き渡し事件から (1) 崩れたニッポン幻想 (連載)」(1991年7月29日、朝刊)
- 「次に夕刊連載小説 山田長政」(1940年7月7日、夕刊)
- 「10日に仏舍利恭迎式」(1943年7月7日、夕刊)
- 「堂々・バンコク進駐 皇軍、泰国の歓迎浴びて」(1941年12月10日、夕刊)
- 「[東南アジア新風景] (2) バンコクのタッピー 欧米型生活楽しむ若者 (連載)」(1991年5月15日、朝刊)
- 「[時の言葉] 病変米 (黄変米)」(1953年2月18日、夕刊)
- 「特派員のえんぴつ」(1968年12月13日、朝刊)
- 「[特派員ノート] バンコク・原野喜一郎 政治改革が導く経済再建」(1997年9月20日、朝刊)
- 「戸惑うタイ軍事政権 クーデターから1か月」(1991年3月25日、朝刊)
- 「長政を描く「南十字星」 タイでロケ」(1978年11月8日、夕刊)
- 「[南洋の大勢] =21 シヤムも日本人の成功地なり=下／錦城生 (連載)」(1913年9月20日、朝刊)
- 「[南洋の大勢] =21 シヤムも日本人の成功地なり=上／錦城生 (連載)」(1913年9月18日、朝刊)
- 「日泰攻守同盟締結秘話 毅然頑張るピブン首相」(1942年4月1日、朝刊)
- 「“白象”は微笑む 宿怨40年の地 メコン河の宝庫タイに還る日」(1941年3月12日、朝刊)
- 「裸足の美人！ミス・シヤム」(1936年1月9日、朝刊)

「話の港」(1939年9月23日、朝刊)
「バンコクだより〈上〉」(1964年8月17日、朝刊)
「バンコクの日本人 脱線エリートに“高価な夜”」(1976年6月14日、朝刊)
「“ひどい日本人”逮捕 タイで少女を人身売買」(1973年1月9日、夕刊)
「佛骨奉迎に就ての希望」(1900年5月19日、朝刊)
「普通のタイ人、まず知らない」(1987年3月10日、夕刊)
「[香港見聞記] =上/南天子(連載)」(1918年3月5日、朝刊)
「[香港見聞記] =下/南天子(連載)」(1918年3月6日、朝刊)
「まだいる日本兵 バンコクに二百 引揚者の話」(1952年10月12日、朝刊)
「桃の節句に日泰婦人の交驩」(1943年3月3日、夕刊)
「ロケ隊、タイへ「山田長政・王者の剣」」(1959年3月6日、夕刊)
「傭兵日本人」(1972年6月15日、夕刊)

● 「朝日新聞」

「遺骨九百柱を確認」(1977年11月24日、朝刊)
「海外雄飛を今に映して 遠藤周作著 王国への道 山田長政」(1981年5月4日、朝刊)
「海外旅行は女性が主役 海外出張減り、“救いの女神”」(1992年3月15日、朝刊)
「海外旅行 心に余裕ある外国の人々」(1986年9月3日、夕刊)
「旧日本軍傷病兵の遺骨 千二百余柱を収集」(1978年2月7日、夕刊)
「克服なるか反日感情」(1970年3月3日、朝刊)
「実在したのか 英雄・山田長政」(1987年3月10日、夕刊)
「主観的日本人論」(1972年8月21日、朝刊)
「「世界最悪」の渋滞、出口なし タイ・バンコク」(1995年2月9日、朝刊)
「泰へ定期1番機 「松風」号」(1940年6月8日、夕刊)
「“虎を送る”の快報 シャム答礼使」(1937年4月21日、夕刊)
「独身OL肩ひじ張らず ポーラ文化研究所がアンケート調査」(1989年10月31日、朝刊)
「内需からの転換(アジア危機2年 変わる産業地図:上)」(1999年6月3日、朝刊)
「内容お粗末な日タイ“合作”」(1959年5月7日、夕刊)
「日泰和親友好条約、きょう調印 “戦争の場合・敵国不援助”」(1940年6月13日、夕刊)
「日本品をボイコット 経済進出に反発」(1972年11月7日、朝刊)
「日本人の海外旅行、昨年7年ぶり減少」(1999年6月8日、夕刊)
「俳優座「マリアの首」、雲「メナム河の日本人」演劇評」(1973年10月20日、夕刊)
「“買春ツアー”は妻にも責任」(1980年11月21日、朝刊)
「“花子さん”のお礼に少年団から答礼使」(1936年12月15日、朝刊)
「減った?日本人買春ツアー バンコクに見る」(1987年7月6日、朝刊)
「麻薬ルート タイが撲滅に全力」(1972年8月11日、朝刊)

「明治座」(1898年12月18日、朝刊)

「ロケ隊、タイへ「山田長政・王者の剣」(1959年3月6日、夕刊)

● その他

「暹羅」(「太陽」第1巻第10号、1895年10月)

「暹羅の視察」(「太陽」第三巻第五号、1879年3月)

「タイ泰麵鉄道とパタヤの旅」(「旅行読売」1984年11月)

「バンコク出稼ぎ象、デモ行進」(「バンコク週報」2000年3月10日)

山田長政資料

石原貞堅『征清軍歌 忠君義勇』(明玉堂、1894年9月)

関口隆正『山田長政傳 附牛山復讐録』(草深十丈書屋、1892年4月)

岡田宗吉、楠美六五郎『軍人精神叢談』(九皋堂、1890年8月)

岡村信太郎『山田長政一代記』(岡村信太郎、1892年6月)

学海指針社編『小学修身訓 高等科教員用 卷三』(集英堂、1901年8月)

『古今名誉実録 第二巻』(春陽堂、1893年9月)

サトー著、寺崎遜訳『山田長政事蹟合考』(宮内省、1896年5月)

三育舎編輯所編「少年亀鑑」(三育舎、1897年2月)

関徳(遂軒)編『日本之光輝』(青木嵩山堂、1895年2月)

高島正清編『習文必用』(梅巖堂等、1876年3月)

遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』(博文館、1899年4月)

角田喜久雄『山田長政』(大日本雄辨會講談社、1941年2月)

西村真次『新国史観努力の跡』富山房、1916年6月)

法月鋭児『静岡県郷土史談』(修誠堂書店、1894年12月)

町田源太郎編『古英雄之傳』(晴光館、1910年3月)

間宮武『山田長政偉勲録』(間宮武、1892年6月)

参考文献／単行本

石井米雄・吉川利治編『日・タイ交流六〇〇年史』(講談社、1987年8月)

今井清人 編『村上春樹スタディーズ 2000-2004』(若草書房、2005年5月)

榎泰邦『デトロイトの復活 アメリカ製造業と日本企業』(丸善ライブラリー、1999年12月)

内田隆三『探偵小説の社会学』岩波書店、2001年1月)

柿崎一郎『物語 タイの歴史 微笑みの国の真実』中公新書、2007年9月)

- 加藤和英『タイ現代政治史——国王を元首とする民主主義』(弘文堂、1995年10月)
- 河合隼雄『河合隼雄著作集第11巻 宗教と科学』(岩波書店、1998年10月)
- 河合隼雄『河合隼雄著作集 ユング心理学入門1』(岩波書店、1997年12月)
- 河合隼雄「現代の物語とは何か」『こころの声を聴く』(新潮社、1995年1月)
- 河合隼雄・村上春樹『こころの声を聴く—河合隼雄対話集』(新潮社、1995年1月)
- 河合隼雄・村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』(岩波書店、1997年3月)
- 木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』(世界思想社、2004年4月)
- 日下洋子『タニヤの社会学 接待から売春まで……バンコク駐在員たちの聖地』(めこん、2000年9月)
- 小暮修三『アメリカ雑誌に映る〈日本人〉 オリエンタリズムへのメディア論的接近』(青弓社、2008年12月)
- 小林進『東南アジアの旅 徹底ガイド』(三修社、1977年4月〔第11版〕)
- 鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』(平凡社新書、2005年12月)
- 圖南商會編『暹羅王國』(經濟雜誌社、1897年9月)
- 中村明人『ほとけの司令官 駐タイ回想録』(日本週報社、1958年6月)
- 中山泰樹『超ビートルズ入門』(音楽之友社、2002年9月)
- 波平恵美子編『伝説が生まれるとき』(福武書店、1991年11月)
- 橋本哲也『ポストコロニアリズム』(岩波新書、2005年1月)
- 長谷川芳郎『リゾートの構図—世界にみるリゾートづくりの発想と手法—』(綜合ユニコム、1987年6月)
- 疋田康行『「南方共栄圏」——戦時日本の東南アジア経済支配』(多賀出版、1995年6月)
- 村上春樹『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです 村上春樹インタビュー集 1997-2009』(文藝春秋、2010年9月)
- 村上春樹(著) 安西水丸(イラスト)『CD-ROM版 村上朝日堂 スメルジャコフ対織田信長家臣団』(朝日新聞社、2001年4月)
- 矢津昌永『新撰外国地理』(丸善、1901年11月)
- 矢野暢『「南進」の系譜』(中公新書、1975年10月)
- 矢野暢『日本の南洋史観』(中央公論社、1979年8月)
- 矢野暢 編『東南アジアと日本』(弘文堂、1991年2月)
- 山田長政顕彰会 編『山田長政資料集成』山田長政顕彰会、(1974年3月)
- 山口誠『ニッポンの海外旅行——若者と観光メディアの50年史』(ちくま書房、2010年7月)
- 『ユリイカ』(「総特集 村上春樹を読む」2000年3月)
- 吉野裕子『ものと人間の文化史 32・蛇 日本の蛇信仰』(法政大学出版局、1984年5月)

論文

- 井上絵里「遠藤周作における歴史小説創作の意味：『王国への道 山田長政』から」（「九大日文」10号、2007年10月）
- 遠藤周作「廃墟と芝居」（「波」1973年11月）
- 川辺純子「戦前タイにおける日本商社の活動——三井物産バンコク支店の事例——」（「城西大学経営紀要」2008年3月）
- 川村湊「自画像としてのクルマ——「眠り」」（『村上春樹をどう読むか』作品社、2006年12月）
- 久保田裕子「王妃の肖像——三島由紀夫『暁のタイ寺』における国表象——」（「福岡教育大学 国語科研究論集」2011年2月）
- 久保田裕子「近代日本における〈タイ〉イメージ表象の系譜——昭和10年代の〈南洋〉へのまなざし——」（「立命館言語文化研究」2010年1月）
- 久保田裕子「言葉は〈出来事〉を超えることができるか——村上春樹「タイランド」論——」（「日本文学」2012年8月）
- 徐忍宇「内なる闇へのイニシエーション——村上春樹「神の子どもたちはみな踊る」論——」（「九大日文」12号、2008年10月）
- 高橋勝幸「タイにおける第二次大戦の記憶——自由タイ、『メナムの残照』、『王朝四代記』を中心に」（「地球宇宙平和研究所所報」2007年12月）
- 館野日出男「村上春樹と三島由紀夫」（『村上春樹スタディーズ2000-2004』若草書房、2005年5月）
- 土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」（「アジア太平洋討究」2003年3月）
- 原田実「「山田長政」伝説を作った侠」（「新潮45」2004年3月）
- 藤原肇『朝日と読売の火ダルマ時代—大ジャーナリズムを蝕むデカダンス』（国際評論社出版事業部、1998年5月）
- 松本常彦「地震のあとで——彼女は何を見ていたのか——」（「九大日文」12号、2008年10月）
- 松本常彦「「ビルマの豎琴」以前」（松本常彦・大島明秀編『九州という思想』花書院、2007年3月）
- メータセート・ナムティップ「日本文学に見るタイ表象——オリエンタリズムのまなざしから観光のまなざしへ——」（「立命館言語文化研究」2010年1月）
- 安田浩一「「買春ツアー」がバレた日本旅行の“厚顔無恥”」（「財界展望」2006年9月）
- 安福恵美子「タイにおける国際観光の諸相——ホスト・ゲスト関係を中心に——」（「国際関係学部紀要」1996年3月）
- 吉川利治「「アジア主義」者のタイ国進出：明治期の一局面」（「東南アジア研究」1978年6月）

タイ語資料

ก่องแก้ว วีระประจักษ์. กระบวนพยุหยาตรา:ประวัติและพระราชพิธี. กรุงเทพฯ:หอสมุดแห่งชาติกรมศิลปากร, 2543.

การท่องเที่ยวแห่งประเทศไทย. 50 ปีท่องเที่ยวแห่งประเทศไทย. กรุงเทพฯ: การท่องเที่ยวแห่งประเทศไทย, 2553.

เขียน วีระวิทย์. รายงานวิจัยเรื่องความสัมพันธ์ทางเศรษฐกิจระหว่างไทยกับญี่ปุ่น (สิ้นสุดปี พ.ศ. 2517). กรุงเทพฯ : สถาบันวิจัยสังคม จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย, 2517,

ชาญวิทย์ เกษตรศิริ, กาญจน์ ละออศรี บรรณาธิการ. 120 ปีความสัมพันธ์การทูตไทย-ญี่ปุ่น: เอเชียตะวันออกเฉียงใต้กับอุษาคเนย์ (2430-2550). สมุทรปราการ : มูลนิธิโตโยต้าประเทศไทยและมูลนิธิโครงการตำราสังคมศาสตร์และมนุษยศาสตร์, 2551.

นพมาตร์ พวงสุวรรณ. รอยยิ้มแห่งมารยา "ฝรั่ง" และการสร้างจินตนาการเมืองไทยในนวนิยายตะวันตกร่วมสมัย. วิทยานิพนธ์ปริญญาดุษฎีบัณฑิต ภาคศึกษารรณคดีเปรียบเทียบ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย, 2551.

ลัดดา แก้วฤทธิเดช. ภาพลักษณ์สยามประเทศที่ปรากฏในวรรณคดีญี่ปุ่นช่วงศตวรรษที่ 17-18. รายงานการวิจัยในโครงการวิจัยทุนพัฒนาอาจารย์ใหม่/นักวิจัยใหม่ กองทุนรัชดาภิเษกสมโภช จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย, 2546.

สรรพสิริ วิริยศิริ. "สัมพันธ์มิตรถล่มบางกอกน้อย" ศิลปวัฒนธรรม. 11, 8. 2533.

อาจินต์ ปัญจพรรค. บอมบ์กรุงเทพฯ. สำนักพิมพ์มติชน. กรุงเทพมหานคร, 2541.